楢葉町

[第3編] 災害

記録誌

語り継ぐ震災、築く未来へ

福島県楢葉町

楢葉町災害記録誌［第3編］語り継ぐ震災、築く未来へ

福島県楢葉町

楢葉町

［第3編］災害

記録誌

語り継ぐ震災、築く未来へ

福島県楢葉町

平成27年9月5日午前零時、楢葉町の避難指示が解除された。

巨大地震、大津波、

平成23年３月11日午後２時46分、M9.0の地震が発生。楢葉町は震度6強の揺れと、高さ

原子力災害により、

10.5mの津波に襲われた。福島第一原子力発電所はINES※レベル7相当の深刻な状況に。

※国際原子力事象評価尺度

写真提供：㈱エアフォートサービス

全町避難を余儀なくされた楢葉町は、

平成23年３月12日、町独自の判断で、いわき市へ全町避難。同月16日、会津美里町へ避難を開始。翌４月22日、町総面積の約８割が警戒区域に指定され立入り禁止に。

さまざまな困難に　立ち向かってきた。

平成24年８月、警戒区域から避難指示解除準備区域へ再編され、国による直轄除染も開始。除染、インフラ復旧などが進展し、平成27年9月5日に避難指示が解除。

避難指示が解除され明かりが灯りはじめたまちで、

楢葉町は「新生ならは」の創造に取り組んできた。

平成28年度に楢葉産の米が震災後はじめて市場に出荷。
畑作物、花き、畜産など各分野で営農が再開されている。
大規模水稲施設や国内最大級の甘藷貯蔵施設など、
生産者の負担軽減と品質の安定化を図る施設の整備も進んでいる。
新たな特産品として力をいれている甘藷は、
食品メーカーとタイアップして一大産地を目指す。

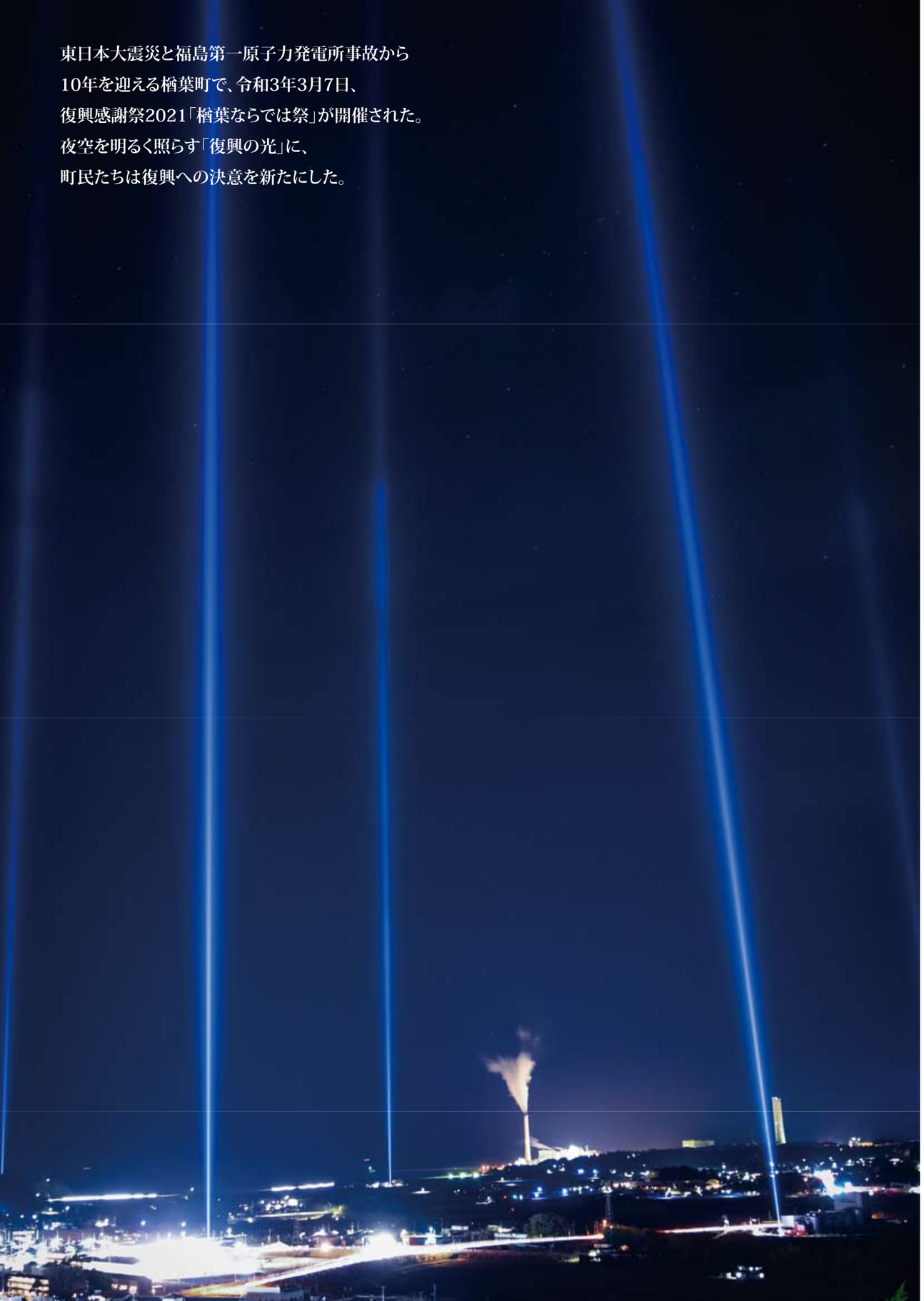
拓く。

輝く。

平成29年4月、楢葉町の小中学校と
こども園が町内で再開した。
楢葉町では、ICT教育の導入や英語教育の充実、
キャリア教育の実践、幼小中の連携など、
楢葉ならではの魅力ある教育環境づくりに
学校・地域・行政が一体となって取り組んできた。
南小学校と北小学校は令和4年度に統合し、
楢葉小学校として新たなスタートを切る。

集う。

「スポーツのまち楢葉」の活気を取り戻すため、
平成31年4月に(一社)楢葉町スポーツ協会を設立。
同月、屋内体育施設「ならはスカイアリーナ」もオープンした。
楢葉町では、ならはスカイアリーナやJヴィレッジなどの
豊富なスポーツ資源を活用し、
町民の健康とコミュニティ再構築に向けた施策を展開。
令和２年4月には楢葉町スポーツコミッションが設立され、
合宿誘致やスポーツツーリズムなどによる
交流人口の拡大を進めている。



東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から
10年を迎える楢葉町で、令和3年3月7日、
復興感謝祭2021「楢葉ならでは祭」が開催された。
夜空を明るく照らす「復興の光」に、
町民たちは復興への決意を新たにした。

楢葉町 記録誌

［第3編］災害

語り継ぐ震災、築く未来へ

福島県楢葉町

楢葉町災害記録誌《第３編》の発行にあたって

平成23（2011）年3月11日　午後2時46分。

日本列島を震撼させた東日本大震災は、国内観測史上最大となるマグニチュード9.0を記録し、当町に震度6強の強烈な揺れをもたらすとともに、その数十分後、推定10.5mもの高さの津波が町沿岸部を襲い、13名の尊い命が奪われました。この震災により亡くなられた方々に、改めて追悼の意を表し、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

さて、私たちの町は地震・津波の襲来にとどまらず、東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故から全ての町民の生活を一変させることとなりました。4年以上にわたる避難生活は、言葉に尽くしがたい辛苦の日々でありましたが、平成27年9月5日の避難指示解除を機に、止まっていた時計の針が再び動き始めました。それ以降、除染やインフラ復旧、生活環境の回復が急速に進み、復興や再生を前進させることができたと考えております。

しかしながら、原子力災害により失われた安全・安心に対する信頼は、そう簡単に回復できるものではありません。生活が一変したことにより、町民の健康維持や、地域が築き上げてきた大切な文化や伝統、コミュニティが失われるなどの弊害もありました。

町では復興計画に「安心できる生活環境の回復」、「生活再建支援策の充実」、「住み良い魅力あるまちづくり」の3つの重点施策を掲げ、まずは、かつての原風景を取り戻すとともに、「新生ならは」の創造を目指し、全町を挙げて取り組んでまいりました。

全町避難解除から今日の復旧・復興、そしてこれからの将来にわたって、震災からの教訓を踏まえたまちづくりを進めていく楢葉町の姿を、しっかりと後世に伝えることを目的に「楢葉町災害記録誌《第3編》」を作成いたしました。

── 当町がどのような被害に遭い、それを乗り越えるために、各要所でどう判断し、行動してきたか ──

この記録誌に記すことが、今後の災害対応、震災からの復旧・復興の一助となれば幸いです。貴重な資料等のご提供をはじめ、ご協力いただきました皆様に心から御礼申し上げます。

結びに、当町はこれからも町民の思いをしっかりと受け止めつつ、直面する困難や苦悩を必ずや乗り越え、住みよいふるさと楢葉を取り戻し、更なる復興を目指してまいります。引き続き、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

令和3（2021）年8月

福島県楢葉町長

松本　幸英

はじめに

本書を発行する令和3（2021）年8月は、東日本大震災の発生から10年5か月が経過しています。

今回の第3編は避難指示が解除された平成27年9月から、令和3年3月までの5年6か月、町が歩んできた軌跡を記したものです。この期間は避難指示が解除され、「楢葉町復興計画」に基づく復興と新たなまちづくりが進められました。復旧・復興施策の多くが実現し、町民の6割が町に戻って生活をするなど、町内には新たな活気と賑わいが生まれつつあります。

本書では、帰町から本格復興期の記録、そして各分野において、町内でご活躍されている皆様のインタビューを交えた楢葉町の現在とこれからの展望を記しています。町では、これからのまちづくりを展望した総合的な町政運営の指針として「第六次楢葉町勢振興計画」を策定し、町の将来像として「笑顔とチャレンジがあふれるまち　ならは」を掲げながら、「ふるさと」楢葉町の良さを活かした、しなやかなまちづくりを進めていく予定です。

楢葉町は災害記録誌第1編と第2編を作成しており、第1編では東日本大震災の発生から、避難指示解除準備区域として見直された平成23年3月11日から平成24年8月までの期間をまとめています。第2編では、警戒区域から避難指示解除準備区域へ再編され、避難指示が解除、帰町に至るまでの平成24年8月から平成27年9月5日までの期間をまとめています。

今回で楢葉町の災害記録誌は第3編目です。第1編、第2編をご覧になった上でお読みいただくと一層震災当時の状況や復興の過程をご理解いただくことができますので、ぜひ震災記録誌第1編・第2編も併せてご覧いただければ幸いです。

『楢葉町災害記録誌　語り継ぐ震災、築く未来へ』第３編　目　次

［導　　入］地震・津波・原子力災害からの復興概要　1

巨大地震、大津波、原子力災害により、……2
全町避難を余儀なくされた楢葉町は、……4
さまざまな困難に立ち向かってきた。……6
避難指示が解除され明かりが灯りはじめたまちで、楢葉町は「新生ならは」の創造に取り組んできた。……8
拓く。……10
輝く。……12
集う。……14

［巻頭グラビア］楢葉町 帰町から本格復興への歩み［2015.09.05-2021.03.31］　22

［第　1　部］「新生ならは」の創造［楢葉町、帰町期・本格復興期の記録］　90

第１章　コミュニティ再生に向けた取組み

住宅再建と町内居住者の推移……93
自治機能の再生・再構築……95
町のイベントや祭りの再生……95
楢葉町ピックアップインタビュー❶伝統文化の再興と継承……96

第２章　災害復旧と土地利用の転換

道路整備状況……101
多重防御による減災……102
JR常磐線の再開状況……103
新たな街並みの開発・整備……103
竜田駅周辺の整備……105
コンパクトタウンの整備……106
産業再生エリアの整備……108
楢葉町ピックアップインタビュー❷町民の想いを形にした交流拠点……110
楢葉町ピックアップインタビュー❸楢葉から次代のエネルギーを牽引……116

第３章　魅力ある教育環境の整備

町内での学校再開と児童・生徒・園児数の推移……121
魅力ある教育環境づくり……122
教育に関する新たな取組み……122
生涯学習環境の整備……123
楢葉町ピックアップインタビュー❹魅力ある学校教育の再生に向かって……124

第４章　産業の再生と新たな展開

営農再開状況……131
営農再開に向けた取組み……132
農業用施設の整備……135
木戸川での漁業の再開……138
既存事業所の再開と新産業の創造・誘致……139
観光産業の復活……141
楢葉町ピックアップインタビュー❺花き栽培という新境地へ……142
楢葉町ピックアップインタビュー❻農業の再生と新たな展開……146
楢葉町ピックアップインタビュー❼交流を生み出す観光振興……150

第５章　福祉の充実と健康の増進

子育て支援、高齢者・障がい者福祉……155
地域医療の再生・充実強化……155
心身の健康づくりと健康管理……156
健康増進とスポーツの振興……156
楢葉町ピックアップインタビュー❽スポーツのまち楢葉の再生と振興……158

第６章　さらなる安全と安心の確保

除染と町内の放射線量……165
放射線モニタリング体制の整備……166
除染廃棄物の搬出……167
防犯・防災への取組み……167
楢葉町ピックアップインタビュー❾さらなる安全と安心を目指す……168

［第２部］帰町した町民が語る「新生ならは」の姿　172

［資料編］東日本大震災と楢葉町 復興、そして未来へ　184

楢葉町 復興10年の軌跡［2011.03.11-2021.03.31］……186
第六次楢葉町勢振興計画……202

巻頭グラビア

楢葉町 帰町から本格復興への歩み

［2015.09.05-2021.03.31］

語り継ぐ震災、築く未来へ

楢葉町 帰町から本格復興への歩み

【2015.09.05–2021.03.31】

【平成27(2015)年】

9月５日、楢葉町の避難指示が解除された。

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から、

約４年６カ月という歳月が流れていた。

平成27年、それは単なる復旧にとどまらない

「新生ならは」の創造へと力強く歩む、

新たな楢葉町の始まりの年となった。

Keyword of Naraha Town 2015.09.19

天神岬スポーツ公園

天神岬スポーツ公園内の楢葉町サイクリングターミナルと
「しおかぜ荘」が平成27年９月19日に営業を再開した。
サイクリングターミナルには洋室やエレベーターが新設され、
「しおかぜ荘」の露天風呂は震災前の約10倍の広さになった。
当日は、リニューアルフェスタが開催され、
町内外から訪れた大勢の家族連れで賑わいを見せた。

木戸川鮭漁

Keyword of Naraha Town 2015.10.18

平成27年10月18日、本州有数の漁獲量を誇る
木戸川の鮭漁が5年ぶりに復活した。
漁協の組合員らが上流から下流に仕掛けた網へ
鮭を追い込む「合わせ網漁」。
赤く色づいた鮭が勢いよく水しぶきをあげた。

Keyword of Naraha Town 2015.10.19

遠隔技術開発センター

福島第一原子力発電所の廃炉に向けた
遠隔操作機器の研究開発拠点となる
楢葉遠隔技術開発センター（モックアップ施設）が、
平成27年10月19日に一部運用を開始した。
運用開始となった研究管理棟は、
バーチャルリアリティシステムなどの設備を備える。
平成28年3月30日には試験棟が完成し、
モックアップ施設の本格運用が始まった。

【2015.09.05–2021.03.31】

【平成28（2016）年】

町制施行から60年という節目の年。

県立大野病院附属ふたば復興診療所※や

地域文化交流拠点「楢葉まなび館」がオープン。

原子力災害対策センターも南工業団地に整備された。

楢葉産米が6年ぶりに市場に出荷されるなど、

町の復興が目に見える形で進んでいった。

※現：ふたば医療センター附属ふたば復興診療所

Keyword of Naraha Town 2016.01.31

ふたば復興診療所

県立大野病院附属ふたば復興診療所ふたばリカーレの
開所式が平成28年1月31日に行われ、
翌２月１日から診療を開始した。
双葉地域の復興と住民の健康を支える医療再生拠点は、
内科と整形外科の2科体制で、
県立医大の医師も診察にあたる。

楢葉まなび館

Keyword of Naraha Town 2016.07.07

平成28年7月７日、旧南小学校校舎に、
地域文化交流拠点「楢葉まなび館」が開館した。
同館は、町が復興計画の中で掲げる
生涯学習による力強い人材形成の核となる施設。
新たな生涯学習の舞台で、
住民の交流と文化活動の輪が広がっていった。
令和４年度には楢葉南小学校と楢葉北小学校が統合し、
新たに「楢葉小学校」の校舎となる。

Keyword of Naraha Town 2016.07.12

原子力災害対策センター

平成28年7月12日、原子力災害の対応拠点となる
原子力災害対策センター（オフサイトセンター）が、
楢葉町と南相馬市で本格運用を始めた。
新たに整備されたオフサイトセンターは、
福島第一原子力発電所事故の際に機能不全に陥った
大熊町の旧センターの教訓を生かし、
通信手段の多重化や放射線防護対策などが強化された。

町制60周年

Keyword of Naraha Town 2016.09.04

楢葉町の町制施行60周年を祝う記念式典が、
平成28年9月4日に楢葉町コミュニティセンターで開催された。
式典では、長崎県壱岐市とのパートナーシップが宣言され、
町勢功労者への感謝状授与や中学生による
「私と町の10年カレンダー」の発表などが行われた。
昭和31年9月1日に楢葉町が誕生してから60年。
ふるさと再生の決意を新たにする1日となった。

楢葉産米

Keyword of Naraha Town 2016.10.05

平成28年10月5日、米の全袋検査が始まった。
基準値を超える放射性セシウム134・137はいずれも検出されず、
楢葉産の米が6年ぶりに市場に出荷されることになった。
本格的に米づくりが再開された平成28年は、
約20haの水田で「天のつぶ」を作付け。
安全性が確認されたことで、
町の基幹産業である農業の再生がまた一歩前進した。

楢葉町 帰町から本格復興への歩み

【2015.09.05–2021.03.31】

【平成29(2017)年】

帰町目標として掲げた「平成29年春」を迎え、

あおぞらこども園と小中学校が町内で再開。

元気な子どもたちの笑い声が町に戻ってきた。

「笑ふるタウンならは」と命名されたコンパクトタウンに

123戸の災害公営住宅が完成し、

「ゆずの里ロードレース大会」も復活。

楢葉の街並みは日を追うごとに輝きを増していった。

学校再開

Keyword of Naraha Town 2017.04.06

平成29年4月6日、町内で小中学校が再開した。
南小23人、北小39人、中学校43人の学び舎は、
平成27年2月に完成した中学校の新校舎。
翌7日には38人の園児を迎え、あおぞらこども園も再開。
福島第一原子力発電所事故で全町避難となった自治体での
学校再開は初めてのことであった。

災害公営住宅

Keyword of Naraha Town 2017.06.27

平成29年6月27日、「笑ふるタウンならは」に
災害公営住宅全123戸が完成した。
町の中心部に位置するこのエリアは、
医療・福祉・商業・交流施設などの
さまざまな生活機能が集積した新たな復興拠点。
災害公営住宅の完成は、利便性が高く、
賑わいのある街並みを形成する第一歩となった。

ゆずの里ロードレース大会

Keyword of Naraha Town 2017.12.03

平成29年12月3日、陸上競技場を会場に
「ゆずの里ロードレース大会」が7年ぶりに復活した。
23回目となる今大会には533人のランナーが参加。
新たなまちづくりが加速する初冬の楢葉路を
県内外のランナーが駆け抜けていった。

楢葉町 帰町から本格復興への歩み

【2015.09.05–2021.03.31】

【平成30（2018）年】

公設民営の商業施設「ここなら笑店街」や、

みんなの交流館「ならはCANvas」が

「笑ふるタウンならは」にオープン。

Jヴィレッジも一部施設で営業を再開した。

生活を支えるインフラがほぼ整い、

住民帰還の原動力となっていった。

楢葉の風

Keyword of Naraha Town 2018.04.18

楢葉町オリジナルの日本酒「楢葉の風」の販売が
平成30年4月18日から開始された。
町内で生産された酒造好適米「夢の香」を、
姉妹都市である会津美里町の「合資会社　白井酒造店」で醸造。
酒づくりプロジェクト発足から約半年を経て、
純米大吟醸酒や特別純米酒などの新酒が完成した。

楢葉市民大学

Keyword of Naraha Town 2018.06.19

平成30年6月19日、楢葉市民大学が開校した。
スポーツ、語学、合唱など、平成30年度の開講講座は
教養・専門講座を合わせた９コースと年３回の公開講座を行った。
市民大学は「町民一人ひとりが先生になる」を基本姿勢に、
力強い人材を育成することを目的としている。

平成30年6月26日、「笑ふるタウンならは」に
公設民営の商業施設「ここなら笑店街」がオープンした。
商業施設には、スーパー、ホームセンター、飲食店、
理容室、クリーニング店など10店舗が出店。
開業を心待ちにしていた住民たちは、
思い思いに買い物や食事を楽しんでいた。
たくさんの笑顔に満ち溢れた“笑店街”の誕生は、
新たな楢葉の始まりを感じさせた。

Keyword of Naraha Town 2018.06.26

ここなら笑店街

みんなの交流館

ならはCANvas

Keyword of Naraha Town 2018.07.30

平成30年７月30日、「笑ふるタウンならは」に
みんなの交流館「ならはCANvas」がオープンした。
館内には、自宅のようにくつろげる「みんなのリビング」をはじめ、
利用者の使い方でいろいろな活用ができる空間が整備された。
町民の想いをもとに設計された交流館には、
何度も訪れたくなるような魅力とこだわりが詰まっている。

楢葉町 帰町から本格復興への歩み

【2015.09.05–2021.03.31】

【平成31・令和元(2019)年】

常磐自動車道「ならはスマートIC」が開通。

屋内体育施設「ならはスカイアリーナ」がオープンし、

Jヴィレッジも全面再開を果たした。

「道の駅ならは」の温泉施設も営業を再開。

交流人口の拡大や地域産業の活性化に向けた

さまざまな取組みが実を結んでいった。

常磐自動車道「ならはパーキングエリア」に接続する
「ならはスマートIC」が平成31年3月21日に供用を開始した。
ETC専用の同ICは、南側の広野ICから約5.3㎞、
北側の常磐富岡ICから約11.1㎞に位置する。
同IC開通により、医療機関への救急搬送時間の短縮や、
関東圏・東北圏からの交流人口の拡大などが期待された。

Keyword of Naraha Town 2019.03.21

ならはスマートIC

Keyword of Naraha Town 2019.04.13

ならはスカイアリーナ

平成31年4月13日、総合グラウンド内に
屋内体育施設「ならはスカイアリーナ」がオープンした。
延べ床面積は約6,600㎡で県内有数の規模を誇る。
町民の健康増進と交流人口拡大の役割を担う同施設には、
体育館や温水プール、フィットネスルームのほか、
キッズルームや会議室などが整備されている。

水稲栽培拠点

Keyword of Naraha Town 2019.04.16

水稲栽培の拠点となる施設が上小塙と下小塙地区に整備され、
平成31年4月16日に落成式が行われた。
完成したのは、米の乾燥・貯蔵・出荷を一貫して行う「カントリーエレベーター」、
年間をとおして一定の温度で玄米を保管する「自動ラック式低温倉庫」、
100ha分の苗を育てる能力を備える「水稲育苗センター」の３施設。
生産者の負担軽減と品質の安定化を図る施設が整備され、
営農再開に向けた取組みは新たな一歩を踏み出した。

Jヴィレッジ

Keyword of Naraha Town 2019.04.20

日本サッカーの聖地であるJヴィレッジが、
平成31年4月20日に全面再開を果たした。
当日は「Jヴィレッジグランドオープンフェス！」が開催され、
Jヴィレッジ史上最多の約２万人が来場する賑わいをみせた。
グランドオープンに合わせてJR常磐線のJヴィレッジ駅も開業。
平成30年7月に一部営業を再開していたJヴィレッジは、
福島復興のシンボルとして新たなスタートを切った。

楢葉町 帰町から本格復興への歩み

【2015.09.05–2021.03.31】

【令和２（2020）年】

県道広野小高線（通称：浜街道）の天神工区が開通し、

「道の駅ならは」の物産館も再開した。

国内最大級の甘藷貯蔵施設の整備や

JR竜田駅の東西自由通路開通・橋上駅舎化など

「新生ならは」の風景が町に広がっていった。

浜街道

Keyword of Naraha Town 2020.03.08

令和2年3月8日、県道広野小高線（通称：浜街道）の
天神工区と井出・波倉工区（一部区間）が開通した。
東日本大震災で津波被害を受けた天神工区は、
町の復興計画や海岸防災林の整備計画を踏まえ、
道路を最大100m程度内陸側に変更。
高さも約７m の盛土構造とし、防波堤の役割も担う。

Keyword of Naraha Town 2020.06.19

道の駅ならは

国道６号沿いにある「道の駅ならは」の物産館が、
令和２年６月19日にリニューアルオープンした。
震災後、双葉警察署の臨時庁舎として使用されていた同施設は、
平成31年4月25日に温泉棟の営業を再開していた。
令和5年春には、「道の駅ならは」とJヴィレッジを
直接結ぶ道路の供用開始が予定されている。

Keyword of Naraha Town 2020.09.14

甘藷貯蔵施設

楢葉町が新たな主力作物に位置付けている
甘藷（サツマイモ）の貯蔵施設と
農業用機械倉庫が前原地区に完成し、
令和2年9月14日に落成式が行われた。
国内最大級となる甘藷貯蔵施設には、
長期保存を可能にするキュアリング室や、
最大1,260t保管できる貯蔵庫などを整備。
耕作放棄地の有効活用と営農再開を促す起爆材として
大きな期待が寄せられている。

JR常磐線の竜田駅東西自由通路と橋上駅舎が完成し、
令和2年11月30日に完成記念式典が行われた。
東西自由通路と東側広場は同日から、
橋上駅舎は翌12月1日の始発列車から供用が開始された。
駅西側は災害時に一時避難ができるよう防災広場を整備。
東側広場にはタクシープールやバス乗降車場などが整備され、
地域の交流拠点としての機能強化が図られた。

Keyword of Naraha Town 2020.11.30

竜田駅新駅舎

楢葉町 帰町から本格復興への歩み

【2015.09.05–2021.03.31】

【令和３（2021）年】

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から10年。

Jヴィレッジが東京五輪聖火リレーのスタート地点となり、

自治体最初のリレー区間として聖火が楢葉を駆け抜けた。

新たに策定された町勢振興計画が掲げる

「笑顔とチャレンジがあふれるまち」を目指し、

楢葉町はさらなる復興に向けてスタートを切る。

復興感謝祭

Keyword of Naraha Town 2021.03.07

楢葉町への数多くの支援に感謝するとともに、
町のさらなる発展を祈念するイベント
「復興感謝祭2021 楢葉ならでは祭 ～輝け！未来へ～」が
令和3年3月7日に開催された。
第一部は楢葉町コミュニティセンターを会場に、
町の復興にご尽力いただいた皆様への善行表彰が行われた。
続いて５人の町民が震災後の歩みと未来に向けての決意を発表。
天神太鼓の演奏やよさこい演舞が会場を熱く盛り上げた。
第二部は会場を「ならはCANvas」に移し、
キャンドル点灯や音楽ライブを開催。
町内６つの施設から放たれた「復興の光」が
「新生ならは」の創造が進む楢葉の夜空を明るく染めた。

楢葉町町長
松本 幸英

Keyword of Naraha Town 2021.03.25

東京五輪聖火リレー

令和3年3月25日、東京2020オリンピック聖火リレーが
福島復興のシンボルであるJヴィレッジからスタートした。
47都道府県を巡る最初の自治体となった楢葉町は、
町役場から「ならはCANvas」までの約1.1㎞をリレーでつないだ。
スタート地点の町役場では「ならは天神太鼓うしお会」と楢葉南北小学校３年生による
力強い和太鼓演奏が行われ、第1走者がスタート。
リレー区間においては、町の花「やまゆり」、木戸川の「鮭」、
一大産地化を目指す「サツマイモ」、町の特産品である「ゆず」など、
町の魅力を紹介する手作りの旗や特別養護老人ホーム「リリー園」の皆さん51名の
笑顔の横断幕、特製の扇子（せんす）でランナーを応援し、
震災からの復興と町民の元気な姿を広く発信した。

そして町は、
新たな復興の
ステージへ。

未曾有の大災害に見舞われた楢葉町は、
復興のフロントランナーとして
「新生ならは」の創造に取り組んできた。
避難指示解除以降、医療・福祉・交流・商業施設などが整備され、
町はかつての賑わいを取り戻しつつある。
東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から10年……。
新たな復興のステージを迎えた楢葉町が目指すのは、
「笑顔とチャレンジがあふれるまち ならは」。
さらなる復興に向けた楢葉町の挑戦が幕を開ける。

第1部

「新生ならは」の創造

［楢葉町、帰町期・本格復興期の記録］

語り継ぐ震災、築く未来へ

第１部「新生ならは」の創造

第１章

コミュニティ再生に向けた取組み

住宅再建と町内居住者の推移
自治機能の再生・再構築
町のイベントや祭りの再生

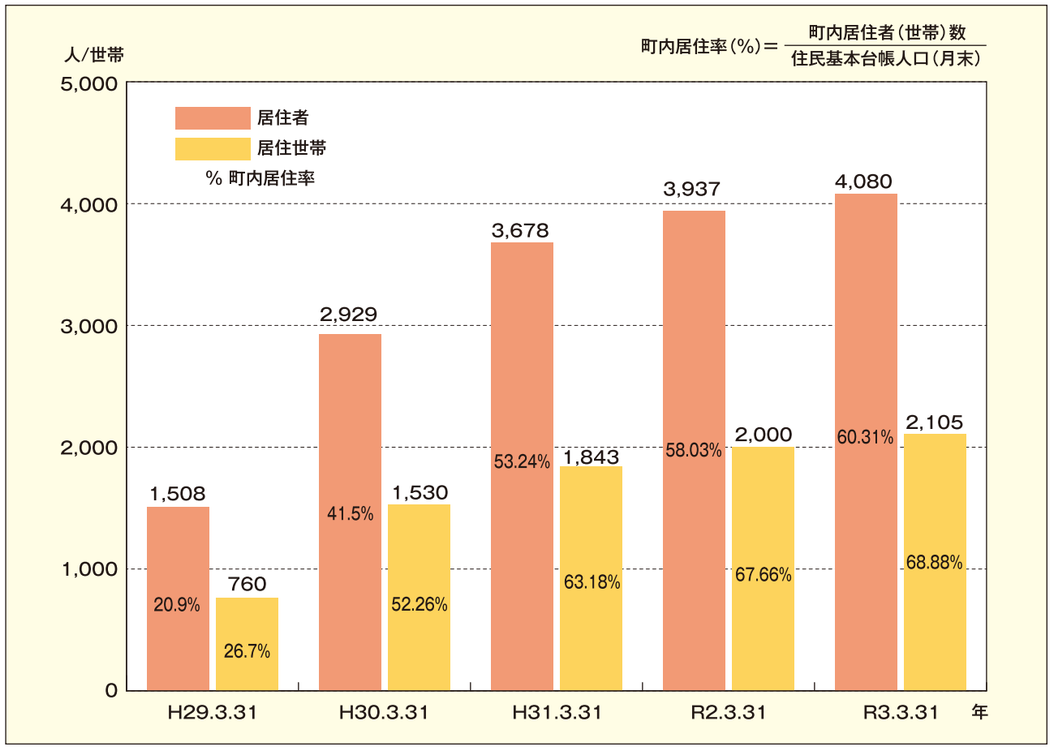
住宅再建と町内居住者の推移

平成27年9月5日、本町に出されていた避難指示が解除された。しかし、震災と原子力災害による被害は、同じ楢葉町の中でも一様ではない。本町は、地震・津波などの被害や長期避難による建物損傷により自宅に戻ることが困難な町民のため、さまざまな方策で住まいの確保を支援してきた。（一社）ならはみらいに設置した楢葉町住宅再建相談窓口では、県・町・事業者で連絡体制（住宅マッチングサポート）を構築し、住宅のリフォームや建て替えを希望する町民に事業者の紹介を行ってきた。帰町準備のために宿泊が必要な町民に対しては平成29年度末まで宿泊費用を支援。自ら自宅再建・住宅確保が困難な世帯には災害公営住宅や町営住宅を整備してきた。

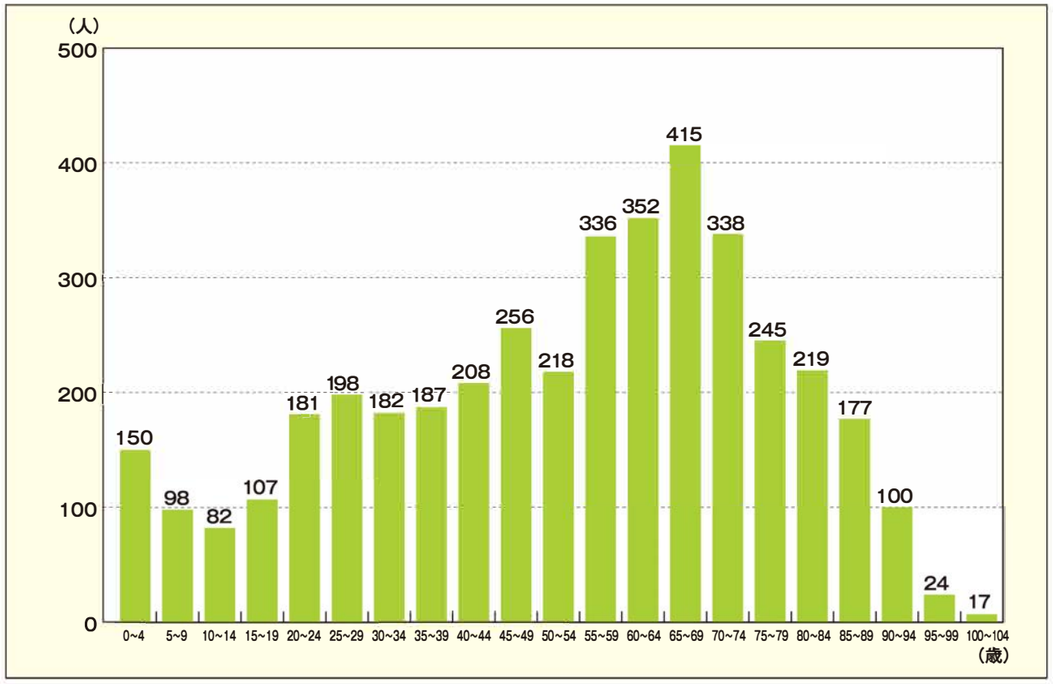
避難指示解除後、町内の居住者数は、年々増加傾向で推移し、令和3年3月31日には、4,080人、町内居住率は60.31%となった。しかし、帰町者の多くが高齢者で、生産人口の不足などの課題もある。本町では、若い世代の帰町を促すとともに、空き家・空き地バンク事業などの移住や定住に向けた施策を展開している。

災害公営住宅（一ツ屋住宅団地）

■ 町内居住者の推移（帰町目標の「平成29年春」から令和3年3月末）



■ 年代別町内居住者（令和3年3月31日現在）



■ 行政区別世帯数・居住者数の推移（帰町目標の「平成29年春」と令和3年3月末との比較）

行政区	世帯数		人　数	
	H29.3.31	R3.3.31	H29.3.31	R3.3.31
上井出	109	266	216	513
下井出	79	243	111	334
北　田	79	359	161	728
大　谷	43	124	82	225
松　館	19	42	33	106
上繁岡	20	62	48	120
旭ケ丘	0	／	0	／
繁　岡	26	74	42	132
下繁岡	23	101	44	190
波　倉	6	37	10	59

行政区	世帯数		人　数	
	H29.3.31	R3.3.31	H29.3.31	R3.3.31
営　団	39	118	70	209
乙次郎	1	2	1	3
上小塙	38	98	75	201
下小塙	99	213	210	519
山田岡	126	252	282	502
前　原	16	50	41	98
山田浜	21	39	50	86
椴木下	0	／	0	／
女　平	11	14	21	31
大　坂	5	11	11	24

※／は行政区の統廃合

自治機能の再生・再構築

長期にわたる避難生活により、楢葉町にあった従来のコミュニティには大きな変化が生じた。避難指示が解除されても帰町の時期はそれぞれで、元通りのコミュニティがすぐに戻るわけではない。本町は行政区による自治機能を再生するため、行政区による班の見直しや行政区の統廃合など、その体制づくりを進めてきた。また、行政区ごとに行政区と町のパイプ役となる担当職員を行政区連絡員として選任し、帰町した町民の把握と行政区の自治活動を支援。こども園にサロン「ふらっと」を開設し元気アップ教室を開催するなど、帰町後の孤立を防ぐ場づくりにも取り組んできた。各行政区内の草刈りを実施する「草刈隊」や、ふるさと楢葉のために何かしたいという意欲をもった町民で組織する「なにかし隊」も活動を行っている。平成30年12月には「竜田駅西側を考える会」が発足し、地区住民を中心に月一回のペースで賑わいづくりについての意見交換を行うなど、本町はコミュニティの再生・再構築に向けた住民主体のまちづくりを進めている。

サロン「ふらっと」の元気アップ教室

町のイベントや祭りの再生

全町避難により本町の歴史・伝統・文化の豊かさが改めて認識された。一度は失いかけた伝統文化を再生し、新たな文化を創造していくことは、本町の復興とふるさと再生に欠かせないものである。本町は町の伝統文化を継承するとともに、各種イベントなど新たな文化の創造に取り組んできた。秋の風物詩として行われていた「秋空散策あるこう会」が平成27年10月に再開。また、平成29年9月にサマーフェスティバルが復活し、同年12月に「ゆずの里ロードレース大会」が7年ぶりに開催された。令和元年12月にはJヴィレッジハーフマラソン大会を初開催。この大会は、本町の「ゆずの里ロードレース大会」と広野町の「ふる里ふれあいマラソン」を統合継承し、復興マラソンとして開催された。震災前、町内各地区で開催されていた盆踊りは平成28年8月に町内の若者で組織する「ほっつぁれDEいいんかいっ?!」による「ほっつぁ～れ盆楽祭」として復活。昔ながらの盆踊りと音楽ライブを融合させた盆楽祭は、新たな夏の風物詩として定着してきた。平成30年4月には県の重要無形民俗文化財である大瀧神社の浜下り行事が復活。正月行事の「鳥小屋」は平成31年に町内3地区（北田・大谷・下繁岡）で、新盆供養の「じゃんがら念仏踊り」も令和2年から大谷地区で再開している。

秋空散策あるこう会

正月行事の「鳥小屋」

NARAHA PICKUP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
❶

伝統文化の再興と継承

木戸八幡神社宮司

宇佐神正道（うさみまさみち）さん

楢葉町では地域の伝統文化が再興の兆しを見せている。
伝統や文化を受け継ぎ次代へつないでいくのは順境の時だけとは限らない。
逆境の中でこそ地域の力が試されている。
木戸八幡神社宮司の宇佐神正道さんも〝心の拠り所〟である
神社を守り続けてきた一人だ。
神社の祭事や地域の伝統文化の再興の様子を宇佐神さんに伺った。

福島県の重要無形民俗文化財に指定されている大瀧神社の浜下り行事

宮司として、心の拠り所を守る

文治２（1186）年の創建と伝えられる木戸八幡神社。神社の入り口から真っすぐに続く参道の先に古木に囲まれた社殿がある。寛文５（1665）年に築造された本殿は町指定文化財だ。神社には元禄９（1696）年に奉納された「松鷹図」をはじめ貴重な絵馬が数多くある。宇佐神さんは木戸八幡神社や大瀧神社など５つの神社の宮司を務める。震災当時、中学校の教師をしていた宇佐神さんは、楢葉の子どもたちが学ぶ避難先で教鞭をとりながら町内の神社を守り続けてきた。

「木戸八幡神社の周りを囲っていた玉垣は地震の揺れで崩れてしまいました。社殿も半壊に近い被害でした。町への出入りが禁止されていた期間は許可を得て境内の片付けを行っていました。また、祭事も略式で執り行ってきました。木戸八幡神社には元旦祭をはじめ、大瀧神社の浜下り行事（以下、浜下り行事）、例大祭、新嘗祭などの祭事があります。浜下り行事や例大祭では、神事の後に神楽の一つである『浦安の舞』を奉納します。小学生の女の子たちが舞姫となり祭事に花を添えるのです。しかし、避難指示が出された状況下では、放射線被ばくの影響を考慮して大人が舞を奉納するなどの対応をせざるを得ませんでした。楢葉町ではじめての特別宿泊が行われたのは平成25年から平成26年の年末年始にかけてのことです。震災前は3,000人ほどの初詣の人出があった木戸八幡神社にも、ご参拝にお越しになる姿が見られました。地震・津波・原子力災害に見舞われた町内で神社をお守りしてきたのは、ここを心の拠り所とされている方々をきちんとお迎えしたいという想いからです」

平成30年に再開した浜下りでは地元の子どもたちによる「浦安の舞」も復活

浜下り行事の神輿渡御が復活

木戸八幡神社が仮宮となる浜下り行事は楢葉町の春の風物詩だ。江戸時代から行われているこの祭りは福島県の重要無形民俗文化財に指定されている。浜下りとは、毎年４月の第二日曜日を中心に木戸川上流にある大瀧神社から御神体を乗せた神輿が山田浜の海岸まで降りてきて潮水をあびる行事である。潮水をあびることで神の力が高まり、農作物や大地を見守る守護神になると言われている。地元では、祭り行列の笛太鼓の音色から〝タンタンペロ様〟とか〝タンペロ様〟とも呼ばれる。

「このような行事は浜通り地方で広く行われています。しかし、楢葉町のようにお祭りの日程が５日間に及ぶものは県内では例がありません。大瀧神社から海岸まで行われる神輿渡御には、各地区の子ども神輿や出羽神社の浜下りも合流して大変賑やかなものとなります。震災翌々年の平成25年４月に浜下り行事を再開しています。しかし、大瀧神社で神事のみを行うという寂しいものとなりました。神輿渡御による浜下り行事が復活したのは平成30年のことです。各地区の行政区長さんをはじめ地域の方々の協力のもとで震災前とほぼ同じ形で行うことができました。中でも小塙義団の存在は大きな力となりました。小塙義団は神社の祭典に協力してくれる奉仕団体です。メンバーは上小塙地区の氏子青年で構成されています。団員は、地域の伝統文化を守っていこうという意識がとても高く、彼らがいなければ神社の祭事は成り立ちません。『神輿を出して浜下り行事を本格的に復活させましょう』と声をあげてくれたのも小塙義団の方々でした」

伝統と文化を次代へつなぐ

平成28年８月、避難指示解除からはじめての夏を迎えた楢葉町で盆踊りが復活した。町内の若手有志が町を元気にしようと企画した「ほっつぁ～れ盆楽祭」である。イベントは、昔ながらの盆踊りとアーティストによる音楽ライブを融合させた内容だ。多彩な屋台も軒を連ね、新たな夏の風物詩として定着してきた。

「毎年７月下旬から９月中旬にかけて櫓を囲んで踊る光景が町内各地で見られました。一般の方は盆踊りと呼んでいますが、お盆の時期にご先祖様を供養するのが盆踊りです。それ以外は櫓踊りと言うのが正しい呼び方でしょう。盆踊りや櫓踊りは、世代を超えた住民の交流の場として地域に根付いていました。『じゃんがら念仏踊り』や『笠踊り』も新盆供養の伝統芸能です。大谷地区の『じゃんがら念仏踊り』は令和２年に復活しました。正月行事の鳥小屋も平成31年から行われるようになりました。楢葉町ではこうした年中行事が徐々に再開しています。私たちは未曾有の災害を経験しました。しかし、そのことを理由に伝統文化を絶やしてしまっては私たちの責務を放棄しているように思えてなりません。なぜなら、私たちの祖先は幾多の困難を乗り越えて伝統や文化を受け継いできたからです。まずは、無理をせず、できる範囲で次代につないでいく。それが、今を生きる私たちの役割だと思っています」

古くから受け継がれてきた文化は、楢葉の人たちをつなぎ、地域を一つにまとめる役割を果たしてきた。伝統文化の再興は、地域コミュニティの再生には必要不可欠だ。一方で、引き継いだ人たちが地域の今を反映して新たな文化を創っていくことも大事なことである。伝統文化と新たな文化の再構築を図る楢葉町では、震災や原子力災害から得た教訓も町特有の文化としてとらえ後世へ伝承していく取組みが進められている。

町内各地区で行われていた盆踊りも徐々に復活してきている（北田地区）

第２章

災害復旧と土地利用の転換

道路整備状況
多重防御による減災
JR常磐線の再開状況
新たな街並みの開発・整備
竜田駅周辺の整備
コンパクトタウンの整備
産業再生エリアの整備

道路整備状況

平成27年３月、常磐富岡IC～浪江IC間が開通し、常磐自動車道が全線開通した。全線開通にあわせ「ならはパーキングエリア」が設置され、平成31年3月21日には「ならはパーキングエリア」に連結する「ならはスマートIC」が供用を開始した。24時間運用の同ICは休憩施設接続型のETC専用ICとして、住民の生活環境や利便性の向上、観光来訪促進による経済活性化、救急医療活動の支援などの期待が寄せられている。

地震や津波で被害を受けた国道・県道・町道は、町民の帰町に先立ち本格的な復旧工事を進め、復旧作業は概ね完了している。また、震災前から着手していた取組みについては事業を再開し整備を進めている。令和2年3月８日、県道広野小高線の天神工区（南地区浄化センター前から北田上ノ原までの約2.7㎞）と井出・波倉工区（一部区間約1.7㎞）が開通。道路を最大100ｍ程度内陸側に変更した天神工区は、高さ約７ｍの盛土構造とし防潮堤としての役割も担っている。令和3年3月19日には、井出工区の一部区間（580ｍ）も供用を開始した。県道小塙上郡山線（井出字向ノ内～井出字浄光東）と県道下川内竜田停車場線（井出字鹿島～井出字八石）は令和4年3月の完成予定で整備が進行中。町道の中満・天神岬線（北田字上ノ原地内）と波倉線（井出字浄光東～波倉字原）についても工事を進めている。

平成31年３月に供用を開始した「ならはスマートIC」

令和２年３月に県道広野小高線の天神工区が開通

多重防御による減災

10mを超える高さの大津波が襲来し、本町沿岸部の住宅や農地は壊滅的な被害を受けた。また、13人もの尊い命が失われ防潮堤も大きく被災した。前原地区・山田浜地区海岸の防潮堤復旧工事と木戸川および山田川の河川堤防の工事は平成27年7月に着工し平成30年3月に完了した。新たな防潮堤は復旧前の6.2mから8.7mの高さとなった。防潮堤整備にあたっては、震災前の防潮堤への不安の声や、津波・高潮災害への意識の醸成、景観への配慮などを踏まえ、南地区浄化センター以北は、緩傾斜堤として整備が進められた。本町では、県道広野小高線（通称：浜街道）の盛土や海岸防災林・避難路・避難施設などのハード面の整備に加え、避難計画や防災教育などのソフト面の施策を総動員する多重防御の考え方で減災に取り組んでいる。

防潮堤工事は平成27年７月に着工

新たに整備された防潮堤は8.7mの高さとなった

JR常磐線の再開状況

JR常磐線は、平成26年6月に広野～竜田間が復旧し、平成29年10月21日には、竜田～富岡間が復旧した。平成31年4月20日、Jヴィレッジの全面再開にあわせて木戸～広野間にJヴィレッジ駅が臨時駅として開業。Jヴィレッジへのアクセスが大幅に改善された。令和2年3月14日には富岡駅～浪江駅間が復旧し、JR常磐線が全線で運転を再開。同日、臨時駅のJヴィレッジ駅も常設化された。また、竜田駅に東西自由通路と橋上駅舎を新設。木戸駅東側には東屋や駐車場などを整備し、交流広場として供用を開始している。

JR常磐線にJヴィレッジ駅を新設

新たな街並みの開発・整備

本町は平成26年4月に「楢葉町土地利用計画アクションプラン」を策定した。これは、復興計画で掲げた土地利用計画を具体化したものである。本プランの全体構想では、今後の土地利用の方向性を次のように示している。

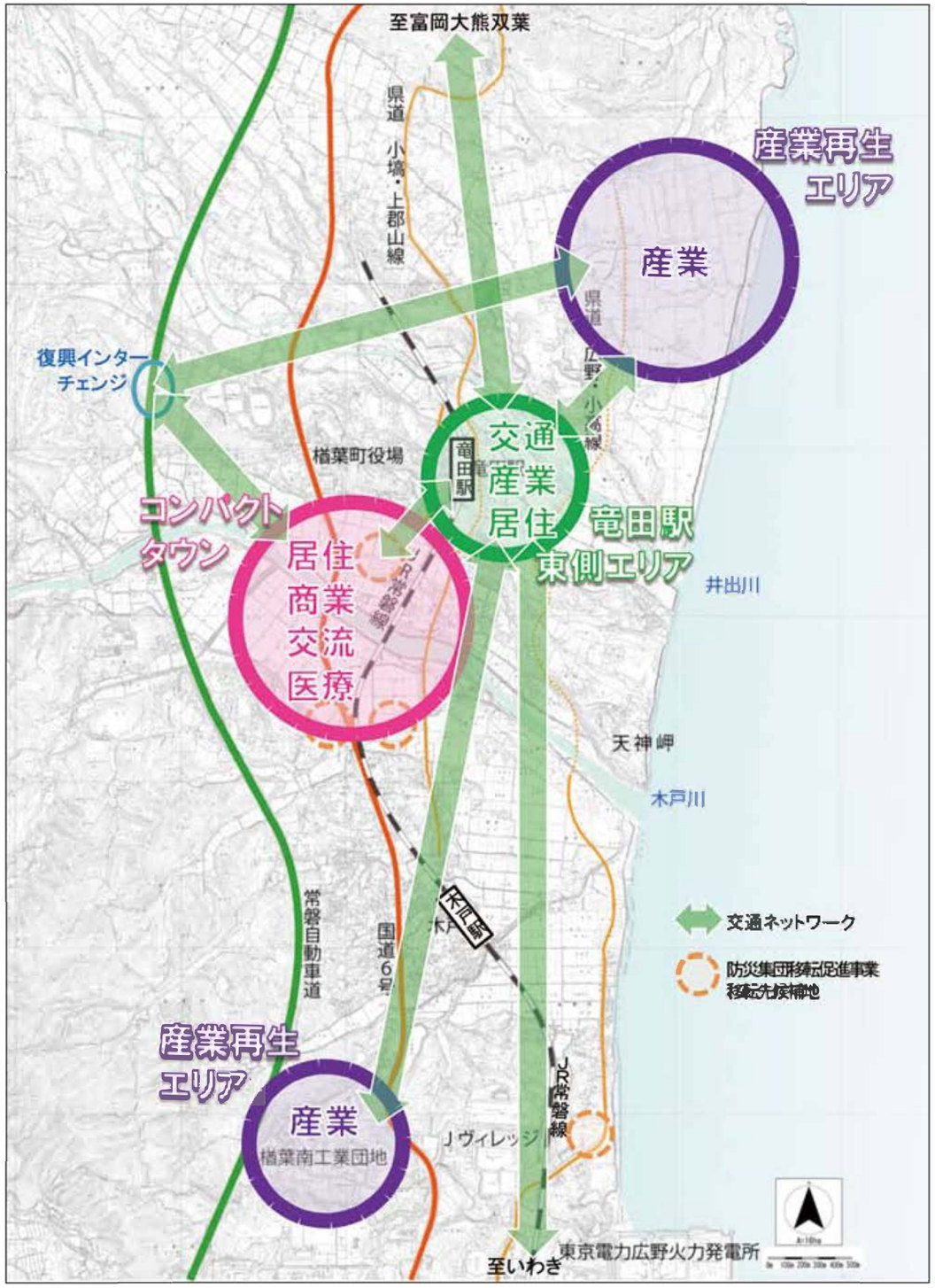
今後の土地利用の方向性

楢葉町及び双葉郡の復興を最前線で支える
「多様な人々が集う生活・産業・交流拠点」の形成
～町民、長期避難者、復興従事者、町外からの観光等来訪者等に
『活力』と『明るい未来』を実感させるまちづくり～

また、その実現に必要となる骨格軸として、南北方向の幹線道路の強化と、これをつなぐ東西方向の路線の整備による格子状の道路ネットワークの構築を目指している。

本町では本プランで検討した基本計画を基に「竜田駅東側エリア」「コンパクトタウン」「産業再生エリア」の3つのエリアについて整備を進めている。

■ 楢葉町土地利用計画アクションプラン･土地利用の方向性



竜田駅周辺の整備

竜田駅東側エリアは、町民や廃炉関連企業などの生活・事業を支援する多様な機能の結節拠点を目指している。本町は、以下に示す３つの基本方針に基づいて竜田駅東側エリアの整備を進めている。

竜田駅東側エリアに係る基本方針

地域の活動における多様な機能の結節拠点
- 【方針１】企業活動拠点の充実
- 【方針２】企業就業者のための居住環境・生活サービス機能の充実
- 【方針３】交通結節点形成による地域住民の足の確保

本町とJR東日本が令和元年5月から整備を進めてきた竜田駅の東西自由通路と橋上駅舎は令和2年11月に完成した。東西自由通路と東側広場は同月11月30日から、橋上駅舎は翌12月1日の始発列車から供用が開始された。駅西側は災害時に一時避難ができるよう防災広場を整備。東側広場にはタクシープールやバス乗降車場、駐車場、駐輪場などを完備し、地域の交流拠点としての機能を強化した。

駅東側エリアでは平成29年6月に企業宿舎350戸が完成。事業用地（約２ha）では、４事業者が操業を始めている。残る事業用地も廃炉関連事業者の事務所などが進出する予定である。また、駅東側エリアではホテルを建設する事業者の誘致も進めている。一方、家屋解体による空洞化が著しい駅西側市街地については、住民参加によるワークショップを開催。平成30年3月に「竜田駅西側復興まちづくり計画」を策定し整備に取り組んでいる。

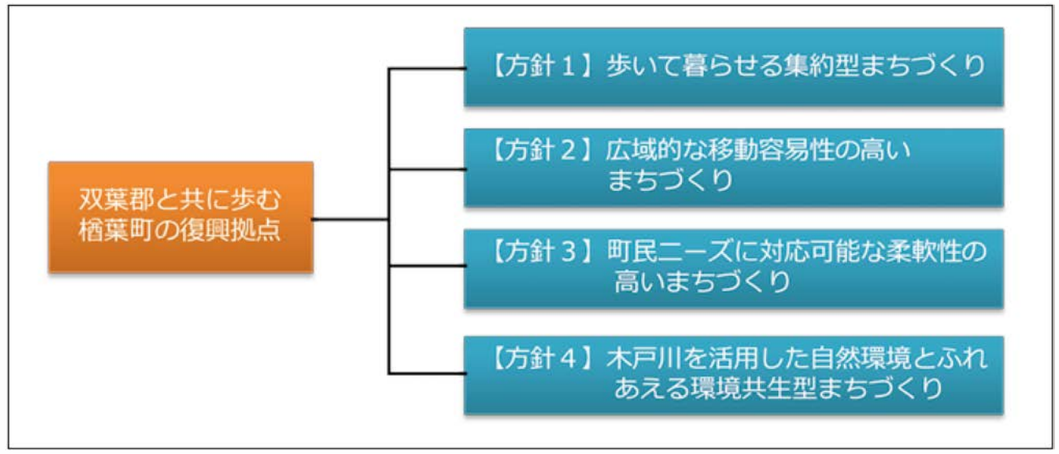
JR竜田駅に完成した橋上駅舎

東口駅前にタクシープールやバス乗降車場、駐車場、駐輪場などを整備

コンパクトタウンの整備

コンパクトタウンは、町民や町内事業者の暮らしの再生と新たな居住を促進する復興拠点を目指している。本町は、以下に示す4つの基本方針に基づいてコンパクトタウンの整備を進めている。

コンパクトタウンに係る基本方針



本町は、コンパクトなまちづくりの核として、国道6号と町道中満・天神岬線に沿って、日常生活のサービス機能や住宅などを集約した新しい街並みを整備している。利便性が高く、賑わいを生むこのエリアは公募により「笑ふるタウンならは」と命名された。「笑ふるタウンならは」の商業施設、交流施設、住宅、医療施設、スマートコミュニティ事業の整備状況は次のとおりである。

コンパクトタウン「笑ふるタウンならは」

1.商業施設

生活に欠かせない買い物環境を整備するため、平成30年6月26日に公設民営の商業施設「ここなら笑店街」を開業。スーパー、ホームセンター、飲食店、ベーカリー、理容室、クリーニング店などの計10店舗（令和3年3月末現在）が営業している。「ここなら笑店街」のオープンにより町役場前に設置されていた共同店舗「ここなら商店街」はその役目を終えた。本町は、「ここなら笑店街」をさらに利便性の高い施設にしていくとともに、町全体の商業発展を推進している。

「笑ふるタウンならは」内にオープンした「ここなら笑店街」

2.交流施設

交流施設の建設にあたり、町民参加型のワークショップを開催。平成30年7月30日に町民の想いをもとに設計したみんなの交流館「ならはCANvas」を開館した。交流館は、地域や世代を超えた、出会い・交流・つながり・発見・挑戦が生まれる場づくりを通じて、“こころの復興”を象徴する施設を目指している。館内には自宅のようにくつろげる「みんなのリビング」をはじめ、キッズスペース、多目的室、和室、ワークスペース、調理室、サウンドルーム、バンドルームなどを整備。縁側や階段デッキ、緑地広場はさまざまなイベントに活用されている。

みんなの交流館「ならはCANvas」

3.住　　宅

地震・津波被災者向けの災害公営住宅のほか、町内外の住民を受け入れる分譲住宅地を整備。平成29年6月に中満南災害公営住宅123戸が完成。平成30年３月23日には寺脇地区災害公営住宅17戸も完成した。一方、分譲住宅地は平成29年１月に第１工区（宅地８区画）が完成。平成30年10月には第２工区（戸建て31区画、集合住宅６区画）を整備した。

4.医療施設

「笑ふるタウンならは」では、平成28年2月1日に県立大野病院附属ふたば復興診療所（現：ふたば医療センター附属ふたば復興診療所、愛称：ふたばリカーレ）が診療を開始。同年7月1日、蒲生歯科医院も町内での診療を再開した。令和2年6月8日には「ならは薬局」もオープンしている。

5.スマートコミュニティの構築

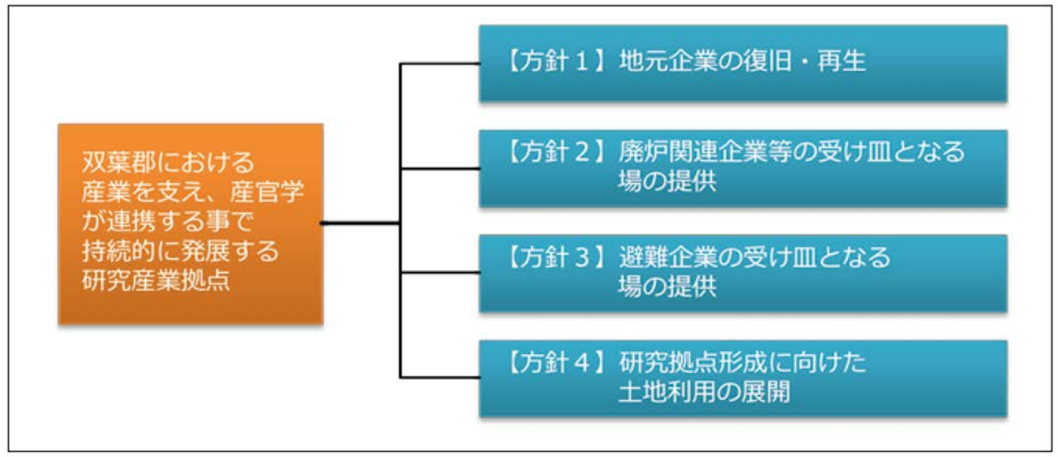
「笑ふるタウンならは」では、災害公営住宅・商業施設・交流館などに太陽光発電と蓄電池を設置し、災害に強いまちを実現している。また、発電量や電気使用量を制御するなど、再生可能エネルギーとエネルギーマネジメントを活用したスマートコミュニティ※事業を展開している。本町は「笑ふるタウンならは」に設置した太陽光発電の余剰電力をふるさと納税の返礼品の一つとして追加。ふるさと納税の返礼品に地域産電気を採用した例は、東北地方では初めてのケースとなった。

※スマートコミュニティ：家庭やビル、工場、交通システムなどをITネットワークでつなぎ、地域でエネルギーを有効活用する次世代の社会システム

産業再生エリアの整備

産業再生エリアは、町民の継続的な就労の場を創出する研究産業拠点を目指している。本町は、以下に示す4つの基本方針に基づいて産業再生エリアの整備を進めている。

産業再生エリアに係る基本方針



震災前、19社の企業が集積していた楢葉南工業団地は、令和3年3月末現在で31社が操業している。本町は再開を断念した企業の用地を買い取り、新たに進出を希望する企業に供給するなど、南工業団地の再生を進めてきた。平成28年4月には、福島第一原子力発電所の廃炉を推進する楢葉遠隔技術開発センター（モックアップ試験施設）が運用を開始している。モックアップ試験施設の研究管理棟は、廃炉作業の作業計画検討や作業者訓練などに活用可能なバーチャルリアリティシステムをはじめ、ロボットシミュレータ、音響映像設備、最大100人規模の会議に利用可能な多目的室などを備えている。一方、試験棟はロボットなどの性能評価の試験設備を備え、実規模モックアップ試験や各種イベントに活用することができる。本町はモックアップ試験施設を中核として、福島イノベーション・コースト構想※に示されているさまざまな分野の人材育成を担う拠点の誘致を目指している。

復興計画で北部新産業ゾーンとして位置付けたエリアは、災害廃棄物の減容化処理を行う仮設焼却施設や固形化施設が立地するなど、町の復興を支える地域である。本町はこのエリアに楢葉北産業団地を新たに造成。国内最大級の結晶系太陽光モジュール製造工場やガラス製造工場などを誘致してきた。自立・帰還支援雇用創出企業立地補助金、福島復興再生特別措置法による課税の特例、福島県原子力発電施設等周辺地域企業立地支援事業費補助金などの企業向け補助・優遇制度に加え、本町独自の楢葉町操業奨励金（工場の床面積に応じて奨励金を交付）を創設。企業進出に伴う就労機会の確保に努めている。

※福島イノベーション・コースト構想：浜通りの産業復興のため新たな産業創出を目指す構想。廃炉、ロボット・ドローン、医療関連、エネルギー・環境・リサイクル、農林水産業、航空宇宙の６つを重点分野と位置付けている。

楢葉遠隔技術開発センターのバーチャルリアリティシステム

NARAHA PICKUP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
❷

町民の想いを形にした交流拠点

一般社団法人　ならはみらい
森雄一朗（もりゆういちろう）さん

避難生活を通じ、本当の豊かさや安全・安心は
人と人とのつながりによってもたらされることを改めて実感した楢葉町。
町の復興には地域や世代を超えた交流とつながりが不可欠だ。
みんなの交流館「ならはCANvas」は、連携・交流促進の中核拠点となる施設である。
交流館の指定管理者である「（一社）ならはみらい」の森雄一朗さんに、
「ならはCANvas」の歩みと今後の展望について伺った。

平成30年７月にオープンした、みんなの交流館「ならはCANvas」

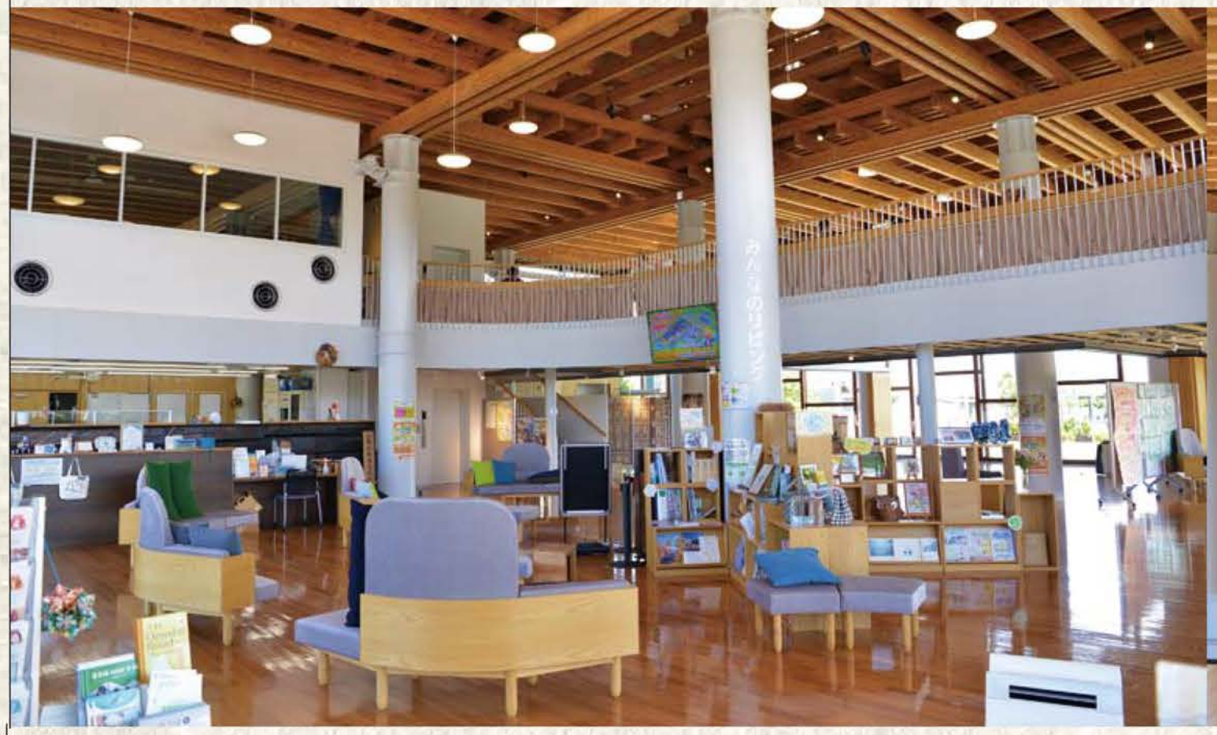
ワークショップで町民の想いを募る

「ならはCANvas」は、楢葉町の中心部にあるコンパクトタウン「笑ふるタウンならは」内に建設された交流施設である。町が主催する全９回のお茶飲みワークショップで語られた参加者の想いをもとに設計され、平成30年７月に開館した。施設名である「CANvas」は、絵を描くキャンバスを意味していて、白いキャンバスに絵を描くように、使う人それぞれがこの施設を創っていってほしいという願いが込められている。

軒を大きく張り出した２階建の建物は、外壁面がガラス張り。内部は中央が吹き抜けで間仕切りも少ない。緑地広場へつながる大きな窓ガラスを開放すれば、屋内外を一帯の空間として利用することもできる。まさに交流拠点にふさわしい開放的な佇まいだ。施設建設は、国などからの補助金をほとんど使わず

交流館建設にあたり全９回のワークショップを開催

交流館に対する想いを参加者それぞれが付箋紙に書き込む



みんなの交流館「ならはCANvas」１階。オープンな空間で外からも中の様子が分かるようにガラス張り、吹き抜けのつくりをしている

みんなの交流館「ならはCANvas」２階。郭公山が見える和室の入口には津波で被災した家屋の柱が使われている

寄附金等を活用しながら進められた。公共施設は、行政や専門家などが中心となり建設を進めるというイメージが一般的だ。しかし、楢葉町には、復興を象徴する施設として、楢葉を知り尽くした町民の考えをできるだけ取り入れて交流館をつくりあげていきたいという想いがあった。ワークショップ開催から、設計、建設、使用要領に至るまで、町民の想いに寄り添いながら町は交流館の整備を進めてきた。住民の合意形成を経てつくられた施設のモデルケースとして全国各地からの視察も多い。交流館の建設に至るまでの経緯を森さんは次のように語る。

「町民の方々の想いを聞いて、それを形にしていくのが本来の公共施設のあるべき姿なのではないかという話から施設づくりがスタートしました。ワークショップは、お子さんからお年寄りまで、さまざまな世代の方々に参加していただきました。〝楢葉のいいところ・好きなところ〟、〝これからの楢葉に期待すること〟など、施設づくりの呼び水になるようなテーマを設け意見交換をしていただきました。そこで出された想いを具体的に設計に落とし込んで図面をつくりあげていきました。『ならはCANvas』は、何度も来たくなるような魅力とこだわりが詰まった施設です。しかし、施設の完成がゴールではありません。白いキャンバスに絵を描くように、使う人それぞれが交流館をつくっていってほしいと思っています」

交流館は１軒の大きな家

施設内にはサークル活動や展示等に使用できる多目的室をはじめ、和室、電源・フリーWi-Fi完備のワークスペース、作りたての料理を窓から手渡しすることができる調理室など、利用者の使い方でいろいろな活用ができる空間が整備されている。映像上映や楽器演奏が可能なサウンドルームの隣には防音のバンドルームも併設。緑地広場へと続く縁側・階段デッキではコンサートなどのさまざまな屋外イベントが開催されている。

「交流館には町民の想いを形にした工夫やこだわりが随所に散りばめられています。ワークショップで交流館は〝１軒の大きな家〟というイメージが生まれました。例えば、入り口を入ると『みんなのリビング』と名付けられたスペースがあります。ここはお家のリビングのようにソファに腰掛けながら一人で本を読んだり、友人とお茶を飲みながらお話をしたりすることができる場所です。リビングの棚には町民の方々のハンドメイドの作品を展示しています。サークル活動などで創作した作品を展示することで創作意欲の刺激になればとの配慮からです。また、１階には屋内で子どもたちが遊べる場所が少ないという声を受けてキッズスペースも整備してあります。その隣に、大人たちが子どもたちを温かく見守れるように間仕切りをなくした和室を設けています。そこでは『お子さんを見ててあげるからお買い物してきていいよ』とお母さんに声を掛けるお年寄りの方もいます。２階にある和室は、郭公山（ほととぎすやま）が見える和室が欲しいという声から生まれたものです。その敷台等には震災の記憶を風化させないために津波被害を受けた家屋の古材が使用されています。ハード面だけでなく施設利用の細かいルールがないことも大きな特徴です。施設の使い方は利用者みんなで決めていくというのが交流館の運営方針です」

みんなの交流館「ならはCANvas」では、町内の団体による作品展示やワークショップが行われている

多様な人々の交流を促進

森さんは立命館大学在学中から楢葉町の復興支援活動に取り組んできた。卒業後は地元群馬の銀行に就職。しかし、楢葉のために働きたいという想いが募り楢葉町への移住を決断した。帰町が進む楢葉町では地元住民に加え、森さんのような移住者、進出企業の従業員等、多くの人が暮らしの一部または全体を楢葉町で過ごしている。そうした多様な人々の交流を促進していくのも楢葉町の課題だ。

「これからのまちづくりは地元の方や進出企業等で働く方々を含めて進めていかなくてはなりません。そこで平成31年４月に立ち上げたのが『楢葉町新たなコミュニティづくり懇話会（以下、懇話会）』です。懇話会では、進出企業や地元の商工会、住民代表などが参加して新しいコミュニティの形を見つけるための活動に取り組んでいます。地元の方の中には進出企業のことがよく分からない人もいます。一方で進出企業で働いている方も楢葉のことを知る機会が少ない状況でした。まずはお互いの距離を縮めて、そこから一緒に活動できるフィールドを見つけていこうという流れで進んでいます。地元の方や移住・定住をされた方、そして仕事のために楢葉町へ通われている方など、さまざまな方に交流館を利用してほしい。そして、利用者の工夫やアイディアでいろいろな使い方をしていただき、交流館の可能性をどんどん広げていって欲しいと思っています 。以前、子どもたちが勉強している姿を見て、大人たちが勉強を教えるサポート会を開くといった動きがありました。この交流館での出会いをきっかけに、町内、そして町外へと新しい取組みや動きが波及していけばいいと思っています」

交流館は、平成30年度全建賞［特別枠建築部門］をはじめ、第40回東北建築賞特別賞や第13回JIA東北住宅大賞2019優秀賞を受賞。令和２年には公益財団法人日本デザイン振興会よりグッドデザイン賞も受賞した。人が集う開放的なデザインや、町民参加による設計プロセスが評価されてのことだ。出会い・交流・つながり・発見・挑戦が生まれる場づくりを通じて〝こころの復興〟の象徴的な施設を目指す「ならはCANvas」。楢葉町では、町民の想いが一つになって生まれた交流館を拠点に人と人とのつながりを大切にした復興が進んでいる。

笑ふるタウン２周年を記念したイベントを開催

復興感謝祭ではサーチライトとキャンドルが夜空を明るく彩った

NARAHA PICKUP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
3

楢葉から次代のエネルギーを牽引

アンフィニ 株式会社
かわさきとしひろ
川﨑俊弘さん

楢葉町が土地利用計画アクションプランに基づき整備を進めている
３つのエリアの一つが産業再生エリアだ。
平成29年７月６日、北産業団地内で太陽光パネルの製造・販売などを手掛ける
アンフィニ株式会社（大阪市浪速区）が福島工場を稼働させた。
楢葉町から日本の再生可能エネルギー市場を牽引する
同社・福島復興推進部の川﨑俊弘さんを訪ねた。

平成29年７月に北産業団地内で福島工場を稼働させたアンフィニ株式会社

雇用をつくり復興を支援

震災前の楢葉町は、多くの町民が原子力発電所の関連産業に携わっていた。また、町の財政基盤も原子力発電所の立地を前提としてきた。今後、原子力だけに頼らない町になるためには、将来を見据えた新しい産業の創造と誘致が急務であった。楢葉町は企業の進出を受け入れるエリアを拡大するため、従来からある南工業団地に加え北産業団地を整備。そこに進出した企業がアンフィニ株式会社だ。

「福島県は2040年に県内エネルギー需要の100パーセントを再生エネルギーで供給するビジョンを掲げています。その福島県で再生エネルギー製品をつくり、さらに雇用を生むことで福島の復興の役に立ちたいと弊社は考えていました。平成28年９月に誘致のあった楢葉町と工場立地協定を締結し楢葉町に新工場を建設することになりました。北産業団地に進出した企業は弊社が最初です。新工場は結晶系太陽光パネルでは国内最大級の規模を誇ります。新工場稼働にあたっては地元の方々を60人以上採用しました。弊社の強みは、海外大手メーカーとは一線を画した小ロットで特徴的なパネルの開発・製造ができることです。郡山市にある産総研（産業技術総合研究所福島再生可能エネルギー研究所）と共に融雪機能を備えた太陽光パネルも開発しました。現在、電力会社が一定価格で電力を買い取る固定価格買取制度（FIT）の後を見据えて、太陽光パネルと蓄電池をセットにした自家消費型システムの展開に力を入れています」

楢葉町と包括連携協定を締結

福島工場の敷地面積は約１万坪、２階建ての工場建屋の延床面積は約5,000坪。生産能力

アンフィニは楢葉町と包括連携協定を締結。メガソーラーを設置した工場には最大300人の町民の受け入れが可能

は年間300MWまで拡張が可能だ。また、工場屋根上に出力約1.5MWのメガソーラー（大規模太陽光発電所）が設置され、容量約1.2MWh（出力１MW）の蓄電池システムが併設されている。

「弊社は令和元年10月に楢葉町と『災害対策及び地域活性化に関する包括連携協定』を締結しました。協定の内容は、災害時における指定避難所の提供、指定避難所における衣食住や災害情報の提供、地域活性化などの３項目です。福島工場ではメガソーラーで発電した電力を工場で使うことができます。食堂・休憩室・シャワー設備なども整っているので、災害時に最大300人の町民の方々を受け入れることが可能です。また、地域の清掃活動や機能別消防団員などへの参加をとおして楢葉町の復興に貢献していきたいと考えています」

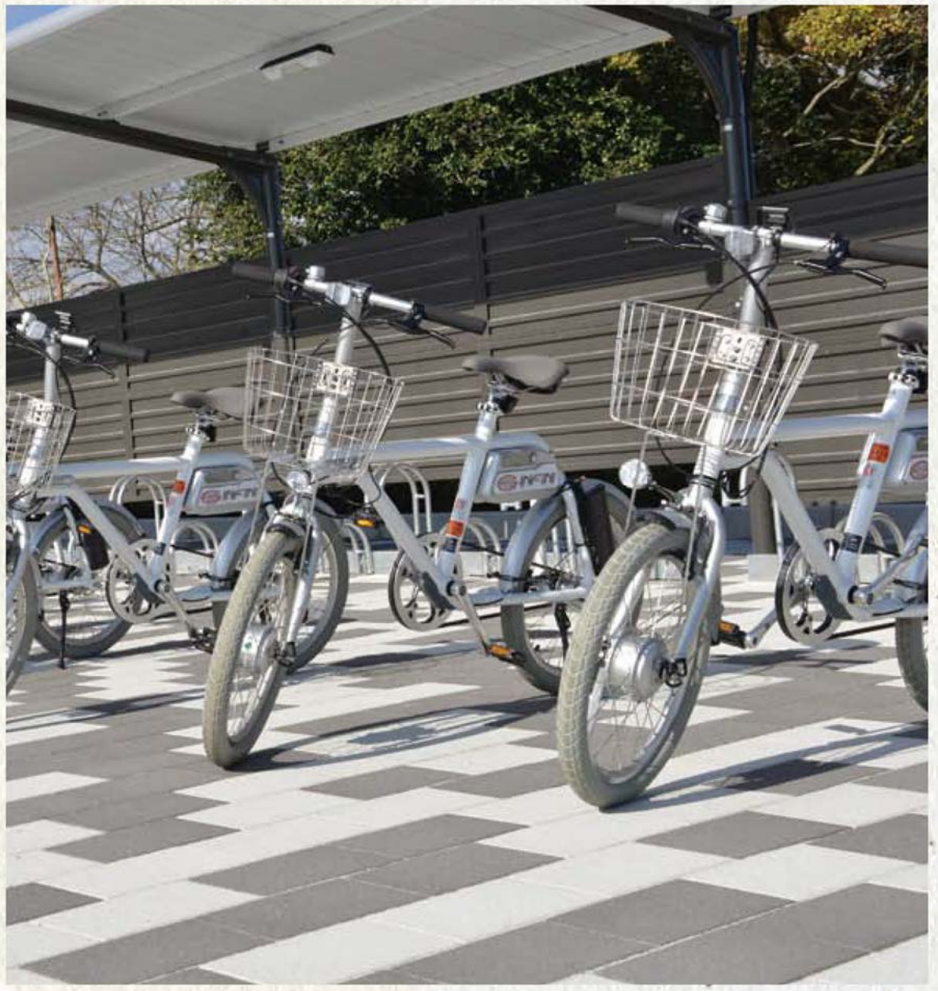
さまざまな事業展開で新たな風を吹き込む

包括協定を締結したことを機に、アンフィニは町のさまざまな課題に対して楢葉町と連携を図っている。太陽光パネルを使った大容量簡易型ポータブル電源の開発もその一つだ。また、令和２年８月に楢葉町と共同で楢葉町産の電気をふるさと納税の返礼品とする取組みを開始した。同年11月には次世代シェアサイクル事業である「ならはsolar e-bike」もスタート。町内５カ所（JR竜田駅、ならはみらい、女平集会所、JR木戸駅、JR Jヴィレッジ駅）にサイクルポートを設置。電動自転車の充電には福島工場のメガソーラーで発電した電気を使用している。

「震災の際、楢葉町は避難所などで電気の確保に苦労されたと聞きました。そこで開発したのが折りたたみ太陽光パネルを使った防災充電キットです。持ち運びが可能な電源として、必要な時に、必要な場所で、誰でも簡単に電気をつくることが可能な製品です。災害や停電時の非常用電源として、楢葉町役場にも５台ほど設置しています。返礼品の電気は、楢葉町が復興拠点として整備した『笑ふるタウンならは』にある商業施設と災害公営住宅に取り付けた太陽光発電でつくられています。ここで発電した余剰電力の一部を弊社が寄附した方に送る仕組みです。シェアサイクル事業についても町民や観光客の足として楢葉町の活性化の一助になればとの考えで取り組んでいます」

楢葉町へのふるさと納税は、15万円以上の寄附で平均的な４人世帯３カ月分相当、29万7,000円以上の寄付で半年分に相当する電気が返礼品となる。電気の返礼品は全国的に珍しく、東北地方では初めてのケースとなる。再生可能エネルギー事業者が個別の自治体に対してシェアサイクル事業を行う事例も全国的には珍しい。

再生可能エネルギーの普及、そして被災地の復興と災害対応の両面からさまざまな事業を展開しているアンフィニ。福島第二原子力発電所の廃炉が決まったこともあり、同社を始めとする新たな風を吹き込む進出企業への楢葉町民の期待は大きい。



令和２年11月に次世代シェアサイクル事業「ならはsolar e-bike」をスタート

第１部「新生ならは」の創造

第３章

魅力ある教育環境の整備

町内での学校再開と児童・生徒・園児数の推移
魅力ある教育環境づくり
教育に関する新たな取組み
生涯学習環境の整備

町内での学校再開と児童・生徒・園児数の推移

平成29年4月6日、いわき市の仮設校舎で教育を行ってきた本町の小中学校が6年ぶりに町内で再開した。楢葉南小学校23人、楢葉北小学校39人、楢葉中学校43人の計105人の児童・生徒が、改築の完了した中学校校舎で小中連携型の教育をスタートさせた。翌7日には38人の園児を迎えあおぞらこども園が町内で再開。福島第一原子力発電所事故で全町避難となった自治体での学校再開は初めてのことであった。南小と北小については児童数の減少に加え、校舎や小中連携のあり方などについて検討が重ねられた。その結果、令和2年7月28日に開催された楢葉町総合教育会議において、2校の統合時期を令和4年度とし、校舎も統合時期と同じく令和4年度から旧南小学校（現：楢葉まなび館）とする方針を決定した。新たな小学校の校名は公募の結果、楢葉小学校に決定した。

JFAアカデミー福島の男子が令和3年4月に福島での活動を再開。令和6年4月には女子の活動再開も予定されている。また、双葉地区における特別支援教育の早期再開を目指し、福島県教育委員会では楢葉北小学校跡地で特別支援学校を再開する方針を固めた。学校の規模は、小学部、中等部、高等部合わせて60人程度。令和6年度からの開校を目標に計画を進める予定である。

楢葉南小学校、楢葉北小学校、楢葉中学校校舎

あおぞらこども園園舎

■ 児童・生徒・園児数の推移

時期 / 学校・園	震災前（平成22年度末）	仮設校舎（平成29年3月）	町内再開（平成29年4月）	現状（令和2年度末）
小・中学校	686人	129人	105人	137人
うち小学生	432人	72人	62人	100人
うち中学生	254人	57人	43人	37人
こども園	247人	40人	38人	107人
合計	933人	298人	143人	244人

魅力ある教育環境づくり

本町では、多くの人に「楢葉で教育を受けさせたい」「楢葉の学校に通いたい」と思われるような、魅力ある教育環境づくりに取り組んでいる。小中学校では、児童・生徒が互いに助け合いながら学び合う楢葉ならではの教育を実践している。小中学校の校舎には全国トップレベルのICT教育※の環境を整備し、新型コロナウイルス感染症による臨時休校の翌日には、中学生を中心にオンライン授業を実施した。こども園においては、幼児教育アドバイザーの助言や協定を締結した私立認定こども園との交流などをとおして、子どもたちが伸びやかに成長できる教育に取り組んできた。また、こども園と小中学校に英語指導助手（ALT）を配置。こども園と小学校、小学校と中学校における連携など、英語教育の充実にも力を入れている。放課後や土曜日、夏季・冬季休業日には民間教育支援事業者や学習塾による学習会を開催。スクールバスの運行や就学支援（学用品・給食費の補助）、自校給食の提供、図書室支援員の配置など、さまざまな学習支援を展開している。

※ICT教育：パソコンやタブレット端末、インターネットなどの情報通信技術（ICT）を活用した教育

小中合同の運動会を開催

あおぞらこども園のいも掘り体験

教育に関する新たな取組み

本町は、子どもたちの科学技術に対する関心を高め、福島イノベーション・コースト構想を担う人材育成につなげるため、平成29年度に「ハロー！ ロボット教育プロジェクト」を発足した。福島大学、日本原子力研究開発機構、民間教育事業者などと多角的に連携し、プログラミング教室やワークショップなどを開催。ロボット教育の機会を小中学生に提供する取組みを実施した。平成29年9月には町役場内に中学生室を設置し、中学生独自の視点で新たなまちづくりの企画立案などを行っている。また、子どもたちが地域社会の一員として成長するためには、より実践的で今後の生活に役立つ知識や体験の習得が重要であるという観点からキャリア教育にも力を入れてきた。楢葉中学校では平成30年度に総合的な学習の時間を活用し、生徒が模擬会社「Nalysゆずスマイル楢葉」を設立。町の特産品を用いた商品開発を行うとともに、「ゆずり葉祭」や福島県のアンテナショップ「日本橋ふくしま館MIDETTE（ミデッテ）」などでの販売活動を実践している。

ハロー！ ロボット教育プロジェクト

中学生室の活動風景

「日本橋ふくしま館MIDETTE」での販売活動

生涯学習環境の整備

平成28年7月7日に旧楢葉南小学校校舎を地域文化交流拠点「楢葉まなび館」とし、生涯学習の拠点として整備した。みんなの交流館「ならはCANvas」でも各種教室やワークショップが開催され、文化活動が徐々に再開されつつある。平成30年6月19日には生涯学習環境の再生を目指し楢葉市民大学を開校。農業、スポーツ、書道、歴史、語学、合唱など町民が自由に参加できる講座を開講している。卒業が認められた受講者には学位記を授与し、市民大学講師の資格が与えられる。市民大学は「町民一人ひとりが先生になる」という考え方を基本姿勢とすることで、町民が真の生きがいを感じて生き生きと暮らす姿を目指している。なお、令和3年4月より、生涯学習の拠点を「楢葉まなび館」から、楢葉町コミュニティセンターなどに移し、引き続き活動を行っている。

「楢葉まなび館」でのサークル活動

■ 楢葉市民大学開校講座（平成30年度）

[教養講座（月1回）]

コース名	内　容
農をたのしむ	サツマイモ・大根などの栽培、味噌づくり、漬物作りなど
活き活きスポーツ　グラウンドゴルフ	グラウンドゴルフを通して、健康づくり仲間づくりを行う
活き活きスポーツ　合気道	合気道をわかりやすく指導　体と精神の鍛錬を図る
心に響くハーモニー	なつかしい童謡唱歌や抒情歌を合唱
ものづくり大学　わらじ作り	不要になったTシャツで作る布わらじ
ものつくり大学　創作かかし作り	布で作るおしゃれな創作かかし人形

[専門講座（月2回）]

コース名	内　容
足もとに未来を見つめて（歴史講座）	町の歴史を掘り下げ、先人の思いを継承し未来へのヒントを見出す
中国語講座	誰にでもできる簡単な中国語会話で国際感覚を身に着ける
落語は人生	落語を語り、生き方を落語に学ぶ 実技講座

[公開講座（年4回）]

講座名	内　容
講　演	専門講師による公開講座

NARAHA PICKUP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
❹

魅力ある学校教育の再生に向かって

楢葉北小学校
松本涼一（まつもとりょういち）さん

平成29年４月、楢葉町の小中学校が町内で再開した。
町は教育を復興の重点施策の一つに掲げ、ICT教育の導入や外国語教育の充実、
キャリア教育の実践など魅力ある学校の再生に力を注いでいる。
「日本一の教育を提供する」という高い目標を掲げる楢葉町の教育行政。
その取組みや今後の課題について
楢葉北小学校教頭の松本涼一さんに話を伺った。

平成29年４月、小中学校とあおぞらこども園が町内で教育を再開

小中がともに学ぶ校舎でスムーズに連携

楢葉町には楢葉南小学校、楢葉北小学校、楢葉中学校の３校の町立学校がある。震災後、小中学校はいわき市の仮校舎や仮設校舎で教育を行ってきた。

平成27年２月、楢葉町北田地区に楢葉中学校の新校舎が完成。その校舎で小中学校が再開されたのは平成29年４月のことである。原子力災害で全域避難となった自治体が帰還して学校を再開したケースは楢葉町がはじめてのことであった。

震災前（平成22年度末）、小中学校には686人の子どもたちが在籍していた（小学生432人、中学生254人）。しかし、町内の学校再開時に戻ってきた子どもたちは105人（小学生62人、中学生43人）。

松本さんは、町内の学校再開に合わせて母校である楢葉中学校に赴任した。中学校では英語教育とキャリア教育を担当し、令和２年４月に現職に就いた。小中共同校舎の利点を松本さんは次のように語る。

「さまざまな教育活動で小中がスムーズに連携できることが一番のメリットです。教師が交流して授業研究などで研鑽を積めば、その成果を子どもたちに還元することができます。小学生からみれば中学校の様子を肌で感じることができ、中学生からみれば小学生の時から見守り続けてきた先生にいつでも会うことができる。それが安心感につながり中１ギャップといわれる精神的負担の軽減につながっていると感じています」

全国トップレベルのICT環境を整備

木材がふんだんに使われた２階建ての校舎にはWi-Fi環境が整備された。当初、小学校は３年生以上の児童に、中学校は生徒全員にタブレット端末が配備され、現在では小学校・中学校の全児童・生徒がタブレット端末を授業の中で活用している。電子黒板を完備し、ICT支援員が小中学校に常駐するなどバックアップ体制も万全だ。全国トップレベルのICT環境の中で、ICT機器を活用した教育

小学校・中学校の全児童・生徒にタブレット端末を配備

はどのような効果を上げているのだろうか。

「ICT教育は、クラスのみんなが参加する対話型の授業ができます。教師が作成したワークシートに書き込んだ意見や解答はクラスのみんなに共有されます。いろいろな考えを知ることで子どもたちはさらに学びを深めることができるのです。教師が、子どもたちの考えをリアルタイムで把握できるという利点もあります。学習の習熟度を高めるため私は英語の授業でeboard（イーボード）という教材を使っていました。学習の理解度はそれぞれの子どもで違います。一人１台のタブレット端末があれば、自分にあった難易度の問題に取り組むことができます。これを個別最適化と言います。ICT教育の大きなメリットは個別最適化された学習ができることにあると私は思っています。ICT教育は目的を達成するための手段にすぎません。これからの時代は、鉛筆や消しゴムと同じようにタブレット端末のようなICT機器が文房具の一つになっていくということです」

AI時代を生き抜くグローバルな英語教育

グローバルな人材育成の一つとして楢葉町は英語教育にも力を入れている。平成29年７月からはALT（外国語指導助手）を学校に常駐させ、英語を身近に感じる環境づくりにも努めてきた。中学校ではブリティッシュヒルズでの英語研修やヤングアメリカンズのワークショップなどを通して国際感覚にも磨きをかけている。ヤングアメリカンズは、音楽公演と教育を２本柱とする米国の非営利活動団体である。その教育活動は、子どもたちと一緒に歌やダンスのショーをつくりあげるというものだ。令和元年には約40人のスタッフが来町し、楢葉中の生徒たちとワークショップを行っている。

「ALTが英語教育に果たしてきた役割はとても大きなものです。子どもたちはALT

ヤングアメリカンズとのワークショップの成果をステージで発表

異文化理解や国際理解を深めるために、天栄村のブリティッシュヒルズで宿泊活動を実施

Nalysでは町内事業者などと共同開発したさまざまな商品を販売

から生きた英語を学ぶことができます。また、ALTとふれあうことで英語や異文化への興味や関心を高めていくことも期待できます。ヤングアメリカンズのワークショップも生徒たちにとって貴重な経験となっています。ワークショップは海外の若者たちが歌やダンスの指導をします。もちろん使う言葉は英語だけです。言葉の壁はもちろんあります。しかし、手振りや表情などでお互いを理解して言葉の壁を乗り越えていくのです。内気で恥ずかしがりやの子や、運動が苦手な子も楽しそうに活動に取り組んでいます。その姿を目の当たりにすると、音楽の持つ力の凄さを実感します。ヤングアメリカンズのプログラムを通して、生徒たちは自らを自由に表現すること、そして仲間と何かをやり遂げる素晴らしさも学んでいます」

キャリア教育Nalysでの活動

ICT教育、英語教育と並んで楢葉町が力を入れているのがキャリア教育である。ファイナンシャルプランナーを招いての人生設計や、キャンビンアテンダントによるマナー講座、20年後を想定した未来同窓会の開催など、その取組みは多岐にわたる。なかでも特筆すべきは生徒が立ち上げた模擬会社Nalys（ナリーズ）の存在だ。松本さんはNalysが設立された平成30年度からキャリア教育の担当として指導に携わってきた。

「Nalysでは県内の会社と共同してさまざまな商品を開発する取組みを行ってきました。会社名は、楢葉（Naraha）、町花のヤマユリ（Lily）、町特産品のユズ（Yuzu）、そして笑顔（Smile）の頭文字をとって名付けられました。『ゆずり葉祭』や東京の『日本橋ふくしま館MIDETTE』での販売会も大盛況でした。生徒たちは、商品の企画・開発・販売などの取組みを通して、コミュニケーションの力を身に付けていきます。また、計画的に物事を進めることの重要性や、人と協力することの大切さも学んでいきます。社会生活の基盤となる能力や態度を育てることがキャリア教育だととらえ、生徒たちを指導してきました」

南小と北小の統合、校舎は旧南小へ移転

小学校と中学校が同じ校舎で学ぶ利点は多い。しかし、南小と北小の児童が一緒に学んでいる現状や、今後の児童数の推移、普通教室の空き状況などを考えると、小学校の統合や校舎の移転は喫緊の課題であった。楢葉町では令和元年に町長の諮問を受けた楢葉町学校運営等検討委員会が小学校の統合を答申。令和２年に開催された楢葉町総合教育会議において令和４年度の小学校統合が決定した。また、小学校の校舎は旧南小学校（現：楢葉まなび館）に移転することになった。

「小中が共同で使用している校舎は、中学校の校舎として整備されたものです。校舎には普通教室が９クラスあります。現在の割り当て状況は、小学校が６教室、中学校が３教室で、ちょうど９クラスです。今後、子どもたちの人数が増えると普通教室に余裕がありません。福島県は１クラス30人程度が基本です。30人を超えた場合は対応することができないのです。30人以上でクラス分けをすることもできます。しかし、子どもたちにより良い教育環境を提供するためには、校舎の移転はやむを得ないことだと受け止めています」

町内での学校再開以降、魅力ある学習環境づくりと、一人ひとりの学びを保証する教育に楢葉町は取り組んできた。町民の帰町が進み、今後は児童・生徒数の増加が見込まれている。小学校の統合と校舎移転、そして将来的な小中一貫方式の導入を視野に入れた検討を行うなど、楢葉町の教育は新たなステージへ向けて歩みを進めている。

南北小学校では校外学習にも力を入れている

第４章

産業の再生と新たな展開

営農再開状況
営農再開に向けた取組み
農業用施設の整備
木戸川での漁業の再開
既存事業所の再開と新産業の創造・誘致
観光産業の復活

営農再開状況

本町は、「浜通りを牽引する農業モデルの形成」を目標に掲げて農業の再生に取り組んできた。平成27年9月の避難指示解除後、本町の農業は水稲を中心に営農を再開してきた。震災を契機に、収益性の高い甘藷（サツマイモ）、タマネギ、花きなどの新規作物の栽培も進められ、その営農面積も年々拡大している。

基幹作物である水稲は、平成24年度の試験栽培、平成25年度からの実証栽培を経て、平成28年度に営農が再開された。平成28年度は約20haの水田で福島県オリジナル品種「天のつぶ」が作付けされた。平成28年10月5日から始まった米の全袋検査では、基準値を超える放射性物質はいずれも検出されず、楢葉産の米が6年ぶりに市場に出荷されることになった。

水稲に加え、本町が力を入れているのが甘藷の栽培である。甘藷は比較的手間がかからず、さまざまな商品化が可能な作物である。大阪に本社がある白ハト食品工業株式会社と共同し、平成29年度に甘藷の実証栽培を開始。令和元年には白ハトグループの株式会社福島しろはとファームが設立され、約1.5haから始まった甘藷栽培は令和2年度にその約30倍の約42haまで規模を拡大した。

新たな園芸作物として栽培されている花きは、風評の影響が少ないことも魅力である。県が双葉地方で産地化を目指すトルコギキョウは、避難指示解除前の平成27年5月から実証栽培が行われ、同年8月に市場に出荷されている。本町の農作物が市場に出回るのは震災後初のことであった。平成28年度からは、県の推奨作物であるタマネギの生産拡大にも努めてきた。鳥獣被害を受けにくく機械化に適したタマネギは、水稲栽培の裏作として作付けが進められている。また、運営企業が撤退した上繁岡地区のトマト

平成28年度に営農を再開した水稲栽培

一大産地を目指す甘藷栽培

トマト養液栽培施設

ロボット搾乳機を導入した蛭田牧場

施設は、本町が事業主体となり新規事業者を募集。施設を復旧・貸借して、令和2年度から株式会社ナラハプラントファクトリーがトマトの栽培を再開した。再開されたトマト養液栽培施設では、ハウス内の温度・湿度・日照量をコンピュータで管理し、約1.2haで年間約369t以上の生産が可能である。また、外国人の新たな在留資格「特定技能」制度を活用し、農業分野で働く外国人の受け入れを開始した。

畜産については、蛭田牧場が平成29年1月に原乳の出荷を再開。ロボット搾乳機を導入し省力化を図るなど効率的な経営を進めている。

■ 品目別作付面積・経営体数（令和2年度）

【水　稲】

49戸・７組織、約240ha作付け（震災前555戸、約410ha）

令和2年度全量全袋検査実績6,147点、すべて測定下限値（25Bq/kg）未満

【畑作物】

［甘　　藷］２戸・１組織、約42ha作付け

［タマネギ］４戸、約５ha作付け

［ト マ ト］１組織、約１ha作付け

【花き・花木・果樹】

［トルコギキョウ・ストックなど］３戸、約0.5ha作付け

［ユーカリ］８戸、約１ha作付け

［ユ　　ズ］３戸、約0.4ha作付け

【畜　産】

［酪 農 牛］１戸、146頭（震災前３戸、150頭）

［繁 殖 牛］４戸、137頭（震災前40戸、300頭）

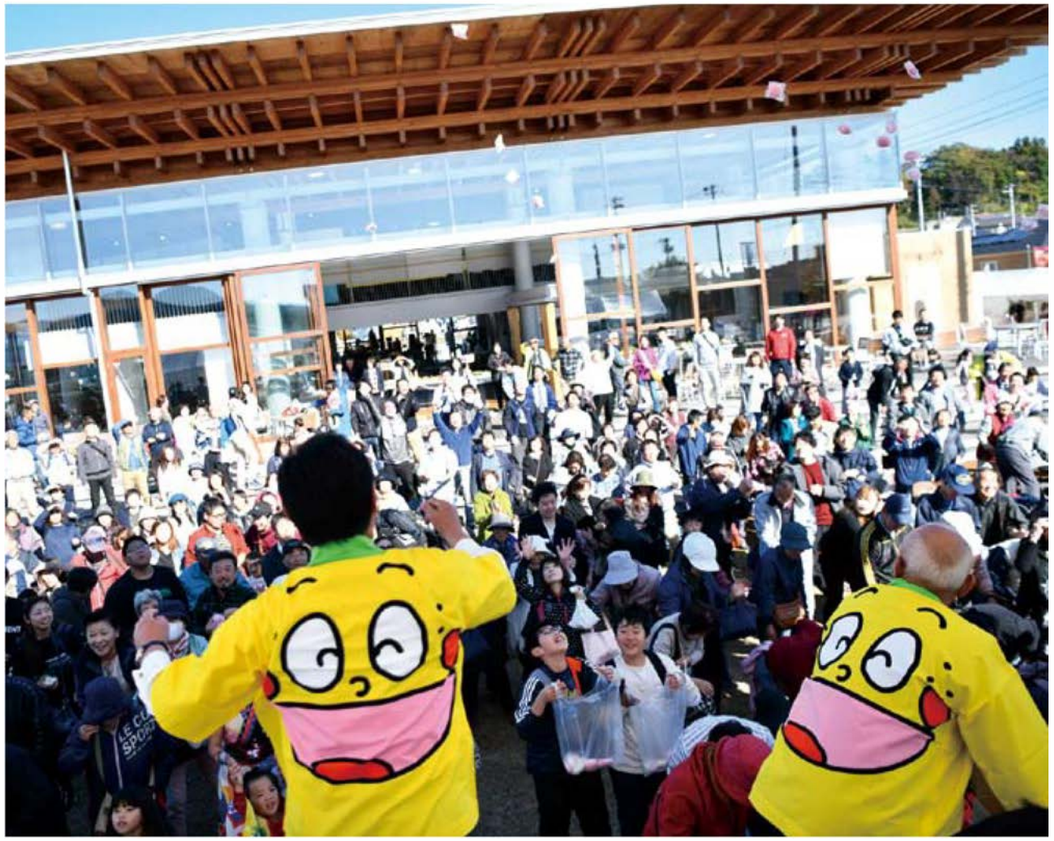
営農再開に向けた取組み

帰町して農業を再開しようと考えている農家の不安を解消するため、本町は、個々の農家の状況に応じたサポート体制を整えてきた。町内の農地は反転耕などで除染を完了させ、楢葉町農業復興組合による農地保全活動（令和2年度：耕起・草刈り約160ha）や楢葉町有害鳥獣捕獲隊によるイノシシの捕獲（令和2年度：400頭）などの取組みをとおして、農業再開に伴う不安の払拭に努めてきた。

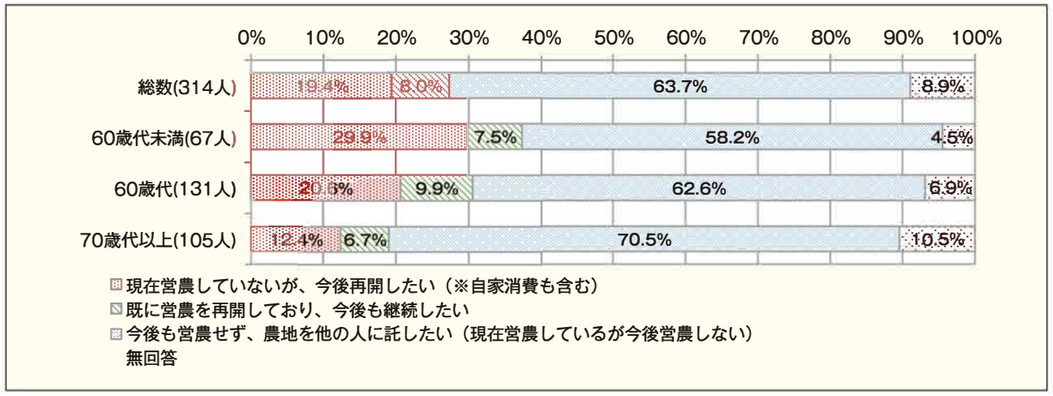
一方、農地の荒廃を防ぎ農業を再生するためには耕作放棄地や津波被災地の農地を集約化することが必要である。そうした観点から、農地を提供する人と農業に取り組む人・組織を結ぶマッチングサポート事業にも取り組んできた。原子力被災12市町村農業者支援事業に加え、平成29年度には本町独自の取組みとして「楢葉町いきいきアグリ復興基金」を創設した。また、「ならSUNマルシェ」や「ならSUNフェス」の開催などをとおして、町内産農産物の安心・安全をPRし、自家消費野菜の栽培から本格営農へとつなげる取組みも行ってきた。

しかし、その一方で、震災による農業離れも進んでいる。本町は平成29年9月から同年10月にかけて、町内に農地を所有する998人を対象に、営農再開の意向や今後の農地の所有についてのアンケート調査を実施した（回収数314人、回収率31.5%）。その結果、町内で農業を再開したいと回答した人は全体の19.4%で、営農せず農地を他の人に託したいと回答した人が全体の63.7%に及んだ。また、営農を再開する上での不安な点について、高齢化による労働力の確保をあげる人が23.9%と最も多く、楢葉町に望ましいと考える農業については、農地の大規模化や団地化をあげる人が19.4%に上った。同年12月には第１回農業者座談会を開催し、アンケートや座談会での意見などを基に平成30年3月に「楢葉町営農再開ビジョン」を策定。営農再開ビジョンにおける目標像を「やってやれないことはない　みんなが主役の農業のまち～農業するナラ、ならは！」とした。本町は、さらなる農業再生に向けた取組みを推進するとともに、収益性の高い甘藷栽培をさらに拡大するなど、特色のある農産物で全国有数の産地を目指す取組みを進めている。

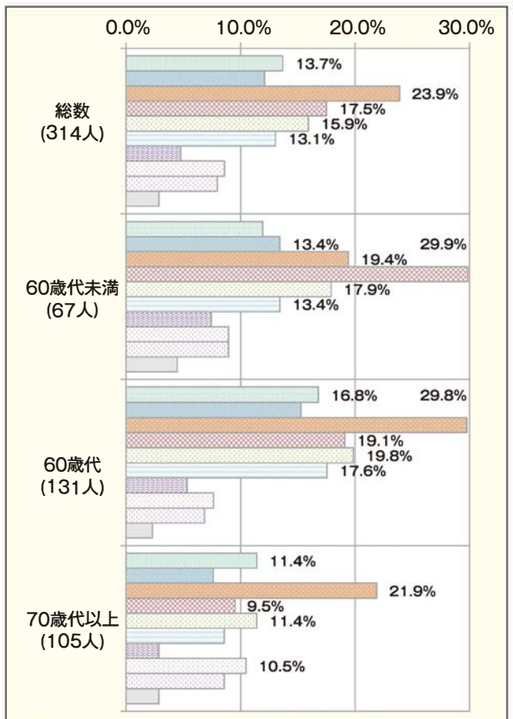
町内の農産物を直売する「ならSUNマルシェ」


農林水産物の収穫を祝う「ならSUNフェス」

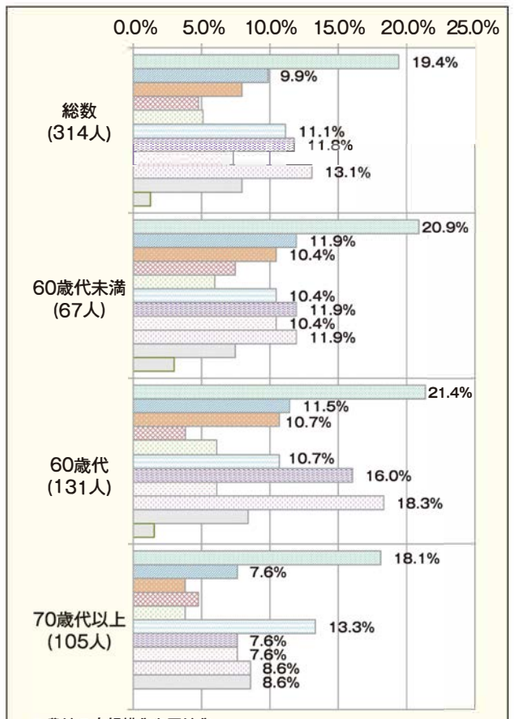
■ 楢葉町内における今後の営農への意向



■ 営農再開する上での不安な点



■ 楢葉町に望ましいと考える農業



農業用施設の整備

農業の現場では、人手に頼る作業や熟練者でなければできない作業が多く、省力化や人手の確保、負担の軽減が大きな課題となっている。本町は、農業の省力化・効率化と高品質化・高付加価値化を図るため、ロボット技術や情報通信技術（ICT）などを導入した農業用施設の整備を進めている。令和3年3月末現在、運用を開始している大規模農業用施設は次のとおりである。

1.楢葉町水稲育苗センター（下小塙地区：平成31年3月より稼働）

水稲育苗センターは、採算性が高く良質な水稲の苗を育て農家に販売する施設。同施設は約100ha分、２万箱の処理能力を備えている。従来、多くの農家が自前の育苗ハウスで行ってきた育苗管理が、センターを利用することで省力化を図ることができる。

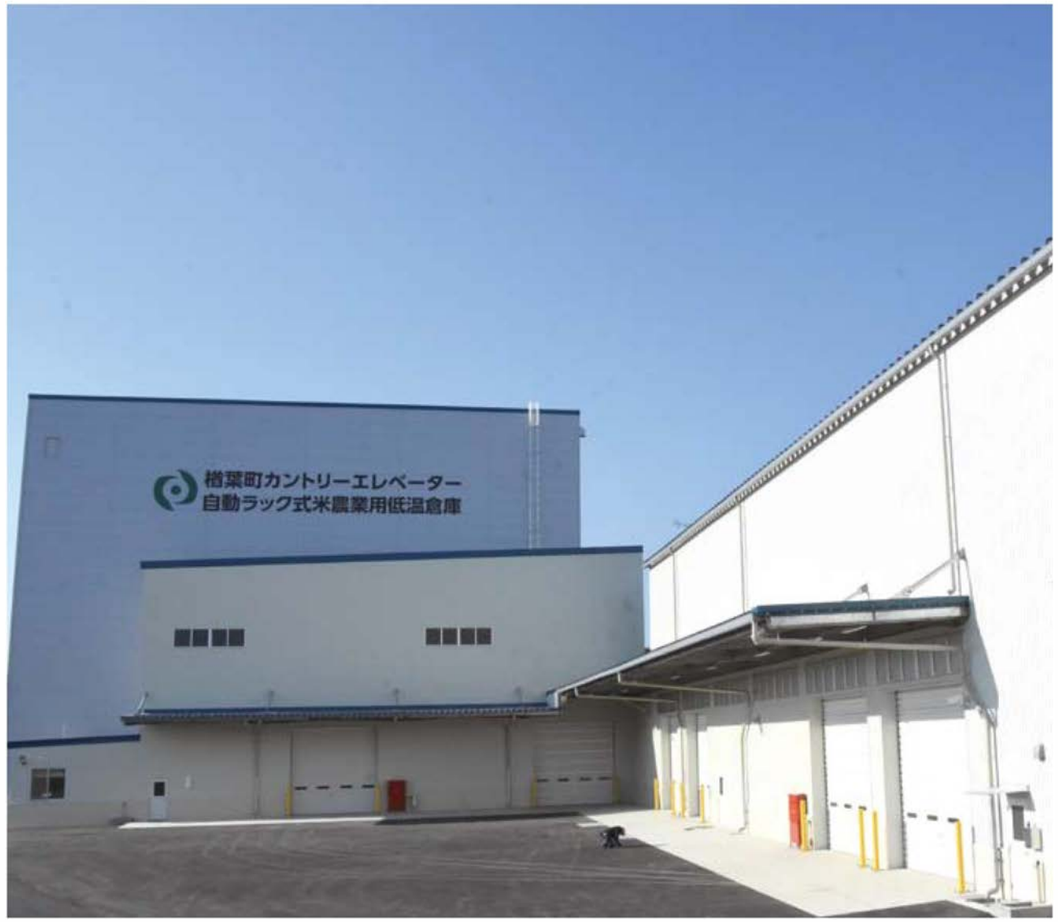
楢葉町水稲育苗センター

2.楢葉町カントリーエレベーター・自動ラック式米農業用低温倉庫（上小塙地区：令和元年9月より稼働）

カントリーエレベーターは、米の乾燥・貯蔵・調整・出荷までを一貫して行う共同利用施設。農家は刈り取った籾を持ち込むだけで出荷までの作業が機械操作で行われる。同施設は約300ha分の米を貯蔵することができる。

自動ラック式低温倉庫は、米を最適な温度・湿度で長期間保管する大型倉庫。カメムシ被害米や着色米などを検出して不良品を取り除く色彩選別機や、複数のほ場で収穫された同品種の米を混合して品質を均一にする均質化装置などを併用して、高い品質と安定出荷を実現している。

自動ラック式米農業用低温倉庫



楢葉町カントリーエレベーター

3.楢葉町甘藷貯蔵施設・農業用機械倉庫（前原地区：令和2年9月より稼働）

甘藷貯蔵施設は、キュアリング技術を用いて甘藷を熟成し貯蔵する施設。キュアリングとは、温度や湿度を調整することで甘藷を熟成させ、甘みを引き出し長期保存を可能にする技術である。国内最大級の規模を誇る同施設では、約1,260tの甘藷を貯蔵することができる。また、農業用機械倉庫には、遠隔操作で動く無人トラクターや農業用ドローンなど最先端の機械が整備されている。

農業用機械倉庫

楢葉町甘藷貯蔵施設

木戸川での漁業の再開

本町を流れる木戸川は本州有数の鮭の漁獲量を誇っていた。震災前は毎年６万匹から７万匹の鮭を捕獲し、1,200万匹から1,500万匹の稚魚を放流していた。鮭の稚魚放流が再開されたのは平成26年4月のことである。鮭を捕獲する築場などの復旧が進み、平成27年10月に鮭漁が再開された。漁獲された鮭は県の放射性物質検査で基準値を下回り、同月末に木戸川での鮭釣りも復活した。津波で被災した鮭ふ化施設は平成28年に復旧し、同年度から人工ふ化事業とふ化した稚魚の放流を実施している。本町は鮭や鮎への放射性物質の影響を継続的に調査し、地域住民が木戸川の資源にふれあえる環境を整備してきた。木戸川鮭漁の再生に取り組む木戸川漁業協同組合は、これまでの功績が認められ、平成29年10月、第37回全国豊かな海づくり大会において栽培漁業部門水産庁長官賞を受賞している。また、鮎釣りの再開に向け令和2年5月には鮎の稚魚約２万1,000匹を放流。令和3年7月4日、東京電力福島第一原子力発電所事故以来11年ぶりに木戸川での鮎釣りが解禁された。これは避難区域となった地域の川では初めてとなる。

解禁当日から多くの釣り人が集まり、鮎釣りを楽しんだ

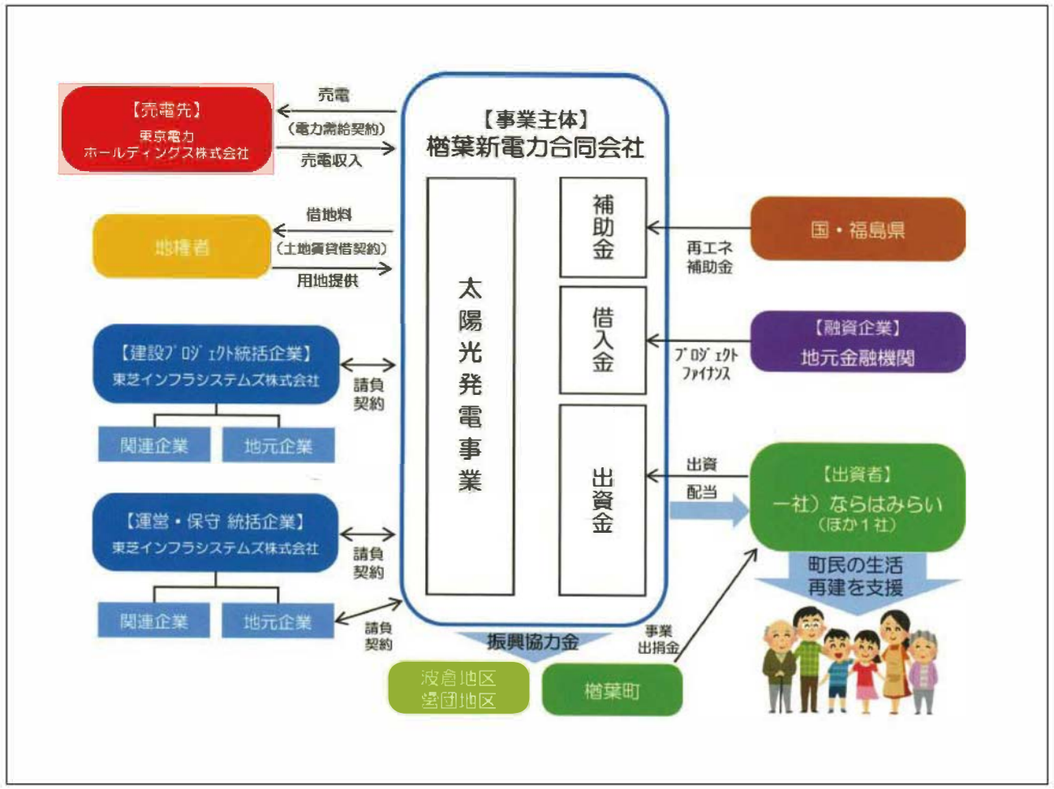
再開した木戸川の鮭漁

既存事業所の再開と新産業の創造・誘致

大きな雇用の場であった楢葉南工業団地の再生を図るため、本町は、避難中の企業と密に連絡をとり早期帰還を促進してきた。また、やむを得ず帰還を断念する場合には、残された工場や土地を有効活用して新たな企業の誘致に取り組んできた。南工業団地では楢葉遠隔技術開発センター（モックアップ施設）や原子力災害対策センター（オフサイトセンター）が新たに立地し運用を開始している。南工業団地と楢葉北産業団地では、企業立地の決定や操業が続き、福島イノベーション・コースト構想の受け皿として産業再生も進んでいる。平成29年度には「ならはプレミアム付商品券」の販売を開始するなど、町内で再開した事業者の支援と商業の活性化を図る取組みも進めている。

本町は、原子力発電に代わる新たなエネルギー産業の育成として、再生可能エネルギーの産業化にも取り組んできた。平成29年11月1日には、出力11.5MWのメガソーラー（大規模太陽光発電所）「波倉メガソーラー発電所」が運用を開始した。発電事業の主体は平成27年5月に設立された特定目的会社（SPC）の楢葉新電力合同会社となる。事業用地は津波による塩害や原子力災害の影響で営農が困難となっていた波倉地区の農地を活用した。発電した電力は、福島第二原子力発電所の送電線を活用して東京電力グループに全量を売電。発電事業で得られた配当金は復興まちづくり事業に活用されている。

■「波倉メガソーラー発電所」の事業運営体制



出力11.5MWの「波倉メガソーラー発電所」

観光産業の復活

本町には、天神岬、木戸川渓谷、岩沢海水浴場など、豊かな自然観光資源がある。これら資源を活用する観光施設については、概ね復旧が完了している。また、来訪者が無料で使える公共Wi-Fiの整備や、スマートフォンなどをかざすと動画などが見られる案内板などの設置も進めている。

太平洋を一望できる天神岬スポーツ公園は、アドベンチャー広場やキャンプ場などが整備された本町の観光拠点である。公園内にある「楢葉町サイクリングターミナル」と「天神岬温泉しおかぜ荘」が改修を終え平成27年9月19日に営業を再開した。サイクリングターミナルには洋室やエレベーターが新設され、「天神岬温泉しおかぜ荘」の露天風呂は震災前の約10倍の広さとなった。新緑や紅葉など四季折々の景観が魅力の「木戸川渓谷遊歩道」も平成28年度に復旧が完了している。サーフィン愛好家の人気のスポットである岩沢海水浴場は令和4年夏に再開する方針である。

震災後、双葉警察署の臨時庁舎として使用されていた「道の駅ならは」は、温泉保養施設が平成31年4月25日に営業を再開。令和2年6月19日に物産館もリニューアルオープンした。また、令和元年度に、町民みんなで町の魅力を発信する「みんなでつくる！ ナラハ・テレビCMプロジェクト」を立ち上げテレビCMを制作。「（一社）ならはみらい」が中心となり復興が進む町内を巡るスタディツアーも実施されている。平成30年4月には楢葉オリジナルの日本酒「楢葉の風」の販売も開始した。町内でとれた酒米「夢の香」を姉妹都市である会津美里町の白井酒造店で醸造。酒づくりプロジェクト発足から約半年を経て、純米大吟醸酒や特別純米酒など４種類の新酒が完成した。やわらかな味わいが魅力のこの日本酒には、楢葉の原風景を取り戻し、コミュニティを再生したいという想いが込められている。

天神岬「みるーる天神」の案内板

木戸川渓谷の紅葉

町民みんなで楢葉の魅力を発信するテレビCMを作成

楢葉オリジナル日本酒「楢葉の風」

NARAHA PICK UP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
❺

花き栽培という新境地へ

花き栽培者
佐藤修一（さとうしゅういち）さん

震災と原子力災害により楢葉町の基幹産業である農業は、
作付け中止や風評により大きな被害を受けた。
そうした中、風評被害の少ない花き栽培で
農業の復興を目指す取組みが楢葉町で続けられている。
上繁岡地区でトルコギキョウの栽培に挑戦している佐藤修一さんもその一人だ。
新たな花の産地づくりを目指す佐藤さんの歩みを追った。

楢葉町などの双葉地方はトルコギキョウの産地として育成が進められている

観光イチゴ農園から花き栽培へ転身

佐藤さんは楢葉生まれの楢葉育ち。震災前は父親とともに、専業で水稲栽培と観光イチゴ農園を経営していた。避難指示が解除された翌年の平成28年に父親が他界。しかし、先祖から受け継いできた土地を守っていきたいという思いは揺るがなかった。佐藤さんは花き栽培という新たな境地へと一歩を踏み出した。

「私はもともと会社勤めをしていました。震災があった年の８年ほど前から専業で農業をするようになりました。長男なので、ゆくゆくは父の後を継ぐつもりでいました。父は米価が下落する中で、新たな作物としてイチゴに着目し、観光農園としてイチゴづくりに取り組んでいたのです。私の就農に合わせて農園の規模を拡大することになり約30aのハウスを整備しました。震災当時、私は30代でした。父からは、農業を辞めてどこかに就職したらどうかという話もありました。しかし、先祖代々受け継いできた農地や、まだまだ使えるハウスがありました。そして何よりも専業で取り組んできた農業への想いがありました。楢葉で農業を再開することを決めたものの、大きな壁として立ちはだかったのが原子力災害による風評被害です。当時、楢葉町以北の双葉地域は避難地域のままでした。観光イチゴ農園はお客さんに来てもらって成り立ちます。震災前のように集客することは難しい状況でした。楢葉の大地で農業を再び始めるためには、風評の影響を受けにくい作物への転換が必要だと考えたのです。特に、花きは風評の影響を受けにくい品目として福島県も栽培を推奨していました。花き栽培は初めてのチャレンジです。しかし、農業で食べていくためには何もしないわけにはいきませんでした。栽培をしようと決めたトルコギキョウも、当時はどんな花なのかよく知らない状態からのスタートでした」

福島県は農業の力強い復興を成し遂げるため平成25年３月に「新未来園芸プロジェク

トルコギキョウの栽培リスクを避けるため、冬季はストックなどの花きを栽培

ト」を策定。重点推進事項の一つとして「浜通り等の花き」の振興を図っていくことになった。県内の各農林事務所は新未来園芸プロジェクトに取り組む品目について「園芸産地復興計画」を地域ごとに策定し計画を強力に推進。楢葉町などの双葉地方はトルコギキョウの産地として育成が進められていくことになった。

試行錯誤をとおして栽培ノウハウを蓄積

トルコギキョウは、品種育成が盛んに行われ市販品種は300種を超える。また、１年をとおして栽培が可能な花だ。冬に花を咲かせるには夏に育苗する。しかし、苗の時に高温にさらされると茎が伸びず節が詰まった状態になる。佐藤さんはこうしたリスクを回避するため春から夏にかけてトルコギキョウを栽培し、冬季はストックやカンパニュラ、キンギョソウなどの栽培に切り替えている。

「トルコギキョウの栽培を始めたのは平成28年です。平成29年にはじめて市場に出荷をしました。平成29年の作付け面積は約10a、令和２年には倍の約15aに作付けし、18,600本以上のトルコギキョウを出荷することができました。トルコギキョウは品種も多く栽培が難しい花です。温度管理や水やりには細心の注意を払わなければなりません。同じ品種であっても土地や気候などの生育環境によって開花数、花持ち、量感も違ってきます。研修や視察などで栽培方法を知識として身につけても、実際に自分の畑で栽培するとうまくいかないことのほうが多いのです。そもそも花き栽培は楢葉町では新たな取組みです。楢葉町の土地や気候にあった栽培ノウハウが蓄積されていません。日々、試行錯誤しながら何とかトルコギキョウを栽培できるようになったというのが本当のところです」

若い力でトルコギキョウの町へ

佐藤さんが育てたトルコギキョウの大半は、日本最大級の花の市場である東京都中央卸売市場大田市場花き部に入る（株）フラワーオークションジャパン（FAJ）に出荷されている。東京への出荷は花き栽培をしている３戸の農家でつくったコンテナ式集荷場から佐藤さん自らが出荷する。佐藤さんは新たに始めた花き栽培の今後の抱負について次のように語る。

「栽培技術を向上させるとともに、楢葉町の土地や気候にあったより良い品種を見つけてトルコギキョウの栽培を軌道に乗せていきたいと考えています。そして、楢葉町で花き栽培に取り組む若い力がもっと増えていってほしい。そうすれば、楢葉町ならではの栽培技術のノウハウがもっと蓄積されていくはずです。将来的には、楢葉町と言えばトルコギキョウが有名な町といわれようになればいいと思っています」

令和２年度の楢葉町花き営農状況は、トルコギキョウやストック等が約0.5ha（３戸）、ユーカリが約1.7ha（８戸）である。楢葉町は震災後に始められたトルコギキョウやストックを町の特産品に育てていくとともに、他の品種へのチャレンジも積極的に支援していく考えだ。トルコギキョウには希望という花言葉がある。楢葉町をトルコギキョウの産地にするという希望を胸に、佐藤さんの挑戦は続いている。

トルコギキョウの産地を目指し３戸の農家が栽培に取り組んでいる（令和２年度）

NARAHA PICKUP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
6

農業の再生と新たな展開

前 楢葉町農業委員会会長（令和３年７月退任）

遠藤庄一郎（えんどうしょういちろう）さん

農業の再生は「新生ならは」の創造に向けた重点施策の一つである。
楢葉町では地震と津波により農地が浸水。
また、福島第一原発事故の影響で農地の汚染や農作物の作付・出荷が制限された。
この未曾有の災害から楢葉の農業はどのような再生の道を歩んできたのであろうか。
楢葉町農業委員会会長を務めた遠藤庄一郎さんの話は、
農地の復旧・保全、営農の再開、新たな農業の展開など多岐にわたった。

水稲栽培は令和２年度に約240haまで作付けが回復した

農地の除染と保全、そして集約化

楢葉町内には約700haに及ぶ農地がある。その内、震災前の水稲作付面積は約410haだ。町の基幹産業である農業、特に水稲の営農再開は農業再生の大きな原動力となる。試験栽培と実証栽培を経て平成28年度に再開した水稲栽培は、令和２年度に約240ha（49戸・７組織）まで作付けが回復した。しかし、そこに至るまでの道のりは、農地の除染や保全をはじめ、鳥獣対策、耕作放棄地の対応、農地の集積など、越えなければならないいくつもの壁があった。

「津波をかぶった農地は表土を剥ぎ取り、それ以外は反転耕などで除染を行っています。農業用水の溜池は水を抜いて底に溜まった土を撤去しました。震災前、各行政区にはトラクターなどの大型農業機械を管理する機械利用組合がありました。その組合で農地の保全組合を立ち上げるよう働きかけました。さらに有志による任意団体をつくり、行政区とグループという２つの側面から農地の保全管理に取り組んできました。避難の長期化で急増した鳥獣対策も課題でした。楢葉町有害鳥獣捕獲隊として地元猟友会の方にイノシシなどの捕獲を委託するほか、営農を再開した農家に補助金を出して電気柵を設置していきました。また、３／４事業（原子力被災12市町村農業者支援事業）のほか、楢葉町独自の『楢葉町いきいきアグリ復興基金』などを設け、営農を再開する方々にきめ細やかな支援を展開しています。しかし、震災後は農業の担い手が一層減少してしまいました。田園が広がる町の原風景を取り戻すためには、耕作が放棄された農地の集積が必要です。楢葉町では、高齢の離農者も多く、農地を貸したい方と農業に取り組む方をつなぐマッチングサポートにも力を入れています」

新たな営農モデルの確立を目指す

平成31年３月、新たに整備された水稲育苗センターが稼働した。さらに令和元年９月に

6 農業の再生と新たな展開

一大産地化を目指し平成29年から甘藷の栽培が始まった

は自動ラック式米農業用低温倉庫とカントリーエレベーターも整備され水稲栽培の拠点が完成した。楢葉町は、水稲栽培の再生を後押しする一方で、新しい作物の栽培にも積極的に取り組んでいる。特に主力品目として栽培を進めているのが甘藷（サツマイモ）だ。令和２年９月には、甘藷を低温熟成させ長期保存する甘藷貯蔵施設を整備。令和３年度には新たに地元農家31戸が参入し、生産農家が33戸に増える見通しだ。平成29年度に1.5haから始まった甘藷の作付は、令和２年度に約42haとなった。さらに令和３年度には最大で45haになる見込みだ。

「楢葉町では、主力の米に加えて収益性の高い作物を栽培して、新しい営農モデルの確立を目指しています。花き、タマネギ、甘藷などの栽培は、そうした目的から導入されたものです。トルコギキョウは浜通りの気候が栽培に適しているということから福島県の意向でスタートしました。タマネギは相双地方で普及に力を入れている作物です。鳥獣被害を受けにくいことから楢葉町でもタマネギの生産を各農家に推奨しています。なかでも楢葉町で力を入れているのが甘藷です。平成29年、町外から農業生産法人が参入して甘藷の栽培が始まりました。甘藷貯蔵施設は国内最大級の規模を誇ります。楢葉町では甘藷栽培支援事業を導入するなど地元栽培農家を支援しながら甘藷の一大産地化に向けた取組みを積極的に進めています。震災前、上繁岡地区ではトマトの施設栽培が行われていました。震災により施設を運営していた企業が撤退したため、町が施設を復旧し新規事業者を募集しました。令和２年度から震災後初となるトマトの栽培もスタートしています」

新規就農の環境づくりと循環型農業の展開

楢葉町は平成29年に町内に農地を所有する998人を対象（回収数314人、回収率31.5%）に今後の営農再開への意向等に関するアンケートを実施している。その結果、営農を再開したいと回答した人は全体の19.4%（61人）。一方で、農地を他の人に託したいと回答した人は全体の63.7%（200人）に及んだ。楢葉町では、こうした農業の復興を図るための現状分析や課題整理を行い、今後の営農の基となる「営農再開ビジョン」を平成30年３月に策定。このビジョンのもとで農業の担い手や農地利用のあり方を一体的に捉えながら解決していく「人・農地プラン」を作成・推進し、営農意欲の向上と持続可能な力強い農業の実現を目指している。

「田耕地については今後も農地を集約しマッチングサポートを推進していく考えです。課題となるのは畑耕地です。水稲については震災前の半分以上まで作付面積が回復しています。しかし、畑で作物をつくる人が少ないというのが現状です。新規就農者を募るといっても、以前の農地法では農地を取得する場合の下限面積が50a以上（都府県）という定めがありました。新たに農業を始めるには広すぎる面積です。そこで、令和２年11月に、農地法の改正（平成21年）で定められた特例を使って、農業委員会の判断で下限面積を10aに変更しました。この面積なら畑をやってみようという方が何人か出てきています。こうした地道な取組みを積み重ね農家の数を増やしていく努力をしていました。畑に限らず、人と農地の課題を解決していくための『人・農地プラン』も早急にまとめていかなくてはなりません。また、耕畜連携の循環型農業を目指していくことも農業再生の重要な視点です。楢葉町では１組織が酪農を、３戸が和牛繁殖を行っています。和牛繁殖は令和３年度には１戸増え４戸になる見込みです。耕畜連携は水稲で得られた稲わらを牛が食べ、牛から出る牛糞を堆肥化して田んぼや畑にまくというものです。牛糞堆肥は肥料効果や土壌改良効果に優れ、経費削減にもなります。１・２年後の実用化を目指して町で取組みを進めているところです」

資源を再利用する循環型農業を始め、ロボット技術や情報通信技術を活用したスマート農業の導入など、楢葉町の農業は日々進化を続けている。また、新規就農者のチャレンジという種を育む支援もハード・ソフト両面から手厚く展開している。震災から10年、浜通りを牽引する農業モデルの形成を目指す楢葉町の取組みは始まったばかりだ。

農業再生の重要な視点として耕畜連携の循環型農業の取組みも進む

NARAHA PICK UP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
❼

交流を生み出す観光振興

一般財団法人　楢葉町振興公社支配人
鈴木昇（すずき　のぼる）さん

雄大な太平洋を一望できる天神岬スポーツ公園には
年間50万人の観光客が訪れていた。
一方、国道６号沿いの「道の駅ならは」も年間30万人が訪れる賑わいの場だ。
町内有数の観光拠点と賑わいの場は、いかに復興の道を歩んできたのであろうか。
施設の指定管理者である（一財）楢葉町振興公社支配人 鈴木昇さんの話には、
町の観光振興にかける熱い想いがあふれていた。

観光の拠点「天神岬スポーツ公園」の楢葉町サイクリングターミナル

施設の再開にあたり従業員の確保に苦心

天神岬スポーツ公園は、アドベンチャー広場や芝生広場、キャンプ場、サイクリングロードなどが整備された総合レジャーエリアだ。公園内には宿泊施設・レストランが付属する「楢葉町サイクリングターミナル」や日帰り温泉施設「天神岬温泉しおかぜ荘」も立ち並ぶ。サイクリングターミナルの支配人を務める鈴木さんはスポーツ公園再開までの歩みを次のように振り返る。

「震災と原発事故により施設は長期休業を余儀なくされました。70人ほどいた従業員のほとんどは解雇せざるを得えない状況でした。そのうち約７割が楢葉町の方です。そのため、住民の帰町が進まなかった当初は従業員の確保に苦心しました。当時は人件費が２倍ほどに高騰していたことも悩みの種でした。再開にあたり施設の改修工事も行われています。サイクリングターミナルは15ある宿泊部屋のうち６部屋を洋室に変え、エレベーターを新設しました。また、『天神岬温泉しおかぜ荘』の露天風呂は岩風呂、ヒノキ風呂、壺風呂、寝湯などバラエティに富んだものとなり、震災前の10倍の広さになりました。サイクリングターミナルと『しおかぜ荘』の営業を再開したのは、楢葉町の避難指示が解除された平成27年９月のことです。その後は、海をモチーフにした大型遊具の設置や、キャンプ場の再開、双葉郡初のドッグランのオープンなど、公園の整備を進めてきました。震災の影響で若干温度が下がってしまった温泉は、平成29年６月に源泉を切り替え、さらに美肌効果が高まったと評判です」

「道の駅ならは」から感謝の気持ちを発信

一方、道の駅は、地域の賑わい創出を目的とする３つの基本的な機能（休憩機能、情報発信機能、地域連携機能）を備えた施設だ。温泉保養施設・物産館・道路休憩室からなる「道の駅ならは」は、平成13年に県内７番目、浜通

太平洋を見渡せる露天風呂の「天神岬温泉しおかぜ荘」

りの国道沿いでは初の道の駅として誕生した。警戒区域設定時には住民の一時帰宅の中継拠点として、また、平成24年10月から平成31年３月末まで双葉警察署の臨時庁舎として物産館が使用されていた。Jヴィレッジが全面再開された平成31年４月に温泉とフードコートの営業を再開。令和２年６月に物産館がリニューアルオープンし、約９年３カ月ぶりに全面再開した。道の駅の駅長も務める鈴木さんは、復興に果たしてきた道の駅の役割は大きいと語る。

「原発事故の影響で『道の駅ならは』から北は立ち入りができない状況となりました。まさにここが避難指示区域へ入る関所となりました。原発事故対応の拠点となったJヴィレッジとともに、『道の駅ならは』は復興拠点として大きな役割を果たしてきたのです。Jヴィレッジの全面再開に合わせて温泉保養施設を再開したという側面はあります。しかし、復興のために汗を流していただいている方々に憩いの場を早く提供したい。そして感謝の気持ちを形で表したいという想いが施設再開の根底にありました。おかげさまで道の駅も全面再開し多くの方に利用していただいています。また、楢葉町もさまざまな方々のご尽力で復興の道を歩んでいます。その感謝の気持ちを道の駅から発信していきたいと考えています。そもそも『道の駅ならは』には３つの魅力があります。１つ目は、地元の特産品や郷土料理が味わえるということです。２つ目は、地元の生産者と消費者をつなぐ場であるということです。町の基幹産業は農業です。農家の方々がつくった農作物を販売して地域を活性化していくことも道の駅の大きな役割です。そして３つ目は、道の駅そのものが観光施設としての魅力を備えているということです。町内外から日帰り温泉や自慢の食事を目的に来られるお客様も多くいます。道の駅を起点に町内を観光される方も多い。リニューアルオープンにより『道の駅ならは』の魅力をいっそう高めていければと思っています」

10年後の観光客数、100万人を目指して

楢葉町は復興計画の期間満了を受け、令和３年度から10年間のまちづくりの基本となる「第六次楢葉町勢振興計画」を策定した。その基本目標の一つに「交流を生み出す観光の振興」を掲げている。町は、既存の観光施設や自然、農産物、スポーツに関連する施設や取組みと連携して、交流人口の拡大を図る方針だ。天神岬スポーツ公園や「道の駅ならは」は、さらなる復興を目指す道のりにおいてどのような役割を果たしていくのであろうか。

「天神岬スポーツ公園は恵まれた立地環境にあります。眼下にはサケが遡上する木戸川が流れ、その上流には新緑や紅葉のスポットとなる渓谷やダムもあります。青い海と白い砂浜、秋には黄金色に輝く田園風景も展望できます。常磐自動車道が全線で開通し『ならはスマートIC』もできました。JR常磐線も全線で復旧しています。復興が進み町を訪れる観光客もますます増えていくことでしょう。天神岬スポーツ公園は町の観光スポットを巡る中核拠点としての役割がますます求められてくるでしょう。そうしたニーズに応えるためにも客室を増設するなどの対応を考えていかなくてはなりません。また、町は健康増進とスポーツ振興にも力を入れています。健康増進が期待できる遊歩道などを拡充していけばさらに魅力ある施設になるはずです。『道の駅ならは』については、令和５年春の供用開始を目指して、道の駅とJヴィレッジを直接結ぶ道路の整備が予定されています。Jヴィレッジと連携しながら、交流人口のさらなる拡大に向けて地域を盛り上げていける施設にしていきたいと考えています」

楢葉町は、サーフィン愛好家の人気のスポットである岩沢海水浴場を令和４年夏に再開する方針だ。また、サイクリング、ウォーキング、ハイキングなどで町の見どころを巡るパッケージツアーの開催も検討している。2019年度に楢葉町を訪れた観光客は約80万人。2030年度に観光客数を100万人とする目標を掲げ、楢葉町は観光振興の取組みを加速させている。

道の駅ならは物産館には地元産の野菜が並ぶ。温泉入浴施設も併設

第５章

福祉の充実と健康の増進

子育て支援、高齢者・障がい者福祉
地域医療の再生・充実強化
心身の健康づくりと健康管理
健康増進とスポーツの振興

子育て支援、高齢者・障がい者福祉

本町では震災後に「次世代育成支援行動計画」を見直した「子ども・子育て支援事業計画」を作成し、子育て支援の立場から地域・家族・多世代のふれあいを重点施策として実施している。平成31年４月には子育て世代包括支援センターを開設し、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援や関係機関の連携を進めている。高齢者・障がい者福祉については、新たに策定した「保健・福祉ビジョン」の下で「高齢者福祉計画及び介護保険事業計画」「障がい者計画・障がい福祉計画」「地域福祉計画」を策定。その後、これを見直して「障がい福祉計画・障がい児童福祉計画」を策定するなど、高齢者や障がい者が健康に暮らしていけるまちづくりに取り組んでいる。また、デイサービスセンター「やまゆり荘」が平成27年11月に再開。特別養護老人ホーム「リリー園」は平成28年３月に再開。保健福祉会館は改修を経て平成29年４月に運用を再開し、楢葉町社会福祉協議会の拠点として、介護予防事業や地域包括支援事業などのさまざまな取組みを推進している。

デイサービスセンター「やまゆり荘」

地域医療の再生・充実強化

本町の一次医療については、「ときクリニック」が平成27年10月１日に診療を再開。平成28年２月１日には県立大野病院（現：福島県ふたば医療センター）附属ふたば復興診療所（愛称：ふたばリカーレ）が「笑ふるタウンならは」の医療ゾーンで診療を開始している。双葉地域の復興と住民の健康を支える医療再生拠点となる同診療所は、内科・整形外科の２科体制で、県立医大の医師も診察に当たっている。同エリアでは、同年７月１日に蒲生歯科医院が診療を再開し、令和２年６月８日に「ならは薬局」もオープンしている。また、平成30年４月に二次救急医療を担う福島県ふたば医療センターが富岡町に開院し、同年10月に多目的医療用ヘリの運航を開始。令和３年３月20日にはJヴィレッジの「JFAメディカルセンター」（整形外科／リハビリテーション科）が約10年ぶりに診療を開始するなど、本町の医療体制は大きく進展している。

福島県ふたば医療センター附属ふたば復興診療所

ならは薬局

心身の健康づくりと健康管理

本町は、総合健診・健康教室・介護予防教室の実施など、全町民に対する健康管理体制を確立するとともに、健康や放射線に関する知識の普及や実践をとおして、心と身体の健康づくりを進めている。低線量被ばくの健康影響について、本町は有識者からなる「楢葉町放射線健康管理委員会」を平成27年6月に設置し、町が取り組む健康管理や不安対策などについて検討を行ってきた。健康診断や県が行う甲状腺検査に加え、放射線の影響が心配される妊婦や乳幼児に対しては、県による健康診断も実施されている。本町では、希望する町民に車載搭載型ホールボディカウンターを配備した「ふたば復興診療所」などでの内部被ばく検査を実施する体制も構築。町民自ら外部被ばく線量や空間線量を確認できるよう、個人積算線量計（Dシャトル）や高機能積算線量計（Dose-e）などの線量計を貸し出しする体制も継続している。また、さまざまな機会に放射線に関する学習会などを開催し、放射線への理解をとおして健康管理へつなげていく取組みも進めている。

健康増進とスポーツの振興

本町は「新生ならは」の創造に向けた重点施策の一つに「健康増進とスポーツの振興」を掲げ、その拠点となる施設の整備を進めてきた。楢葉町総合グラウンドの野球場は、平成29年にフルカラー発光ダイオード方式の電光掲示板を設置。平成31年４月13日、総合グラウンド内に県内有数の規模を誇る屋内体育施設「ならはスカイアリーナ」もオープンした。町民の健康増進と交流人口拡大の役割を担う同施設には、アリーナ（体育館）や温水プール、フィットネスルームほか、キッズルーム、会議室などが整備されている。震災後、福島第一原子力発電所事故の対応拠点となったJヴィレッジは、平成30年7月28日に改装したホテル棟を含め一部営業を再開。同年９月に国内初となる全天候型練習場の利用も開始し、平成31年４月20日に全面再開を果たしている。令和元年12月15日には、本町の「ゆずの里ロードレース大会」と広野町の「ふる里ふれあいマラソン」を統合継承した復興マラソンとして「Jヴィレッジハーフマラソン」を初開催。令和３年３月25日、東京2020オリンピック聖火リレーが福島復興のシンボルであるJヴィレッジからスタートした。

「スポーツのまち楢葉」の活気を再び取り戻すため「楢葉町体育協会」と「ならはスポーツクラブ」が統合し、平成31年４月に（一社）楢葉町スポーツ協会が発足。令和元年９月には、本町、楢葉町スポーツ協会、㈱Jヴィレッジの３者で「スポーツによる楢葉町のまちづくり・地域活性化に関する三者連携協定」を締結し、令和２年４月に楢葉町スポーツコミッションが立ち上げられた。本町では同コミッションが主体となって、町民の健康増進とスポーツによる地域振興に取り組んでいる。

楢葉町総合グラウンド野球場

スポーツ推進に向けた三者連携協定を締結

健康増進の拠点となる「ならはスカイアリーナ」

全天候型練習場や新たなホテル棟を備えたJヴィレッジ

楢葉町
ピックアップインタビュー
8

NARAHA PICK UP INTERVIEW

スポーツのまち楢葉の再生と振興

一般社団法人　楢葉町スポーツ協会
小林正人（こばやしまさと）さん／赤間謙（あかまけん）さん

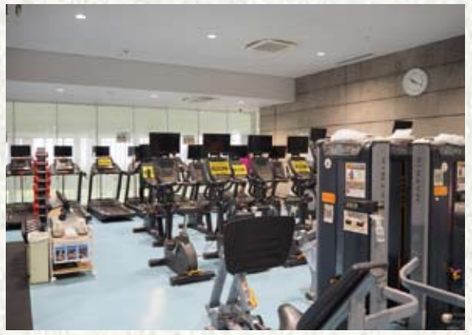
震災前の楢葉町はスポーツが盛んで、
町内では数多くのスポーツイベントが行われていた。
町民の健康増進や町の地域振興を再構築するためにも、
スポーツのまち楢葉を再生し、スポーツ振興を図ることが必要だ。
町のスポーツ活動を推進する（一社）楢葉町スポーツ協会の小林正人さんと赤間謙さんに、
スポーツを活かしたまちづくりの取組みについて伺った。

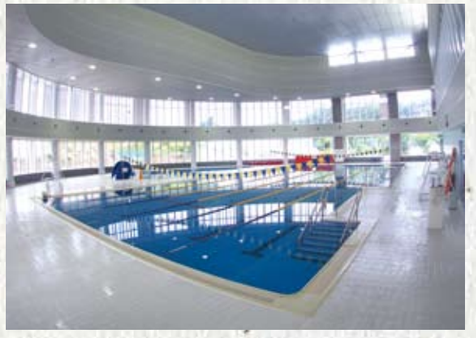
プロスポーツにも対応できる床材を採用した「ならはスカイアリーナ」のアリーナ（体育館）。２階には432席の観客席を備える

屋内体育施設「ならはスカイアリーナ」

楢葉町は「健康増進とスポーツの振興」を復興の重点施策の一つに据えてまちづくりに取り組んできた。平成31年４月、屋内体育施設「ならはスカイアリーナ（以下、スカイアリーナ）」がオープンし、Jヴィレッジも全面再開を果たした。スカイアリーナは、スポーツと文化の新交流拠点となる施設である。Jヴィレッジなどと連携し、スポーツを活かしたまちづくりの重要な役割を担っている。

小林　楢葉町総合グラウンド（以下、総合グラウンド）内には、スカイアリーナ・野球場・サブグラウンド・陸上競技場があります。スカイアリーナは体育館やプール、フィットネスルームなどが併設された体育施設です。その規模は県内有数を誇ります。スカイアリーナができたことで、身近でさまざまなスポーツに親しむことができる環境が整いました。


最新の機器を備えたフィットネスルーム


25m×６コースのプールと幼児用プール

楢葉町スポーツ協会主催のウォーキング教室（木戸川渓谷）

プロ野球チーム「福島レッドホープス」から指導を受けるスポーツ少年団の子どもたち

なかでも、プールやフィットネスルームは手頃な料金で利用できると町民の方々に好評です。

赤間　来館された方はとてもきれいな施設という印象を持たれると思います。館内にはランニングコースやキッズルームも整備されています。キッズルームにはボールプールやアスレチック遊具が揃い、お子様連れの方にも気軽に利用していただくことができます。スポーツ合宿で総合グラウンドの施設を利用される場合、天候により本来の練習メニューがこなせないことがあります。そうした時、ランニングコースなどの設備を利用すれば別メニューでトレーニングをすることもできます。利用者のニーズに合わせて柔軟に活用していただけるのもスカイアリーナの魅力の一つだと思っています。

多種多様なスポーツと交流の機会を提供

（一社）楢葉町スポーツ協会（以下、スポーツ協会）は楢葉町体育協会と「ならはスポーツクラブ」が統合して平成31年４月に発足した。令和３年にスポーツ協会の職員となった赤間さんはオリックスやDeNAで活躍した元プロ野球選手である。平成27年、楢葉町初となるプロ野球選手誕生のニュースは、復興の道を歩む町の希望の光となった。

赤間　私は令和２年12月に現役を引退しました。楢葉町は私が生まれ育った町です。引退後は、これまで取り組んできたことを活かして町の復興の役に立ちたいと考えていました。また、私を育ててくれた故郷に恩返しをしたいという想いもあり楢葉町に戻ってきました。私が町のスポーツ少年団で野球をしていた頃は、プロ野球選手と交流する機会にあまり恵まれていませんでした。プロのスポーツ選手は、子どもたちにとって憧れの存在です。さまざまなスポーツでプロ選手との交流の機会をつくり、子どもたちに夢や希望を与えることができればと思いスポーツ協会の職員になることを選択しました。

楢葉町に帰還した町民の約４割は高齢者が占める。引きこもりや生活習慣に起因する発病機会は増加傾向にあり、医療関連費負担の観点からも高齢者世代への健康増進施策が求められている。一方、子ども世代においては、小中学校の児童・生徒数が少なく、特に中学校の運動部は多様化が困難な状況だ。

小林　スポーツ協会は総合グラウンドの管理や町民イベント、スポーツ少年団の運営などの業務を行っています。現在、楢葉町には６つのスポーツ少年団（野球、サッカー、バレーボール、バスケットボール、剣道、少林寺拳法）があり、中学校には３つの運動部（常設はバドミントンと卓球、特設は陸上と駅伝）があります。現在は生徒数の関係で中学校では実施できないスポーツがあるのが現状です。こうした課題にどう対応していけばいいのか、現在、中学校と協議を進めています。スポーツ協会では定期教室やイベントを開催して、さまざまなスポーツに触れる機会を町民の方々に提供しています。定期教室は会員の方が対象ですが、イベントは会員以外の方でも参加いただけます。地域コミュニティの形成や多世代間の交流を促すイベントの開催など、イベントの企画には工夫を凝らしています。また、イベント参加者の送迎を行うなど、町民の方が参加しやすい環境づくりにも努めています。

官民連携によるスポーツ推進体制

プロアスリートや社会人チーム、大学の運動部など、楢葉町ではスポーツ大会やスポーツ合宿の誘致に力を入れている

楢葉町とスポーツ協会、(株)Jヴィレッジの３者は「スポーツによるまちづくりと地域活性化に関する三者連携協定」を締結し、令和２年４月に「楢葉町スポーツコミッション（以下、スポーツコミッション）」を立ち上げた。スポーツコミッションは、地方公共団体、スポーツ団体、民間企業等が一体となって地域振興を進めていく組織である。

小林　スポーツコミッションの目的は、スポーツを通じて地域の方々が誇りを持って暮らせるまちづくりを進めていくことです。スポーツ大会やスポーツ合宿の誘致、宿泊型新保健指導スマートライフステイの実施、町民向けスポーツイベントの実施などが事業の柱となっています。スマートライフステイは生活習慣病の予防を目的とする宿泊型の保健指導プログラムです。また、町の地域資源を活かしたスポーツツーリズムにも力を入れています。

赤間　私は子どもの頃から野球を続けてきました。ですから個人的には野球を通して町を盛り上げていきたいという想いがあります。将来的には『赤間杯』を開催して町を活性化していきたいという夢も描いています。楢葉町にはJヴィレッジやスカイアリーナ、総合グラウンドなどの魅力的なスポーツ施設があります。野球に限らず、恵まれたスポーツ環境を活かして、さまざまなスポーツ大会の誘致や創設をしていきたい。楢葉町には、スポーツを通じて多くの人が交流する町になってほしいと思っています。

町は、多様なスポーツの機会を町民に提供する一方で、フットサル等を含む「広義のサッカー」を重点スポーツとして普及拡大していく考えだ。また、スポーツツーリズムでは旅行代理店経由での販売も視野に入れている。スポーツには人を元気にする力と、人と人をつなぐ力がある。スポーツによる新たなまちづくりが楢葉町で動き出している。

プロバスケットボールチーム「福島ファイヤーボンズ」と中学生との交流

ブラインドサッカーアルゼンチン代表チームとあおぞらこども園児との交流

第１部「新生ならは」の創造

第６章

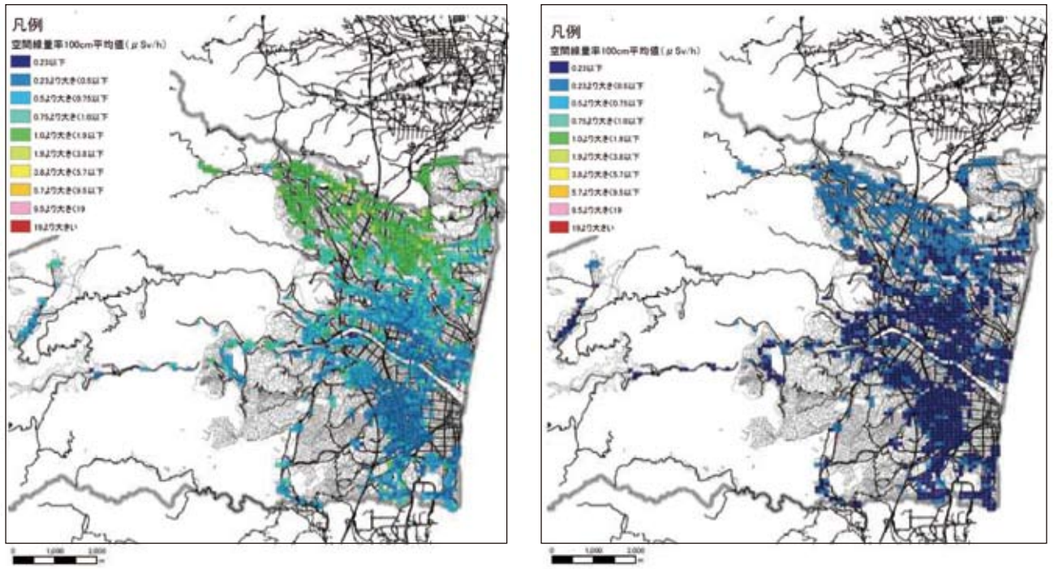
さらなる安全と安心の確保

除染と町内の放射線量
放射線モニタリング体制の整備
除染廃棄物の搬出
防犯・防災への取組み

除染と町内の放射線量

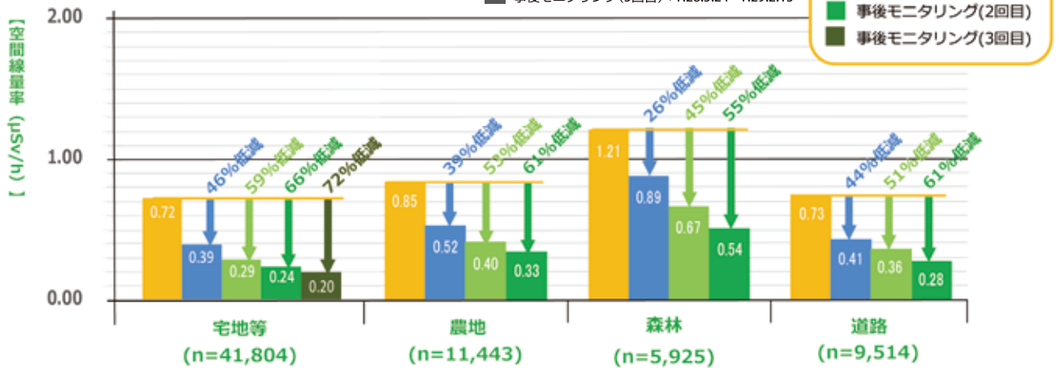
平成24年9月からはじまった国（環境省）の直轄除染は平成26年3月に終了し、平成26年度より事後モニタリングの結果を踏まえてフォローアップ除染を実施してきた。本町では楢葉町除染検証委員会を平成25年11月に設置し、国による除染の効果を検証してきた。その結果、本町の生活圏内の除染はほぼ終了したとみられることから同委員会は平成30年度より楢葉町環境回復委員会に名称を変更し、除染仮置場の原状回復や里山再生モデル事業についての分析・評価を行った。

■ 除染の効果［左：除染前（H24.6~H.26.1）/右：除染後・事後モニタリング（H28.5~H.29.2）］



■ 空間線量率（1m）除染対象別低減率

測定期間
除染前モニタリング：H24.6.26～H26.1.29
除染後モニタリング：H24.9.17～H26.3.25
事後モニタリング(1回目)：H26.5.20～H26.12.27
事後モニタリング(2回目)：H27.5.12～H28.2.3
事後モニタリング(3回目)：H28.5.24～H29.2.13



放射線モニタリング体制の整備

放射線の影響を防ぎ、安心できる生活を取り戻すためには、暮らしのさまざまな場面において放射線量を「見える化」することが必要である。本町は、町内43カ所にモニタリングポストを設置するとともに、町内71カ所の主要公共施設などで放射線モニタリングを継続的に実施し、広報などで結果をわかりやすく公表している。水道水の安全性については、双葉地方水道企業団が小山浄水場に24時間放射性物質モニタリング機器を導入し1時間ごとに放射性物質のモニタリングを行っている。また、同企業団では、各家庭の蛇口から出る水道水の放射性物質検査に加え、水道水の安全性をPRするためペットボトル水「ふくしま木戸川の水」も販売している。本町では、自家消費食品についても楢葉町農林水産物処理加工施設で放射性物質の分析を行うなど、継続的かつきめ細かな放射線測定体制を構築している。

24時間放射性物質モニタリング機器

楢葉町農林水産物処理加工施設

■ 公共施設などモニタリング調査実施結果（令和3年2月実施分）

❶ 調査期間　令和3年2月3日(水)
❷ 測 定 器　NaIシンチレーションサーベイメータ（空間放射線量率測定用サーベイメータ）を使用
❸ 測定方法　地表面から高さ1m及び高さ1㎝の空間線量率を測定（くらし安全対策課職員が実施）
測定器を水平に保ち、約30秒ほど経過させて測定値が安定したことを確認し、10秒ごとに測定値を5回読み取り、その平均値を記載する（県指定測定方法に基づき実施）
❹ 測定結果

測定箇所		測定値（μSv/h） 地上1.0m 今月測定値	測定値（μSv/h） 地上1.0㎝ 今月測定値
楢葉町役場	（玄関前）	0.09	0.10
楢葉町　民館	（玄関前）	0.10	0.09
楢葉町コミュニティセンター	（ロータリー）	0.17	0.20
萩平地区集会所	（駐車場）	0.13	0.15
浄光西地区集会	（駐車場）	0.15	0.16
所向ノ内地区集会所	（駐車場）	0.16	0.20
下繁岡地区集会所	（駐車場）	0.11	0.13
営団地区集会所	（駐車場）	0.14	0.13
波倉地区集会所	（駐車場）	0.10	0.11
ぼらぐち（自宅門扉前）	（駐車場）	0.18	0.16
繁岡地区集会所	（駐車場）	0.15	0.16

測定箇所		測定値（μSv/h） 地上1.0m 今月測定値	測定値（μSv/h） 地上1.0㎝ 今月測定値
上繁岡地区集会所	（駐車場）	0.23	0.24
塩貝の大カヤ	（駐車場）	0.22	0.24
松館地区集会所	（駐車場）	0.16	0.18
墓地　園（入口前）	（道　路）	0.16	0.15
旭ヶ丘地区集会所	（駐車場）	行政区再編により測定終了	
大谷地区集会所	（駐車場）	0.12	0.13
総合グラウンド	（陸上フィールド）	0.08	0.09
楢葉中学校	（校　門）	0.08	0.10
鐘突堂地区集会所	（道　路）	0.12	0.12
上井出地区集会所	（駐車場）	0.10	0.12
竜田駅	（改札口前）	0.09	0.15

除染廃棄物の搬出

除染廃棄物を一時保管する仮置場については、町の復興を推進するため、できるだけ早期に撤去を完了するよう国に要請してきた。除染廃棄物は、大きく可燃物と不燃物に区分される。可燃性除染廃棄物は平成28年に町内波倉地区に完成した仮設焼却施設に搬出され処理が進められてきた。可燃性除染廃棄物は仮設焼却施設で減容化処理を行った後、放射性物質の濃度に応じて大熊町・双葉町で整備が進められている中間貯蔵施設または富岡町の管理型処分場（旧フクシマエコテッククリーンセンター）へ搬出されることになった。一方、不燃性除染廃棄物については、平成27年6月からのパイロット輸送（試験輸送）を経て、平成28年度から中間貯蔵施設への本格輸送が始まった。

当初（平成26年11月現在）、町内の23カ所の仮置場には58万2,778袋（可燃物：20万5,515袋、不燃物：37万7,263袋）のフレコンバッグが保管されていた。可燃性除染廃棄物は、平成31年3月までにすべての仮置場からの搬出を完了。不燃性除染廃棄物についても、令和3年3月までにすべての仮置場からの搬出が完了した。

下繁岡地区仮置場（平成29年9月）

下繁岡地区仮置場（平成30年7月）

防犯・防災への取組み

本町では防犯体制強化のため、町内主要地点24カ所に防犯カメラを設置し平成27年10月から運用を開始した。安全・安心確保と犯罪抑止のため、町内の防犯灯をLED灯に改修。警察、消防のパトロールに加え、楢葉町特別警戒隊が24時間体制で町内の見守り活動を行っている。平成28年4月には、「楢葉町安全見守り協議会」を設立し、関係機関とともに町内の防犯活動の普及や交通マナーの改善などにも取り組んでいる。また、平成30年度に消防団の体制強化を図るため機能別団員制度を導入。令和2年度には女性のみからなる分団を創設するなど災害に強い人づくりにも取り組んでいる。

楢葉町安全見守り協議会

NARAHA PICKUP INTERVIEW

楢葉町
ピックアップインタビュー
❾

さらなる安全と安心を目指す

楢葉町消防団長
小薬金重（こぐすりかねしげ）さん

東日本大震災では自然災害と原子力災害が同時に発生し、
さまざまな災害対応を迫られた。
未曾有の危機を乗り越えるため、避難誘導や救助活動、
そして避難所運営などで重要な役割を担ったのが楢葉町消防団だ。
震災発生時から現在に至るまでの活動や帰町後の消防団の再構築などについて、
楢葉町消防団長の小薬金重さんに話を伺った。

活動が高く評価され県内消防団の最高の栄誉とされる民友旗を令和２年に受賞

未曾有の大災害、住民の安全確保に奔走

震災前、楢葉町には７分団・約250人の消防団と14分隊の婦人消防隊があった。また、沿岸部では２つの自主防災組織が、消防団のない山間部では自衛消防隊が組織されていた。震災時、楢葉町消防団（以下、消防団）は３月11日と12日の２日間で延べ244人の団員が住民に大津波の災害広報や避難指示を周知。いわき市の避難所では18日間で延べ1,024人が避難所運営に当たった。小薬さんは当時の緊迫した状況を次のように振り返る。

「発災後、被害状況を確認するため波倉地区に向かいました。そこには津波にのみ込まれて横倒しになった消防車の姿がありました。近くにいた団員と女性は高台からロープを使って救助しました。しかし、消防車の中にいる団員には次々と津波が襲いかかり近寄ることすらできません。今回の震災で津波から４人の住民を救助することができました。しかし、人命救助中に団員１人が殉職したことは痛恨の極みです。原発事故対応では、全町避難に向けた避難誘導を実施しました。避難路として考えていた国道６号に崩落箇所があることが分かり山麓線と呼ばれている県道35号いわき浪江線へと車を誘導しました。いわき市の避難所では、救援物資の受け入れや炊き出しなどの活動が中心です。当時、いわき市の避難所のほとんどは断水していました。そこで、トイレなどに使う生活用水は学校のプールから小型消防ポンプを使って汲み上げ確保していました」

避難指示の解除で本格的に活動を再開

平成25年４月、楢葉南小学校体育館に約110人の消防団員が集結し「平成25年楢葉町消防団春季検閲式」が挙行された。消防団が検閲を行うのは平成23年１月の出初式以来だ。しかし、消防団の活動が本格的に再開さ

津波で被災した波倉・前原・山田浜地区の消防団屯所が平成29年に再建

れるのは平成27年９月５日の避難指示解除後のことであった。小薬さんは平成28年７月に団長に就任。福島県内で30人を超える死者を出した令和元年東日本台風（台風19号）の際には、58人の消防団員が出動し警戒に当たった。令和２年には、これまでの活動が高く評価され県内消防団の最高の栄誉とされる民友旗を受賞した。

「いわき市や会津美里町での避難所運営が一段落した後は、消防団の活動は実質的に中止せざるを得ない状況でした。避難指示が解除された当初は、団員の帰町が進まず、消防団の活動を本格的に再開させるのに時間を要しました。帰町後は、定期的な火災予防啓発や消防水利の点検を実施し、現在は広域消防と連携を図りながら防災活動に取り組んでいます。台風19号発生時には、各分団の屯所で警戒体制を敷き、浸水危険箇所に土のう袋を設置するなどして被害を最小限に抑えることができました。民友旗は福島民友新聞社が消防防火活動に功績のあった消防団に贈る顕彰旗です。消防団だけでなく楢葉町としても民友旗を受賞できたことはとても名誉なことです。今後の励みにもなりました」

災害に強い人づくりと仕組みづくりを推進

楢葉町では、全町避難でばらばらとなった消防団や自主防災組織の体制を再構築することが喫緊の課題だ。平成29年には津波で被災した波倉・前原・山田浜の消防団屯所が再建され町内全14カ所の屯所がそろった。令和３年４月１日現在の団員数は260人。しかし、町内に居住・勤務する団員は必ずしも多くなく、団員が不足しているのが実情だ。

「楢葉町に戻ってきた団員は100人ほどです（令和３年２月現在）。新入団員の確保も難しく、籍だけ置いている団員もいます。実働団員の数が少なく、初期消火などの出動が困難な状況です。日中は町職員でつくる第７分団を中心に対応しています。しかし夜間や休日は広域消防の力を借りなくてはなりません。こうした状況を改善するため、平成30年度に機能別団員制度を導入しました。機能別団員は、特定の活動のみに従事する消防団員で、通常団員の活動を補完する役割を担っています。また、消防団の新たな組織として女性のみの分団を創設しました。女性分団は既存の婦人消防隊とは一線を画し、消防団の第８分団となるものです。新規団員の確保や組織改革などにより消防団の機能を強化し、これからも安全で安心なまちづくりに貢献していきたいと考えています」

約６割の住民が戻ってきた楢葉町。さらなる帰町を促すためには地域防災力を高めることが必要不可欠だ。消防団はその根幹をなす。新たに導入された機能別団員には町職員のほか町内の事業者も入団。令和元年５月には、Jヴィレッジと大規模災害時の消防活動に関する覚書を締結し、可搬式消防ポンプ積載車１台と消防防火衣が配備された。復興計画に定める「さらなる安全・防災を目指す」ため、楢葉町では災害に強い人づくりと仕組みづくりが進められている。

機能別団員制度（写真上）と、女性のみからなる「第８分団」（写真下）を創設

一楢一葉一町一災一害一記一録一誌一

第２部

帰町した町民が語る「新生ならは」の姿

［INTERVIEW］

語り継ぐ震災、築く未来へ

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 1

地域活動のリーダーとなる人材の発掘や育成が今後の大きな課題です。

山内康一（やまうちこういち）さん

楢葉町の北田地区に私の住まいがあります。50代に入った頃、定年後の第二の人生について妻と考えるようになりました。兼業農家でしたので、ゆくゆくは自家栽培の旬の作物を使った農家レストランを開きたいという漠然とした想いを妻と描いていました。震災当時、私はいわき市の職員として、妻は楢葉町社会福祉協議会の職員として震災対応に当たりました。楢葉町に帰町したのは、生まれ育った町の力になることが震災前からの私の考えだったからです。

全町避難となった町の農地はセイタカアワダチソウなどの雑草に覆われていました。北田地区の除染が始まった平成25年に北田復興組合を立ち上げ、20haほどの農地の保全管理に力を注ぎました。それは、農業がいつでも再開できるようにとの使命感のようなものでした。

北田行政区では避難指示が解除された町でさまざまな取組みを行ってきました。その一つが国道6号交差点から天神岬スポーツ公園に広がる休耕田を活用した菜の花やコスモスの栽培です。また、草刈り隊を編成したり、もち米収穫祭なども開催しています。そうした取組みは、地域の活性化を始め、地域の人とのつながりや交流人口の拡大を図ることが目的でした。

町に戻った町民の多くが高齢者です。そうした方々に健康に配慮した食事と交流の場を提供するため、かねてから夫婦で想い描いていた農家レストランを平成30年に開業しました。また、北田復興組合でもタラノメ栽培の事業に乗り出し、令和2年に初収穫をすることができました。

「新生ならはの創造」に向かって町は復興に取り組んでいます。ハード面の復興はほぼ成し遂げたと言っていいでしょう。これからはソフト面での復興をさらに進めていかなくてはなりません。正月行事の鳥小屋やお盆の風物詩である「じゃんがら踊り」などの伝統文化を次代に継承していくことも大切です。

約6割の町民が町に戻ってきました。しかし、町内居住者の高齢化率は約4割にのぼります。空き家も多く隣近所との関わりも希薄になっています。若い人や新たに楢葉町にやってきた人を巻き込んでコミュニティを回復していくことが急務です。コミュニティを回復するためには、行政区単位での継続的な活動を盛り上げていかなくてはなりません。そのためには地域の牽引役が必要不可欠です。地域活動のリーダーとなる人材の発掘や育成が今後の大きな課題です。

我が家は、私たち夫婦と義父、義母、息子の5人家族でした。要介護の義母は寝たきりの状態で、娘夫婦と孫も近くで暮らしていました。いわき市の避難所、親戚宅を経て、夫の弟がいる埼玉県へ避難したのは全町避難から5日後のことです。娘夫婦も私たちと一緒に埼玉県へ避難しました。消防団員の息子はいわき市に残って避難所運営の支援です。埼玉県での避難生活は平成28年の帰町まで続くことになります。その間、平成24年に義母が、またその翌年に義父が亡くなりました。長年暮らして愛着のある楢葉町から送り出してあげられなかったことが残念でなりません。

震災当時、私は婦人消防隊の隊長を務めていました。避難生活中は、いわき市や会津美里町の仮設住宅で行われる防火活動に埼玉県から駆けつけていました。また、震災で活動を休止した婦人会の代わりに「きずなの会」も結成しました。その会のメンバーとは今でも集まって盛り上がっています。

娘夫婦は仕事や孫の進学もあり埼玉県に家を建てて新たな生活をスタートさせています。息子はいわき市で生活を続け、私たち夫婦は楢葉町に戻ってきました。町に戻ることに何の迷いもありませんでした。帰町後は、震災前から仲間たちと取り組んでいた傘踊りやよさこい踊り、カラオケ活動を再開しました。活動の一環として、いわき市や楢葉町の福祉施設を慰問しています。藍染やフラワーアレンジメント、パターゴルフなどの活動にも参加して充実した毎日を過ごしています。

今、町内の有志で町の特産品である“ユズ”を使った「ゆずコロッケ」をつくって「道の駅ならは」で販売しています。町の特産品であるユズの香りと味が染み込んだコロッケは絶妙な味わいと大評判をいただいています。木戸川を遡上するサケを揚げた「鮭スティック」や鮭スティックをパンではさんだ「鮭ドック」なども好評をいただいています。秋のお彼岸には、おふかしやまぜご飯、おはぎを販売しました。これもまた大人気でした。町内の仲間たちとこうした活動の輪を広げていけたらいいと考えています。

楢葉町に戻った町民の多くが高齢です。まちづくりを担う若い世代が少ないのです。こうした状況でも、懸命にまちづくりに取り組んでいる方々の姿を目にします。さまざまなイベントや町民活動などが企画され、参加のお誘いもいただきます。「もう歳だから」とお断りしても「何言ってるの!」と一蹴されるほどです。そこには町にいる人でなんとか町を盛り上げていこうという熱意が感じられます。町に戻った一人ひとりの頑張りがあれば、震災前のような活気のある楢葉町に戻ると思っています。

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 2

楢葉に戻った一人ひとりの頑張りで、活気のある町になると思っています。

永山セツ子（ながやま）さん

私の父は農業が趣味のような人です。震災前は全国の顧客に個人でお米を販売していました。私は、米づくりに力を注ぐ父の姿を幼い頃から見て育ってきたこともあり、ゆくゆくは私が父の手伝いができたらと思っていました。高校を卒業して農業機械メーカーに就職したのも何かの縁だったのでしょう。震災後は富岡町の営業所から小野町や田村市の営業所へ移動となり両親と離れて避難生活を送ることになりました。平成25年に結婚し、27年に第一子を、29年に第二子を授かりました。結婚する際に「私は楢葉町に戻りたい」と夫に伝えていました。夫は「楢葉町で農業を継いでもいい」と言ってくれたのです。

楢葉町に帰町したのは平成28年8月のことです。営農再開にあたり経営を個人から組合組織に移行しました。現在は夫が組合の代表を務めています。FGAP※を取得し、主に水稲やサツマイモ、タマネギなどを栽培しています。震災後、楢葉町の特産品として売り出した日本酒「楢葉の風」に使われている酒米「夢の香」も私たちが丹精込めて育てたものです。

帰町して最初に困ったことは保育園です。平成28年11月に町内の営業所に職場復帰をしたので、こども園が再開するまでは広野町の保育園に子どもを預けざるを得ませんでした。また、町内の病院は土・日・祝日が休診で、普段の日も午後4時までの診療です。具合が悪いときでも、仕事帰りに気軽に通える病院がないことから、休日や夕方の時間でも診てくれる病院があればとても助かります。子どもの将来を考えると、町内に習い事の教室や学習塾が少ないのも不安です。

町には、子どもたちがいろいろなことに挑戦できる環境を整備してほしいと思います。選択肢がなければ子どもたちの世界観は広がりません。その基盤をつくるのが親であり、町の役目だと思っています。私たちのサツマイモ畑では、こども園のお子さんたちに植え付けやいも掘りなどを体験してもらっています。それは、子どもの頃から食と農の大切さを肌で感じてほしいと思ったからです。地域の伝統文化や芸術分野などでも子どもたちが体験できる機会がもっとあればいいと思います。さらに親子で体験できるプログラムがあれば親が子どもの可能性の芽に気づくことができるかもしれません。楢葉町の未来を担う子どもたちの目線でまちづくりを進めていけば大人たちにとってもいい町になっていくのではないでしょうか。

※FGAP：農林水産省の「農業生産工程管理（GAP）の共通基盤に関するガイドライン」に準拠し、放射性物質対策を含めた福島県独自の基準に基づき、GAPを実践する生産者、団体を県が認証する制度。

INTERVIEW 第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 3

楢葉町の未来を担う 子どもの目線でまちづくりを。

猪狩亜希子（いがりあきこ）さん

INTERVIEW 第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 4

豊かな田園風景を取り戻すため、今が踏ん張り時と思い頑張っています。

佐藤充男（さとうみつお）さん

上繁岡大堤は町内でも有数のサクラの名所です。この美しい景観を目の前に望む場所に我が家があります。震災前は、約2haの田んぼで米をつくり繁殖牛も飼育していました。震災後はいわき市で避難生活を送っていましたが、生まれ育った楢葉町へ戻りたいという想いがとても強かったのです。全町避難で家族同然に育ててきた牛は殺処分となり、田んぼもセイタカアワダチソウが生い茂り荒れ放題でした。このままでは町に人が帰ってこないのではないかという危機感を覚えました。平成25年に、上繁岡水田復興会を結成したのも、豊かで美しい田園風景を取り戻したいという想いからです。

上繁岡水田復興会は、震災前から交流があった上繁岡地区の6戸の農家がメンバーです。メンバーは避難先から町に通い、試験栽培や実証栽培を続けながら除染後の田んぼの耕起や草刈りなどの農地保全に取り組んできました。安全なお米をつくり続けることができれば他の農家も戻ってくるのではとの思いもありました。平成24年度の試験栽培、そして平成25年度から始まった実証栽培ではいずれも放射性物質の検査結果が基準値を下回り、米の安全性が確認されました。毎回検査をクリアするなかで、だんだんと米づくりに対する自信も湧いてきました。

出荷制限が解除され、本格的に米の栽培を再開したのは平成28年のことです。6年ぶりに種から苗を育成し、およそ4haの田んぼに作付けしました。その後、徐々に面積を増やしていき令和2年には約30haで作付けを行いました。令和3年には約45haに作付けをする予定です（令和2年10月現在）。

避難指示は解除されたものの町に戻ってくるのは高齢者がほとんどです。また、帰町したとしても農業をやめてしまう人も多い。農業の高齢化と後継者不足は震災以前からの課題です。しかし、震災によってその課題がより深刻なものになったように思えます。楢葉町では原発事故から約4年半もの間、避難指示が続きました。特に若い世代は避難先で新たな生活基盤を築いています。会社を辞めて楢葉町に戻ってくる訳にもいかないでしょう。この先、どうなっていくか見通せないというのが本音のところです。ただ期待しているのは60歳で定年を迎えた人が、町に戻ってきて農業を継いでくれないかということです。私たちが農業で暮らしていけることを示せれば、「俺も農業をやってみよう」という人も出てくると思うのです。そのためにも今が踏ん張り時だとの気持ちで頑張っています。

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 5

帰町した町でゼロからの挑戦。ユーカリ栽培に力を注いでいます。

柴田浩光（しばたひろみつ）さん

震災当時、私は町の消防団長として住民の避難誘導に当たっていました。その際、団員の一人が津波に呑まれ命を落としたのが今でも悔やまれてなりません。全町避難の際は、町の災害対策本部と活動をともにしました。私と二人三脚で米づくりに励んできた父が他界したのは震災から4カ月後の7月のことです。

震災後、町は立ち入りが制限されていました。しかし、空き巣などの防犯面に不安を抱く町民もいました。そこで震災の年の11月に発足したのが楢葉町特別警戒隊です。私は隊長として指揮を執ることになりました。当初、パトロール活動は南工業団地内と大坂地区で始まりました。その後は活動範囲を町内全域に広げ、365日24時間体制で行うことになりました。こうした消防団での活動に終止符を打ったのは平成28年のことです。振り返れば49年間に及ぶ団歴です。

楢葉町は私が生まれ育った町です。帰町は私にとってごく自然のことでした。震災で被災した住まいを改築し平成28年6月に帰町しました。かつて兼業で取り組んでいた米づくりは、高齢化や人手不足、後継ぎの問題などもあり辞めざるを得ない状況でした。企業に貸し出して米づくりをしている土地を含め、農地をどう活用していくのかは今後の課題です。

農地の有効活用として新たに栽培を始めたものがあります。清涼感あふれる香りが特徴のユーカリです。きっかけは楢葉町がユーカリの栽培に適した気候風土であるという話を聞いたことでした。ユーカリといえばコアラのエサという知識ぐらいしか私にはありませんでした。その市場動向を探るため東京の大田花き市場やユーカリ栽培が盛んな会津地方などへ視察に出かけました。そこで、いろいろな花と合わせやすい緑の花材としてユーカリが人気だということを知りました。生け花やブーケなどでユーカリは欠かせない存在なのです。令和元年6月、試験的に植え付けをしユーカリ栽培をスタートさせました。2年目となる令和2年には170本のユーカリを育て、初めて市場に出荷することになりました。手間がかからない植物と聞いていましたが、土づくりや強風対策、害虫・害獣対策など苦労は尽きません。

町内では8軒の農家がユーカリ栽培に取り組んでいます。私にとってユーカリ栽培はゼロからの挑戦です。今は、新たなまちづくりが進む楢葉の大地で、仲間とともにユーカリ栽培を軌道に乗せるために力を注いでいきたいと考えています。

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 6

「お買いものバス」をとおして、心のタスキをつないでいきたい。

金久保峯子（かなくぼみねこ）さん

私は楢葉町で生まれ育ちました。震災まで楢葉町以外で暮らしたことはありません。町で開催されていた「ゆずの里ロードレース大会」には毎年参加していました。走ることは私の趣味であり生きがいです。避難先の茨城県鹿嶋市でも「福島ならはの風」というチームをつくり市の駅伝大会に出場していました。鹿嶋市に避難されていた楢葉町の方や、駆けつけてくれたかつての同僚たち、鹿嶋市で知り合った方がメンバーとなって一緒に走ってくれました。まさに三位一体となって走れた仲間たちです。タスキをつなぐことでお互いの絆をさらに深めることができました。

楢葉町の自宅のすぐ近くに私の実家があります。避難指示が解除されて両親が先に町へ戻りました。その両親のことが気がかりで、私たち夫婦も楢葉町に戻ることにしました。帰町して改めて感じたのは、五感を癒してくれる豊かな自然が楢葉町の魅力だということです。青い空に浮かぶ白い雲。四季を彩る花々の香り。そよ吹く風に揺れる木々の葉。耳を澄ませば虫の音や鳥のさえずりも聞こえてきます。避難先が市街地だったのでなおさらそう感じたのでしょう。町を離れなければその魅力に気づくことができなかったかもしれません。その反面、かつて田んぼだったところに新しい商業施設や交流館、病院などが整備されました。懐かしい人と再会する喜びや、震災後に町にやってきた人との出会いによって新たな発見もあります。

福島第一原発が爆発した時に次男から言われた言葉があります。「お母さん大丈夫だよ。楢葉町はこれから人がうらやむすごい町に生まれ変わるから」。その言葉どおり、町は着実に復興を遂げています。懐かしくて新しいまち。楢葉町にはそんな故郷になってほしい。私も復興の一助になればと思い各地区と商業施設を結ぶ「お買いものバス」の添乗員をしています。利用者の多くが高齢者です。リュックを背負い颯爽と歩く方もいれば、杖を片手に慎重に歩みを進める方もいます。しかし、自分で身支度をしてバスに乗り、自力で買い物ができる皆さんは、元気はつらつとしていてすばらしいです。車内では会話もはずみます。いつも乗車される方の姿がないと「どうしたんだろう」と気になってしまいます。お買い物のためのバスが高齢者の交流を深める場になっていることを実感する日々です。

バスを利用される高齢者のように私も思いやりを忘れずに元気に歳を重ねていきたい。元気でいるコツと人とつながる方法は人それぞれです。私の場合、それは走ることでした。駅伝はタスキで人と人をつないでいきます。「お買いものバス」が人と人をつなぐ場でもあるならば、そこには目には見えない心のタスキがあるはずです。添乗員として、そのタスキをしっかりとつないでいきたいと思っています。

平成28年7月、北田地区のコンパクトタウン内で歯科医院を再開しました。歯科医のいない町にしたくないという想いからです。知り合いの歯科医に「楢葉町で医院を再開する」と言ったら「私なら絶対にあり得ない」と言われました。採算が合わないというのがその理由です。双葉郡の多くの歯科医がそう考えていたかもしれません。だからといって歯科医がいない町でいいという訳にはいきません。私が道を拓いていこうという覚悟を持って医院の再開を決断しました。

震災後は町内での医院再開を模索しながら、山形県飯豊町の歯科医院で勤務医をしていました。医院へは避難先の会津若松市から通勤していましたが、冬の雪道を心配され飯豊町に隣接する長井市に転居することになりました。私を訪ねて楢葉町の患者さんが来院されたこともありました。いわき市の上荒川仮設住宅内に仮設の診療所を構えたのは平成26年7月のことです。当初は、町の避難指示が解除されたら、仮設診療所から町内の歯科医院に徐々に軸足を移していく計画でした。しかし、途中から県の方針が2つの医療機関を運営してはいけないという話に変わってしまい計画の軌道修正を余儀なくされました。町から「コンパクトタウン内で再開してもらえないか」との打診を受け、北田地区に新医院を建設することになったのです。

町内で歯科医院を再開するにあたり苦労したのは人集めです。働こうにも住む家がなければ始まりません。自宅の敷地内にアパートを建て、「住むところはあるから楢葉町に来ないか」と声をかけました。仮設診療所を始める際も町内での医院再開を前提にスタッフを集めました。しかし、実際に楢葉町に行くとなったら「私は無理です」という話に変わってしまった方もいました。町内の医院再開でうれしい誤算だったのは、広野町の方がたくさん来院されたことです。当時は患者の半数近くが広野町の方でした。歯科医院がたくさんあるにもかかわらず避難先のいわき市から来院される町民の方もいました。

いろいろな状況を考えると今後は楢葉町が双葉郡南部の中心地にならざるを得ないでしょう。人が来て、町を見て、住んでもいいかなと思ってもらえるような町になってほしいと思います。「道の駅ならは」にRVパーク（快適に安心して車中泊ができるスペース）などをつくってみるのもいいでしょう。魅力的なまちづくりをしていけば多くの人が集い、付随的にいろいろな施設も充実してきます。約6割の町民が楢葉町に戻ってきています。高齢でさまざまな疾病を抱えている方もいれば、小さなお子さんもいます。歯科を含めた医療体制のさらなる充実が楢葉町の課題だと考えています。

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 7

歯科医のいない町にしたくない。覚悟を持って医院の再開を決断しました。

蒲生正若（がもうまさわか）さん

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 8

復興関係の方と地元の方を結ぶ場を、まちづくりを語り合う場へしていきたい。

古谷かおり（ふるや）さん

震災当時は東京のハウスメーカーで働いていました。大学で建築や環境デザインを学んでいましたが、震災をきっかけに、〝人の暮らしを守る建築〟を学び直すため夜学に通うことにしました。平成28年4月に郡山市の設計事務所に採用され福島で新たな生活をスタートさせました。福島への移住を決めたのは、震災の被災地なら私を必要としてくれるのではと考えたからです。移住する1年ほど前から、設計事務所のインターンや「ふくしま復興塾」に参加するため東京と福島を往復する日々は続いていました。復興塾は福島の未来を担う人材を育てるためのプロジェクトです。そこでの出会いや学びが私の転機となりました。

楢葉町とのご縁も、復興塾の同期が立ち上げた町内の古民家を活用したコミュニティづくりに参加したことから生まれたものです。その取組みをとおして楢葉町の方々との関係が深まり、建物をつくるよりもコミュニティの場をつくっていきたいという想いも募っていきました。そんな時、復興塾で取り組んでいた事業計画に補助金が付くことになりました。計画の内容は、交流するための飲食店というものでした。それが後押しとなり、平成29年9月に木戸の小料理屋「結のはじまり」をオープンさせたのです。

「どうして飲食店なの?」とよく尋ねられます。復興塾のフィールドワークで、県外から来られた復興関係の方と地元の方との間に大きな溝や誤解があることを知り、両者が交わる場の必要性を感じていました。人と人がともに食を囲むことで、そこに会話が生まれ、自然な交流が広がっていくのではないかと考えたのです。復興関係の方と地元の方を結ぶ架け橋になれればとの想いで始めたのが「結のはじまり」でした。

お店を営みながら、シェアハウスの運営や地域体験のコーディネートをするお仕事もさせていただいています。移住を考えている方を対象にシェアハウスに民泊機能をもたせたり、移住された方をサポートしていく会社も立ち上げました。木戸の有志の方々と「ごんげんさま公園」という私設公園づくりにも取り組んでいます。

楢葉町とはまったく縁のなかった千葉県出身の私が今まで活動してくることができたのは、お力添えをいただいた地元の方々のおかげです。その温かさや優しさが楢葉町の大きな魅力です。お店については、当初掲げた復興関係の方と地元の方との交流の場というテーマを達成しつつあると感じています。これからは、まちづくりを語り合う仲間が集う場所、町のあらゆる立ち位置の方と情報交換ができる場所、そして、自らの道を拓いていくきっかけになるような場所にしていけないかと思っているところです。

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 9

先人たちの想いを重ねた、丁寧なまちづくりを進めていきたい。

西崎芽衣（にしざきめい）さん

私は東京都出身です。親元を離れて京都の大学に進学しました。在学中に先輩たちと学生団体を立ち上げ、楢葉町の仮設住宅で足湯を使った傾聴ボランティアを行うようになりました。「まちに戻れたらいいね」と語っていた高齢の女性が帰町しない判断をしたことを知り、町民の方々が直面している現実や、それぞれの想いにじっくりと寄り添いたいと思うようになりました。大学を1年休学して「（一社）ならはみらい」の臨時職員になったのは平成27年4月のことです。

「ならはみらい」では、町民によるまちづくり活動のサポートや町内バスツアーの企画、町外ボランティアの受け入れなど、さまざまな事業に取り組むことができました。同じ楢葉町民といっても、年齢や立場によって想いはさまざまです。避難指示解除当時は、町に戻った人と戻っていない人の間で意見がぶつかり合う場面もありました。町民の方一人ひとりの想いに触れ、悩みながら、少しでも楢葉町の役に立てるよう力を尽くした1年でした。

就職先は東京都内の企業に内定しました。しかし、企業が求める人物像と私が描く将来像の間で心は揺れ動いていました。避難指示解除後、避難先の仮設住宅で出会った方々と楢葉町内で会うことが増え、「今日、震災後初めて家に泊まるんだ」と嬉しそうに話す姿が印象的でした。当たり前だと思っていた日常が、どんなに大切でかけがえのないものなのか、楢葉町で過ごした日々が私に気づかせてくれたことです。このまま就職したらせっかく気づくことができた大切な価値観を忘れてしまうと思いました。迷いはありましたが、内定を辞退して楢葉町で暮らすことを決めました。平成29年4月、「ならはみらい」の職員に採用され、私は楢葉町の住民になりました。まちづくり活動を通して知り合った役場職員の男性と結婚し、令和2年12月には新しい命が誕生しました。避難指示解除後、真っ暗だった町並みに、一つ、また一つと暮らしの小さな灯りが増えて行く様子に未来を感じて、「灯」という字を子どもの名前に付けました。

私の担当する仕事の一つに、みんなの交流館「ならはCANvas」の企画・運営があります。施設は、かつて田んぼだった場所に建てられたものです。「収穫を喜んでいた方々の笑顔の上に交流館がある。その人たちに出来て良かったと思ってもらえるような施設にするべき。そうした人たちのおかげで今の楢葉町があることを忘れてはいけない。震災でさまざまなものを失った人たちの想いを大切にしてほしい。」これは施設の建設を担当していた夫の言葉です。交流館は、ワークショップを通じて町内外さまざまな人の想いを集めて設計されたという特徴もあります。この場所で歴史を紡いできた方々に想いを馳せながら、利用者の方々とともに施設を彩っていきたいと考えています。

楢葉町には、町民一人ひとりが得意なこと、好きなことを活かしながら、「自分のまちを自分でつくる」活気ある町になってほしい。それぞれの想いを大切に育んでいく町であるからこそ、個性的で魅力ある地域になると考えています。先人たちの想いを重ねながら、家族や仲間たち、町民の皆さんと一緒に丁寧にまちづくりを進めていきたいと思っています。

私は高校の1年生です（令和3年7月現在）。震災の時はまだ5歳でした。震災後は、両親、そして3歳年上の姉と、新潟県の知人宅へ避難していました。いわき市にアパートを借りたのは数カ月後のことです。アパートは老朽化などでビー玉が転がるほど建物が傾いていました。快適とはほど遠い生活環境です。「町へ帰ろう」。両親の言葉に姉と声をあげて喜び合ったことを覚えています。「今日は僕にとって、とってもうれしい日。大好きな自分の家に帰って住むことができる」。これは、復興祈念式典で帰町への喜びを発表した時の作文の一部です。

私たち家族が帰町したのは平成27年10月のことです。当時、小学4年生の私と中学1年生の姉は楢葉町に戻ってきた最初の小・中学生でした。約30㎞離れたいわき市の仮設校舎へ町が用意してくれた車で朝夕揺られながら通学する日々が続きました。当時は、帰町する子どもたちが少なく放課後や休日に友だちと遊ぶ機会も減りました。しかし、町内の学校再開とともに多くの子どもたちが町に戻ってきました。

中学校では、教科学習、部活動、生徒会、Nalys（ナリーズ：模擬会社）、ふるさと創造学など、さまざまな活動に取り組んできました。とても充実した中学生活です。小学5年生から始めた卓球は県大会進出を果たすことができました。楢葉中学校の生徒が設立したNalysでは、企業と共同でさまざまな商品をプロデュースしてきました。新型コロナウィルスが流行する中で考案した抗菌軍手もその一例です。Nalysのロゴマークは私が考えた図案を基に作成されたものです。また、震災で得た経験を生きる力に変える「ふるさと創造学」での学びも楢葉町への愛着を深める貴重な経験となりました。

楢葉町の人口は震災前の6割ほどしか戻っていません。震災前のように多くの人が集まる町になってほしい。楢葉町には海があり、川があり、山があります。私はサーフィンをやっていて、楢葉町の浜にはいい波が立つサーフィンポイントがあります。こうした楢葉町の自然環境にもっとスポットを当ててアピールしていけば多くの人が集まる町になっていくのではないでしょうか。

楢葉町のために私も何か力になりたい。しかし、その〝何か〟の具体像はまだ描けていません。今は、大学進学という目標に向かって、目の前の課題を一つひとつ乗り越えていくことに全力を尽くしています。

INTERVIEW

第2部 帰町した町民が語る「新生ならは」の姿 10

楢葉町のために何か力になりたい。今は高校の勉強に全力を尽くしています。

立花克磨（たちばなかつま）さん

一楢一葉一町一災一害一記一録一誌一

資料編

東日本大震災と楢葉町
復興、そして未来へ

楢葉町 復興10年の軌跡［2011.03.11-2021.03.31］
第六次楢葉町勢振興計画

語り継ぐ震災、築く未来へ

平成23(2011)年

3月11日　**東日本大震災発生**
(14:46震度6強の巨大地震、15:30最大10m超の大津波の襲来)

政府から福島第一原発へ原子力緊急事態宣言が発出
(19:03)

3月12日　**いわき市へ全町避難指示**
(8:00)
(楢葉町災害対策本部会議にて全町避難を決定。高齢者、障がい者、子ども、妊婦等を優先し、いわき市の小学校へ避難)

ときわ苑、リリー園の利用者のバス避難が開始
(12:30)

福島第一原発1号機水素爆発
(15:36)

3月14日　**福島第一原発3号機水素爆発**
(11:01)

3月15日　**福島第一原発4号機水素爆発**
(6:14)

3月16日　**会津美里町(姉妹都市)への二次避難開始**
(計7回にわたり約1,000名を移送)

3月25日　**会津美里町本郷庁舎に災害対策本部設置**
(楢葉町会津美里出張所を同所へ設置)

4月12日　**国は、福島第一原発事故の国際的な事故評価の尺度を最も深刻な事故とされる「レベル7」(チェルノブイリ事故級)に認定**

4月22日　**福島第一原発から半径20km圏内を警戒区域に設定**
(楢葉町への立ち入りができなくなる)

4月26日　**いわき明星大学館内に楢葉町いわき出張所開設**

東日本大震災(H23. 3. 11)

いわき市へ全町避難指示(H23. 3. 12)

会津美里町(姉妹都市)への二次避難開始(H23. 3. 16)

会津美里町本郷庁舎に災害対策本部設置(H23. 3. 25)

4月27日　**津波による行方不明者捜索開始**

5月25日　**借上げ住宅への入居開始**

6月6日　**楢葉町内への一時立入り開始**

6月11日　**会津美里町内の仮設住宅への入居開始**

6月30日　**東日本大震災被害者慰霊式が開催**

7月1日　**いわき市内の仮設住宅への入居開始**
(「高久第5」を皮切りに、順次、各仮設住宅への入居がはじまる)

9月30日　**緊急時避難準備区域解除**

10月23日　**仮設店舗くんちぇ広場オープン**
(生鮮食品、菓子、惣菜、日用品などを販売する共同店舗)

12月7日　**自衛隊が楢葉町役場の除染を実施**
(~12/16)

12月14日　**いわきならは村ふれあい広場オープン**
(生鮮食品、酒、煙草、日用品の小型スーパー)

12月19日　**みんなのお店きずなオープン**
(避難した町民が会津美里町で栽培した採れたての野菜や漬物等を販売)

12月21日　**政府と東電が福島第一原発1~4号機の廃炉に向けた工程表を発表**

平成24(2012)年

1月8日　**平成24年楢葉町成人式をいわき明星大学で開催**

1月17日　**災害対策本部をいわき出張所に移転**

1月30日　**楢葉町復興ビジョン策定**

2月11日　**ならは雪まつりが会津美里町宮里仮設住宅で開催**

2月12日　**復興大臣に東京電力第一原発における原子力災害及び復興対策に係る要望を実施**

福島第一原発から半径20km圏内を警戒区域に設定(H23. 4. 22)

楢葉町内への一時立入り開始(H23. 6. 6)

会津美里町内の仮設住宅への入居開始(H23. 6. 11)

災害対策本部をいわき出張所に移転(H24. 1. 17)

楢葉町　復興10年の軌跡 [2011.03.11–2021.03.31]

3月4日　震災から1年の追悼式を天神岬スポーツ公園で開催

4月6日　楢葉町の小中学校がいわき市の仮校舎で再開

4月23日　国による町内の本格除染開始
（～平成26年3月28日）

4月26日　楢葉町復興計画＜第一次＞策定

5月12日　宮里応急仮設住宅で春の自治会事業が開催

5月13日　宮里仮設住宅集会所に「あいづじげん番所」開設

5月22日～　町政懇談会を開催

7月1日　町の行政組織見直し
（復興推進課、放射線対策課、生活支援課が新設）

7月11日　Jヴィレッジフィットネスジム（仮設）がいわき市内で再開

8月1日　東電損害賠償相談窓口がいわき出張所に設置

8月4日　ならはふれあい祭りが上荒川仮設第3集会所で開催

8月5日　「アツい友情！ならはっこATSUMARE」in いわき海浜自然の家が開催
（町の小中学生、保護者、先生が一堂に会し、ならはまちの絆を確認）

8月10日　警戒区域が解除（避難指示解除準備区域に再編）
（町内への人の出入りが自由になり、事業活動も再開）

8月24日　第1回ならは夏まつりが会津美里宮里仮設住宅で開催

9月26日　経済産業省へ早期復興に向けた各種支援、施設の誘致・整備等に係る要望を実施

9月30日　復興推進委員会の設置

10月1日　特別警戒隊による町内24時間パトロールの開始

楢葉町の小中学校がいわき市の仮校舎で再開（H24. 4. 6）

楢葉町復興計画＜第一次＞策定（H24. 4. 26）

Jヴィレッジフィットネスジム（仮設）がいわき市内で再開（H24. 7. 11）

警戒区域が解除（避難指示解除準備区域に再編）（H24. 8. 10）

Chronological table of Naraha Town

ロールの開始

双葉広域消防本部仮庁舎が南工業団地内に開所

10月7日　野田首相（当時）に原子力防災・除染・廃炉関係施設の立地等に係る要望を実施

10月12日　双葉警察署臨時庁舎が道の駅ならはに開所

10月21日　楢葉中学校にて「ゆずり葉祭」を開催

10月23日　楢葉町除染作業員による自主防犯パトロールの開始

10月29日　天神岬温泉しおかぜ荘の町民への無料開放を開始

11月30日　会津美里町宮里仮設住宅自治会が町内クリーンアップ作戦を実施

12月29日　安倍首相へ「新生ならは」を推進するための各種要望を実施

平成25（2013）年

1月5日　こども園の入園式が仮設校舎にて開催

1月8日　小中学校の3学期の始業式が仮設校舎にて開催

1月9日　文部科学大臣に中学校改築の財政支援等に係る要望を実施

1月13日　平成25年楢葉町成人式をいわき明星大学で開催

1月17日　環境大臣と除染現場を確認し、きめ細やかな作業の徹底を要望

1月27日～　町政懇談会を開催

2月4日　復興庁に原子力発電所廃炉に向けた拠点づくり等に係る要望を実施

2月16日　第2回ならは雪まつりが会津美里町

双葉広域消防本部仮庁舎が南工業団地内に開所（H24. 10. 1）

双葉警察署臨時庁舎が道の駅ならはに開所（H24. 10. 12）

こども園の入園式が仮設校舎にて開催（H25. 1. 5）

平成25年楢葉町成人式をいわき明星大学で開催（H25. 1. 13）

宮里仮設住宅で開催

2月20日　楢葉ときわ苑がいわき市内郷地内で再開

3月3日　ふくしま浜街道・桜プロジェクト記念植樹祭が楢葉町で開催

3月16日　放射線に関する不安や疑問に応える講演会を開催
（講師：東京大学児玉教授）

3月27日　ガラスバッチ（累積線量計）の貸出開始

4月3日　きずな再生電子回覧板事業開始
（各世帯にタブレット端末を配布し、情報を発信）

5月19日　ブイチェーンネモト本店が営業再開
（スーパーとしては旧警戒区域内初）

5月22日　国は原発廃炉に係る研究施設について楢葉南工業団地への立地を決定

5月24日　楢葉町復興計画＜第二次＞策定

5月26日　営農再開に向けて、水稲実証栽培を実施

6月26日・27日　町民の帰還に向けた緊急要望活動の実施
（中央省庁に対し、原子力安全対策、除染、廃棄処理、インフラ復旧等の支援を要望）

7月1日　安倍首相（当時）に復興インターチェンジの設置に係る要望を実施

7月13日　洋上風力発電実証研究事業が楢葉沖でスタート
（11月11日から東北電力に供給開始）

8月4日　「アツい友情！ならはっこATSUMARE」を開催

8月26日　セブンイレブン下小塙店が営業再開
（コンビニエンスストアとしては旧警戒区域初）

8月31日　第2回ならは夏まつりが会津美里町宮里仮設住宅で開催

楢葉ときわ苑がいわき市内郷地内で再開（H25. 2. 20）

ガラスバッチ（累積線量計）の貸出開始（H25. 3. 27）

きずな再生電子回覧板事業開始（H25. 4. 3）

洋上風力発電実証研究事業が楢葉沖でスタート（H25・7・13）

セブンイレブン下小塙店が営業再開（H25. 8. 26）

9月1日　町の行政組織見直し
（新産業創造室が新設）

9月13日　町の若者（11名）と町長の懇談会開催

9月28日〜　町政懇談会を開催

10月4日　仮設校舎体育館でピアニスト・西村由紀江さんがピアノコンサートを実施

10月6日　会津美里ふれあいウォーク2013の開催

10月21日　ふたばワールドが14年ぶりに復活
（広野町総合グラウンド）

11月8日　いわき明星大学と連携協力協定を調印
（復旧・復興に向けた資料の収集や調査研究、復興計画や除染計画の策定等）

11月26日　楢葉町除染検証委員会の設置
（第1回委員会開催）

水稲実証栽培で収穫した米の全量全袋検査を実施
（いずれも基準値を下回る結果）

12月28日　震災後初の特例宿泊実施

平成26（2014）年

1月12日　平成26年楢葉町成人式を楢葉小中学校仮設校舎で開催

福島・国際研究産業都市構想の策定のための国の米国視察へ同行
（町長、新産業創造室長）

1月26日　楢葉町消防団出初式を木戸八幡神社で実施

2月15日　第3回ならは雪まつりが会津美里町宮里仮設住宅で開催

2月22日　常磐自動車道「広野IC〜常磐富岡IC」間が再開通

町の若者（11名）と町長の懇談会開催（H25. 9. 13）

会津美里ふれあいウォーク2013の開催（H25. 10. 6）

いわき明星大学と連携協力協定を調印（H25. 11. 8）

水稲実証栽培で収穫した米の全量全袋検査を実施（H25. 11. 26）

楢葉町　復興10年の軌跡 [2011.03.11−2021.03.31]

3月18日　**楢葉町帰町計画策定**
（安全の確保・生活に必要な機能の回復のための24項目を帰町判断の考慮要件に）

第１回楢葉町防災会議の開催
（第２回（３月28日）、第３回（５月15日）にて地域防災計画が改定）

3月22日　**放射線に関する不安や疑問に応える講演会を開催**
（講師：東京大学児玉教授）

楢葉町原子力防災対策検討委員会から報告書の提出

4月３日　**楢葉町除染検証委員会から第一次報告書の提出**

4月15日　**４年ぶりに鮭の稚魚を木戸川に放流**

4月21日～　**町政懇談会を開催**

4月23日　**楢葉町土地利用計画アクションプランの策定**

5月15日　**除染廃棄物仮置場における住民監視が開始**

5月23日　**営農再開に向けて、水稲実証栽培を実施**

5月29日　**「帰町の判断」表明**
（帰町を目指す時期として、「諸条件が概ねととのうことを前提に、早ければ平成27年春以降になる」との見通しを示す）

6月１日　**JR常磐線「広野駅～竜田駅」間運行再開**

現地役場に帰町準備室発足
（現地において役場機能の一部再開）

6月30日　**一般社団法人ならはみらい設立**
（町の復興に向けて取り組む復興まちづくり会社）

7月１日　**蒲生クリニック（仮設歯科診療所）が上荒川仮設住宅内で再開**

7月２日　**サッカー日本代表GK川島永嗣選手が中学校を訪問**

大きな桜の木を描く「命の一本桜プロジェクト」を楢葉町立南北小学校で開催

常磐自動車道「広野IC～常磐富岡IC」間が再開通（H26. 2. 22）

除染廃棄物仮置場における住民監視が開始（H26. 5. 15）

営農再開に向けて、水稲実証栽培を実施（H26. 5. 23）

「帰町の判断」表明（H26. 5. 29）

Chronological table of Naraha Town

7月23日　**復興大臣に「“新生ならは”の創造」に向けた要望を実施**

7月28日　**住環境回復支援事業の開始**
（ネズミ・害虫駆除支援と住宅清掃費用補助による、住環境の回復を支援）

7月31日　**ここなら商店街（仮設商業施設）オープン**
（おらほ亭、武ちゃん食堂役場前店、ブイチェーン楢葉店）

8月１日　**役場本庁舎に除染等に関する相談窓口設置（環境省）**

8月３日　**第３回ならは夏まつりが会津美里町宮里仮設住宅で開催**

8月22日　**ならはスマートインターチェンジ（仮称）整備決定**
（供用開始は平成30年度）

8月29日　**町内への県立仮設診療所の整備決定**
（平成27年度内にあおぞらこども園西側で開院）

9月５日　**楢葉町原子力施設監視委員会設置**
（第１回委員会の開催）

9月15日　**国道６号全線開通**
（富岡町－双葉町間の通行規制解除）

9月22日　**復興大臣に３つの重点施策に係る要望活動実施**
（安心できる生活環境の回復、生活再建支援策の充実、住み良い魅力あるまちづくりに係る支援を要望）

9月26日　**楢葉遠隔技術開発センター起工式**
（平成28年度から南工業団地内で本格運用）

9月28日　**ふたばワールド2014 in かわうち開催**

10月～　**国によるフォローアップ除染の開始**

10月15日　**環境省による家屋の解体作業開始**

10月31日　**町公式Facebookによる情報配信の開始**

JR常磐線「広野駅～竜田駅」間運行再開（H26. 6. 1）

一般社団法人ならはみらい設立（H26. 6. 30）

蒲生クリニック（仮設歯科診療所）が上荒川仮設住宅内で再開（H26. 7. 1）

楢葉町原子力施設監視委員会設置（H26. 9. 5）

11月５日　**住鉱エナジーマテリアル㈱が進出決定**
（平成27年末から工業団地内で操業開始）

11月７日　**水稲実証栽培で収穫した米の全量全袋検査を実施**
（いずれも基準値を下回る結果）

11月８日・14日　**まちめぐりバスツアーの開催**
（町内のさまざまな場所を巡り、町の現状や水の安全対策を町民の方に見て確かめていただく機会を提供）

11月18日～　**第14回楢葉町町民号を11年ぶりに復活・実施**

12月９日　**総合グラウンド斜面ソーラー発電所（福島発電㈱）の竣工**

12月15日　**小山浄水場における放射性物質モニタリング検査体制を強化**
（それまでの週３回実施から毎日実施へ）

12月22日　**楢葉原子力災害対策センター（オフサイトセンター）起工式**
（平成28年４月から南工業団地内で供用開始）

平成27（2015）年

1月11日　**平成27年楢葉町成人式を楢葉小中学校仮設校舎で開催**

1月18日　**楢葉町消防団出初式を楢葉南小学校で実施**

1月25日～　**町政懇談会を各仮設住宅等で開催**

1月26日　**住宅再建相談窓口の開設**
（事務局一般社団法人ならはみらい）

1月28日　**震災後初となる楢葉町役場庁舎における議会の開催**

1月30日　**ファミリーマート上繁岡店が営業再開**
（旧警戒区域内では初めての24時間営業）

1月31日　**JR常磐線「竜田駅～原ノ町駅」間の代行バスサービス開始**

住鉱エナジーマテリアル㈱が進出決定（H26. 11. 5）

まちめぐりバスツアーの開催（H26. 11. 8・14）

楢葉町消防団出初式を楢葉南小学校で実施（H27. 1. 18）

ファミリーマート上繁岡店が営業再開（H27. 1. 30）

2月５日　**元陸上競技選手・為末大さんが楢葉中学校を訪問し、特別授業を実施**

2月７日　**第４回ならは雪まつりが会津美里町宮里仮設住宅で開催**

2月17日　**宇宙飛行士・山崎直子さんが楢葉北・南小学校を訪問し、特別授業を実施**

2月18日　**野菜の摂取・出荷制限解除**

ならは復興加速円卓会議（第１回）開催
（町の復興に向けた対応について意見を交わし合う政府と町民の対話の場）

2月19日　**楢葉中学校の新校舎竣工**

３月１日　**常磐自動車道全線開通・ならはパーキングエリアの供用開始**

３月４日・５日　**中央省庁に対して「町の３つの重点施策」の支援に係る要望を実施**

３月５日　**楢葉町除染検証委員会から第二次報告書の提出**

３月21日　**復興祈願祭「楢葉ならでは祭」開催**

３月27日　**原子力施設監視委員会から報告書の提出**

４月１日　**楢葉町役場本庁舎窓口における一部の証明書等の発行業務開始**

４月６日　**準備宿泊開始**
（３カ月間）

４月７日　**東邦銀行移動店舗車の営業開始**
（現地役場西側駐車場で週２日）

４月25日～　**楢葉町における住民懇談会の開催**
（計12回）

５月７日　**線量管理に係る座談会の開催**

５月28日　**学校再開検討委員会立ち上げ**

６月19日～　**楢葉町における住民懇談会（２巡目）の開催**
（計８回）

元陸上競技選手・為末大さんが楢葉中学校を訪問し、特別授業を実施（H27. 2. 5）

第４回ならは雪まつりが会津美里町宮里仮設住宅で開催（H27. 2. 7）

宇宙飛行士・山崎直子さんが楢葉北・南小学校を訪問し、特別授業を実施（H27. 2. 17）

復興祈願祭「楢葉ならでは祭」開催（H27. 3. 21）

6月22日　平成27年度楢葉町原子力監視委員会開催

楢葉町放射線健康管理委員会設置

6月27日　風とロックCARAVAN！福島 inならは開催

7月1日　帰還に向け役場機能の移転
（総務課、復興推進課、政策広報室）

7月6日　原子力災害現地対策本部長より平成27年9月5日避難指示解除の旨伝達

7月8日　ならは応援団による「花とみどりのプロジェクト」始動
（国道6号沿い、天神岬にマリーゴールド等の植栽）

7月11日　「なにかし隊」初会合

7月13日　ブイチェーンネモトの宅配サービス開始

7月25日　まちめぐりバスツアーの開催

7月27日　前原、山田浜及び井出地区の海岸において防潮堤の整備着手

8月5日　生活再生空き地・空き家バンク事業開始

8月9日　クリーンアップ作戦実施

8月11日　福島大学いわき・双葉地域支援サテライト開所（こども園）

8月25日　ルートイングループとホテル進出に係る覚書締結

8月29日　第一回復興推進委員会開催

9月5日　避難指示解除。復興祈念式典開催

9月19日　「楢葉町サイクリングターミナル」（宿泊施設）と「天神岬温泉しおかぜ荘」（温泉施設）が再開

10月1日　主要道路交差点付近（24カ所）で防犯カメラの運用開始

ときクリニック再開

原子力災害現地対策本部長より平成27年9月5日避難指示解除の旨伝達（H27. 7. 6）

ならは応援団による「花とみどりのプロジェクト」始動（H27. 7. 8）

クリーンアップ作戦実施（H27. 8. 9）

避難指示解除。復興祈念式典開催（H27. 9. 5）

10月13日　楢葉郵便局再開

10月19日　楢葉遠隔技術開発センター研究管理棟完成。開所式開催

10月30日　木戸川鮭漁が復活

11月4日　デイサービスセンター「やまゆり荘」が再開

平成28（2016）年

1月10日　震災後初めての成人式を楢葉町内（あおぞらこども園）で開催

2月1日　福島県立大野病院附属ふたば復興診療所（愛称：ふたばリカーレ）が診療を開始

2月27日　JAふたば楢葉支店が再開

3月26日　天神岬スポーツ公園の遊具リニューアル

3月30日　特別養護老人ホーム「リリー園」が再開

楢葉遠隔技術開発センター試験棟完成。完成式開催。

4月21日　東邦銀行楢葉支店が営業を再開

7月1日　蒲生歯科、町内で再開

7月7日　楢葉町地域文化交流拠点「楢葉まなび館」オープン

7月12日　県原子力災害対策センター（オフサイトセンター）が楢葉町と南相馬市で本格運用を開始

9月1日　いわき市民コミュニティ放送（FMいわき）が町内で受信可能に

9月4日　楢葉町町制施行60周年記念式典を挙行

9月28日　楢葉町対策地域内廃棄物処理施設（仮設焼却炉）で火入れ式を開催

10月5日　楢葉産米が6年ぶりに市場に出荷

楢葉遠隔技術開発センター研究管理棟完成（H27. 10. 19）

木戸川鮭漁が復活（H27. 10. 30）

楢葉町地域文化交流拠点「楢葉まなび館」オープン（H28. 7. 7）

楢葉町町制施行60周年記念式典を挙行（H28. 9. 4）

平成29（2017）年

1月24日　蛭田牧場が原乳の出荷を再開

4月6日　楢葉町の小中学校が町内で再開

4月7日　楢葉町あおぞらこども園が町内で再開

4月23日　天神岬スポーツ公園に双葉郡初のドッグランがオープン

6月27日　災害公営住宅（中満）全戸（123戸）完成

7月8日　小･中学生対象の「土曜学習会（通称：ゆずり葉学習会）」がスタート

7月14日　波倉・前原・山田浜の楢葉町消防団屯所が竣工。波倉地区で合同竣工式を開催

7月19日　楢葉中学校生徒が『10年後の楢葉町』を提言

9月2日　総合グラウンド野球場に電光掲示板が完成

9月12日　楢葉町復興推進課の下部組織として「中学生室」が発足

10月21日　JR常磐線の「竜田駅」―「富岡駅」間の営業運転が再開

10月29日　木戸川漁業協同組合が栽培漁業部門で水産庁長官賞を受賞

12月3日　「ゆずの里ロードレース大会」が7年ぶりに開催

平成30（2018）年

2月26日　震災後初の子ども議会を開催

3月31日　応急仮設住宅等の供与終了
（特定延長除く）

4月3日　楢葉町消防団機能別団発足

楢葉産米が6年ぶりに市場に出荷（H28・10・5）

楢葉町の小中学校が町内で再開（H29・4・6）

楢葉町あおぞらこども園が町内で再開（H29・4・7）

JR常磐線の「竜田駅」―「富岡駅」間の営業運転が再開（H29. 10. 21）

「ゆずの里ロードレース大会」が7年ぶりに開催（H29・12・3）

4月8日　大瀧神社の浜下り、8年ぶりの神輿渡御

4月18日　日本酒「楢葉の風」が販売を開始

6月19日　「楢葉まなび館」で市民大学が開講

6月26日　笑ふるタウンに商業施設「ここなら笑店街」がオープン

7月27日　「楢葉まなび館」に 東京大学アイソトープ総合センター「ならはサテライト」が開所

7月28日　「Jヴィレッジ」が一部施設で営業を再開

7月30日　みんなの交流館「ならはCANvas」オープン

8月7日　夏期巡回ラジオ体操・みんなの体操会を実施

9月8日　「Jヴィレッジ」に国内初の全天候型練習場がオープン

11月2日　双葉地方企業団が「ふくしま木戸川の水」を発売

平成31・令和元（2019）年

1月8日　北田・大谷・下繁岡3地区で8年ぶりに鳥小屋が復活
（大谷は12日に開催）

3月21日　ならはスマートIC開通

4月13日　屋内体育施設「ならはスカイアリーナ」オープン

4月16日　楢葉町カントリーエレベーター及び自動ラック式米農業用低温倉庫、楢葉町水稲育苗センターが完成

4月20日　「Jヴィレッジ」が全面再開
「Jヴィレッジ駅」（臨時駅）が開業

4月25日　「道の駅ならは」の温泉保養棟が再オープン。温泉施設、レストラン、売店が再開

日本酒「楢葉の風」が販売を開始（H30. 4. 18）

笑ふるタウンに商業施設「ここなら笑店街」がオープン（H30. 6. 26）

みんなの交流館「ならはCANvas」オープン（H30. 7. 30）

ならはスマートIC開通（H31. 3. 21）

8月11日　長崎県壱岐市と友好都市を締結

9月1日　高速バス「富岡～Jヴィレッジ～東京」線が本格運行を開始

9月25日　楢葉町・Jヴィレッジ・楢葉町スポーツ協会で「スポーツによる楢葉町のまちづくり・地域活性化に関する三者連携協定」を締結

10月1日　楢葉町・広野町・川俣町がアルゼンチン共和国の復興ありがとうホストタウンに登録

10月12日　ブランド米「ならはう米」発売開始

10月18日　楢葉町とアンフィニ㈱が「災害対策及び地域活性化に関する包括連携協定」を締結

11月11日　楢葉町と㈲ウインズトラベルが「災害時等における緊急輸送、物資供給及び避難収容等に関する協定」を締結

12月15日　Jヴィレッジハーフマラソン開催

令和2（2020）年

3月8日　一般県道広野小高線（通称：浜街道）天神工区が開通

3月14日　JR常磐線が全線で開通。Jヴィレッジ駅が常設駅となる

6月8日　笑ふるタウンに「ならは薬局」オープン

6月19日　「道の駅ならは」物産館リニューアルオープン

9月11日　ギリシャ共和国の復興ありがとうホストタウンに登録

9月14日　国内最大級の楢葉町甘藷貯蔵施設及び農業用機械倉庫の落成式を開催

10月4日　楢葉町消防団が民友旗を受賞

12月1日　JR常磐線「竜田駅」の新駅舎が供用を開始

「Jヴィレッジ駅」が開業（H31. 4. 20）

「道の駅ならは」の温泉保養棟が再オープン（H31. 4. 25）

一般県道広野小高線（通称：浜街道）天神工区が開通（R2. 3. 8）

「道の駅ならは」物産館リニューアルオープン（R2・6・19）

国内最大級の楢葉町甘藷貯蔵施設及び農業用機械倉庫の落成式を開催（R2. 9. 14）

（東西自由通路11月30日、橋上駅舎12月1日）

12月23日　楢葉町甘藷生産部会設立

令和3（2021）年

2月2日　楢葉町ゼロカーボン推進プロジェクトチーム会議開催

3月7日　「復興感謝祭2021 楢葉ならでは祭～輝け！未来へ～」開催

ゼロカーボンシティ宣言

3月11日　「東日本大震災追悼・献花式」開催

3月20日　JFAメディカルセンター（整形外科／リハビリテーション科）が診療を再開

3月25日　東京2020オリンピック聖火リレーがJヴィレッジでグランドスタート。楢葉町が自治体では最初のリレー区間となる

JR常磐線「竜田駅」の新駅舎が共用を開始（R2. 12. 1）

「復興感謝祭2021 楢葉ならでは祭～輝け！未来へ～」開催（R3. 3. 7）

東京2020オリンピック聖火リレーでは自治体最初のリレー区間となる楢葉町をスタート（R3. 3. 25）

「第六次楢葉町勢振興計画」の概要

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故から10年。
楢葉町は、将来のまちづくりを展望した町政運営の指針となる
「第六次楢葉町勢振興計画」を令和３年３月に策定した。
この計画は、「次世代につなげるまちづくり」「町民の連携と協働」
「安全・安心な生活の確立」「広く外に開かれたまちの創造」を基本理念とし、
まちの将来像として「笑顔とチャレンジがあふれるまち　ならは」を掲げ、
今後、楢葉町が進むべき道筋を示している。

まちづくりの基本理念

震災から現在に至るまで、本町では、楢葉町復興計画に基づき、震災によって受けた影響を解消すべく、さまざまな施策・事業等に取り組んできました。今後 10 年間は、これらのさまざまな取り組みを礎として、まちのさらなる復興を目指していくこととなります。このため、復興計画の基本理念を継承しつつも、現在、まちが置かれている状況を踏まえ、まちづくりの基本理念を次のように設定しました。

これらの基本理念は、本計画の根幹をなし、今後、本計画に基づいて各種施策・事業等を進めていく上で常に立ち返るべき、基本的な考え方です。

基本理念１　次世代につなげるまちづくり

持続可能なまちづくりを進め、子どもたちの未来につなげる

- 多様な主体が連携・交流して出会いとつながりを生み出す。
- 新しい産業の創出・誘致、育成に向けた取り組みを強力に進める。
- ＩＣＴ（情報通信技術）を積極的に活用して、まちづくりの各種課題の解決に取り組む。
- 脱炭素化に取り組み、持続可能で活力あふれる地域の実現を目指す。

基本理念２　町民の連携と協働

一人ひとりがそれぞれの役割を担い、一体となってまちづくりを進める

- 町民一人ひとりが、それぞれの力を活かして、まちづくりに取り組む。
- 互いの助け合い・支え合いを通じて、地域共生社会の実現につなげる。

基本理念３　安全・安心な生活の確立

災害に的確に備え、誰もが安心して安全に暮らせるまちにする

- 災害の教訓を忘れず、より安全なまちづくりに活かしていく。
- 備えを着実に進め、自助・共助・公助により、危機を乗り越える強靭さを培う。

基本理念４　広く外に開かれたまちの創造

外からの新しい風を大切にして、変化を生み出す

- 在住者だけでなく、町や町民と「ご縁」があるさまざまな人材をまちづくりの担い手として幅広く求める。
- 町民の「人柄の良さ」を活かし、国内外の人を広く受け入れる風土をつくる。
- さまざまなジャンルでチャレンジする人を積極的に受け入れ、応援する。

基本構想

今後 10 年間、本計画に基づくまちづくりを推進することで
本町が目指すまちの将来像は、次のとおりです。

まちの将来像（目指す姿）

笑顔とチャレンジがあふれるまち ならは

～「ふるさと」の良さを活かした、しなやかなまちづくり ～

●笑顔とチャレンジがあふれるまち

誰もが健康で生きがいのある暮らしを営み、活力あるチャレンジをしている姿を意味します。一人ひとりがこころ豊かに毎日を送ることができるよう、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の基本理念に基づき、誰もが安心してこの地に暮らし続けることのできる社会の実現を目指すとともに、さまざまな人の“つながり”を活力にして、新しい挑戦が次々と生まれるまちを目指します。

●「ふるさと」の良さを活かした、しなやかなまちづくり

本町は、美しく豊かな自然に恵まれ、また全国有数のスポーツ施設などがあります。このように、すでにある本町の「良さ」は変えずに活かす一方で、新しいものごと・考え方を受け入れて柔軟に対応していく「しなやかさ」も大切にして、自由な発想をもとに、しなやかに成長していくまちを目指します。

基本目標（分野別の目標）	取組方針（分野別に実施する取り組
【基本目標１】 町民が主体的に取り組む、参加のまち ～ 地域コミュニティ分野 ～	◆新生ならはのコミュニティ再構築・活性化 ◆町民が主体的に参加し、つながるまちづくりの ◆多くの人を呼び込む魅力的なまちづくりの推進 ◆魅力ある仕事、余暇を充実させる“楽しさ”な ◆国際交流・外国人転入者の受入促進
【基本目標２】 学びを楽しみ､「ちから」と豊かさにつなげるまち ～ 教育・文化分野 ～	◆子どもの「ちから」を伸ばす教育の推進 ◆生活を豊かにする生涯学習の環境構築 ◆「ふるさと」の歴史・伝統・文化の保護、継承、
【基本目標３】 誰もが元気に、はつらつと暮らすまち ～ 健康・スポーツ・医療分野 ～	◆みんなが活き活き、心と身体の健康づくりの推 ◆気軽に楽しむ生涯スポーツの推進 ◆スポーツを活かした地域振興の推進
【基本目標４】 助け合い支え合う､みんなにやさしいまち ～ 福祉分野 ～	◆みんなが参画する「地域共生社会」の実現 ◆安心して出産・子育てできる社会環境の構築
【基本目標５】 地域資源・人材が輝く、にぎわいのまち ～ 産業振興分野 ～	◆町内外の潜在力を活用した農林水産業の再構築 ◆変化に対応した産業の育成・支援 ◆暮らしを豊かにする商業の活性化 ◆交流を生み出す観光の振興 ◆まちの活力を支える人材・企業への支援
【基本目標６】 暮らしやすく、安全・安心なまち ～ 生活・環境基盤分野 ～	◆長期的な道路維持管理と安全性の向上 ◆生活環境の向上と環境問題への取り組み ◆町内移動手段の利便性向上 ◆安全・安心な暮らしの確保

みの柱・方向性）

推進

どの発掘

活用の推進

進

ならは チャレンジ プロジェクト

- 学び合い・教え合う 誰でも先生教室
- 「ほどよい田舎」を活かす スローライフ推進
- 楢葉“いいとこどり” パッケージツアー
- 風を感じる サイクリングのまちづくり
- “農”を活かした 多面的な取り組みの推進
- ゆず太郎 YouTuber 計画

計画推進のための行財政運営

◆行政能力の向上
◆社会の変化に対応した財政運営の推進
◆町内外に対する広報・広聴の充実・強化
◆双葉郡の連携による広域行政の推進

基本理念（基本となる考え方）

- 次世代につなげる まちづくり
- 町民の 連携と協働
- 安全・安心な 生活の確立
- 広く外に開かれた まちの創造

分野別基本計画

６つの分野別の基本目標及び基本目標を達成するための取組方針毎に、主要施策と主な事業例及び取組の進捗を管理するためのＫＰＩ（重要業績評価指標）を定めたものです。
（※事業例及びＫＰＩについては本編をご参照ください）

基本目標 1

地域コミュニティ分野

町民が主体的に取り組む、参加のまち

東日本大震災から 10 年が経過し、施設の復旧・整備など、ハード面の復興は概ね目途が立っています。

今後は、若い世代の呼び込みや新たな居住者等とのコミュニティづくりといった、ソフト面のまちづくり、移住や定住促進に力を注いでいくことが必要です。

取組方針	主要施策
［1－1］ 新生ならはのコミュニティ再構築・活性化	①町民同士のつながり再編・構築と活性化 ②町外在住町民等とのつながり・交流
［1－2］ 町民が主体的に参加し、つながるまちづくりの推進	①町民等主体のまちづくり活動への支援体制構築
［1－3］ 多くの人を呼び込む魅力的なまちづくりの推進	①移住・定住促進
［1－4］ 魅力ある仕事、余暇を充実させる“楽しさ”などの発掘	①余暇を充実させる“楽しさ”などの発掘と発信 ②若者を呼び込む魅力的な会社・仕事の創出 ③ならはファン（交流人口・関係人口）の増加
［1－5］ 国際交流・外国人転入者の受入促進	①外国人の受入環境の整備 ②外国人就労者の受け入れ

基本目標 2

教育・文化分野

学びを楽しみ、「ちから」と豊かさにつなげるまち

町内で教育を再開したこども園と小・中学校では、英語教育、キャリア教育など、特色ある教育を進めています。

今後とも、これまで推進してきた「魅力ある教育」をさらに推し進めるとともに、生涯学習の環境構築、歴史・伝統・文化の保護、継承、活用を推進し、幅広い世代が学ぶことを楽しみ、生きていくための「ちから」を身に付け、生活の豊かさを享受しながら暮らしていけるまちを目指します。

取組方針	主要施策
［2－1］ 子どもの「ちから」を伸ばす教育の推進	①こども園・小学校・中学校の一体的・連続的な教育 ②将来を切り拓く力を身に付ける、特色ある教育の推進 ③地域や大学などと連携した地域学校協働活動事業の推進 ④魅力ある教育の情報発信
［2－2］ 生活を豊かにする生涯学習の環境構築	①新たな生涯学習拠点の構築 ②生涯学習活動の活性化
［2－3］ 「ふるさと」の歴史・伝統・文化の保護、継承、活用の推進	①歴史・伝統・文化の保護、継承 ②歴史・文化の継承活動推進・人材育成 ③東日本大震災・原発災害の経験継承

基本目標 3

健康・スポーツ・医療分野

誰もが元気に、はつらつと暮らすまち

町内や近隣町で医療機関の再開・開設が進むなど、医療体制が再構築されてきました。また、Ｊヴィレッジ再開、ならはスカイアリーナ建設など、スポーツ施設も従来以上に充実しています。

町民一人当たりの医療費や生活習慣病患者は増加傾向にあり、高齢化も進んでいることから、町民の健康寿命を延ばすため、健康づくりを推進します。また、充実したスポーツ環境を活かして町外から人を呼び込み、地域振興につなげます。

取組方針	主要施策
［3－1］ みんなが活き活き、心と身体の健康づくりの推進	①健康維持・健康管理の環境整備 ②日常生活における健康の維持・増進 ③心の健康対策の推進 ④放射線健康管理の推進 ⑤感染症予防対策の着実な継続実施
［3－2］ 気軽に楽しむ生涯スポーツの推進	①重点スポーツ種目「広義のサッカー」の普及拡大 ②生涯スポーツの推進
［3－3］ スポーツを活かした地域振興の推進	①スポーツコミッションによる地域振興 ②スポーツツーリズムの推進による地域振興

基本目標 4

福祉分野

助け合い支え合う、みんなにやさしいまち

高齢化率の上昇、単身世帯の増加に加え、長期に及んだ町外避難の影響もあって、介護等が必要な人も増加傾向にあります。一方で、そうした方々を支える福祉ボランティアなどの担い手が不足しています。

今後、全世代型の地域包括ケアシステムを構築し、「地域共生社会」の実現を目指します。その中では、男女共同参画、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）にも取り組んでいきます。

また、さまざまな子育て支援などを通じて、町民が安心して出産・子育てすることのできる環境づくりも推進します。

取組方針	主要施策
［4－1］ みんなが参画する「地域共生社会」の実現	①全世代型の地域包括ケアシステムの構築 ②ボランティア等による地域密着型助け合い体制の構築 ③男女共同参画の推進 ④人権への理解促進、権利擁護の支援
［4－2］ 安心して出産・子育てできる社会環境の構築	①子育て支援拠点・子育て世代の交流促進 ②保育・教育環境の充実

分野別基本計画

基本目標 5

産業振興分野

地域資源・人材が輝く、にぎわいのまち

これまで、農地の土壌除染や楢葉南工業団地の再生、ここなら笑店街の開業など、早期の産業活動の再開に向けて各種の復旧・復興関連事業に取り組んできました。

今後の地域経済の活性化に向け、これまでに復旧した産業基盤のほか、地域の資源や人材を最大限に活用し、町外からの資金・人材の獲得、町内産業への支援を進めていくことで、にぎわいのあふれるまちを目指します。

取組方針	主要施策
［5－1］ 町内外の潜在力を活用した 農林水産業の再構築	①農林業等の振興 ②スマート農業の推進など、新たな取り組みの展開 ③木戸川の地域資源の回復
［5－2］ 変化に対応した 産業の育成・支援	①既存産業を中心とした活性化支援
［5－3］ 暮らしを豊かにする 商業の活性化	①事業をしやすい環境づくり
［5－4］ 交流を生み出す観光の振興	①自然や農業、スポーツ等の資源を活用・連携した交流促進
［5－5］ まちの活力を支える 人材・企業への支援	①雇用促進・人材獲得や勤労者福祉の充実

基本目標 6

生活・環境基盤分野

暮らしやすく、安全・安心なまち

Ｊヴィレッジ駅が開業し、総合グラウンドやならはスカイアリーナ、天神岬スポーツ公園がＪヴィレッジなどと連携して、町内外の利用者を集め、スポーツや健康づくりの一大拠点となることが期待されます。

美しい楢葉町を未来の子どもたちに残すため、環境にやさしいエネルギーを活用して脱炭素社会の構築に取り組み、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の実現、近年激甚化する気象災害や地震・津波に対する防災対策にも積極的に取り組みます。

取組方針	主要施策
［6－1］ 長期的な道路維持管理と 安全性の向上	①道路の整備及び維持管理 ②通学路の安全確保
［6－2］ 生活環境の向上と 環境問題への取り組み	①にぎわいづくり ②環境問題への取り組み促進 ③維持可能なライフライン運営
［6－3］ 町内移動手段の利便性向上	①「移動が楽しめるまち」の構築 ②鉄道の利便性向上に向けた取り組み
［6－4］ 安全・安心な暮らしの確保	①災害に強いまちの実現 ②新型コロナウイルスを始めとする各種感染症への対応 ③交通マナーの向上、防犯対策

ならはチャレンジプロジェクト

今後、町が特に重点的に取り組む６つのプロジェクトを「ならはチャレンジプロジェクト」として設定します。

プロジェクト 1

学び合い・教え合う 誰でも先生教室

ならはチャレンジプロジェクト

まちの子どもたちが健やかに成長する上では、新たな知識を学ぶことの楽しさを実感し、より一層の好奇心・知識欲を育みながら暮らしていくことが大切です。

子どもたちがさまざまな事柄を多くの人々から学ぶ機会を創り出すとともに、単に教わるだけでなく自ら教える機会も設けて、学び合い教え合う環境づくりを推進します。

具体的な取り組み

- **同学年の子ども同士はもちろん、学年を超えた子ども同士の教え合い**
  - 小学生→こども園児
  - 中学生→小学生
  - 高校生、大学生（帰省中に）→中学生
- **町内外のさまざまな立場の大人からの学び**
  - 町内各文化団体からの学び
  - 多世代交流によるお年寄りからの学び
  - 地元農家・企業等からの地域産業に関する学び
  - 最先端の研究者、企業人など、町外の人々からの学び
- **スポーツ、就職・進学に関する相談など、子どもの将来を共に考えるメンター制度の導入**
- **本に親しむ多様な環境づくりの推進**

プロジェクト 2

「ほどよい田舎」を活かす スローライフ推進

ならはチャレンジプロジェクト

楢葉町は、常磐自動車道や国道６号、ＪＲ常磐線など交通の便には恵まれており、また震災後にできた「笑ふるタウンならは」に「ここなら笑店街」がオープンするなど、生活環境の利便性も向上してきました。

まちの豊かな自然、充実したスポーツ施設などを活かした「スローライフ」を推進し、のんびりと「ほどよい田舎」を楽しめるまちとしてＰＲし、まちの魅力を情報発信していきます。

具体的な取り組み

- **多様で柔軟な働き方の推進**
- **テレワーク向け住宅（インターネット環境、ワークスペース等）の整備推進**
- **「ふるさとテレワーク」の推進**
- **既存公共施設を利用したテレワークセンターの整備**
- **余暇を楽しむスポットの発掘・創造**
  - 木戸川・木戸ダムを活用した水上スポーツ、フィッシング等
  - ならはスカイアリーナ等を活用したスポーツ、フィットネス
  - キャンプ場でのグランピング
- **家庭菜園や副業としての農業の推進**

ならはチャレンジプロジェクト

プロジェクト 3　楢葉“いいとこどり”パッケージツアー

ならはチャレンジプロジェクト

多くの魅力的な資源を組み合わせたモデルコースを設定し、「いいところ」をふんだんに盛り込んだ“いいとこどり”パッケージツアーを展開します。

新たにさまざまな体験ができる“体験型”の観光コンテンツを創り出し、それを教えるインストラクターなどの人材育成、来訪者に「また来よう」と思っていただける仕組みづくりに取り組みます。

具体的な取り組み

- **魅力的な“体験型”観光コンテンツの発掘・創造、インストラクター等の人材育成**
  - 木戸川・木戸ダムを活用した水上スポーツ、フィッシング等
  - ならはスカイアリーナ等を活用したスポーツ、フィットネス
  - キャンプ場でのグランピング
  - 海水浴場、サーフィン
  - 観光としての農業
- **“まちを知り尽くす”モデルコースの設定**
  - 歩道付きウォーキングロードの整備
  - 浜街道等を活用したサイクリングロードの整備
- **繰り返し訪れたくなる“仕掛け”の設定**
  - コース沿道の町民が「必ず手を振る」おもてなし
  - 宿泊回数券、ツアーポイント制度
  - チェックポイントを設定したスタンプラリー制
  - ふるさと納税返礼品としてのツアー

プロジェクト 4　風を感じるサイクリングのまちづくり

ならはチャレンジプロジェクト

楢葉町内はもとより近隣市町村と連携してサイクリングコースを設定・整備するなど、サイクリングをより楽しむことのできるコースづくりに取り組みます。

また、シェアサイクルの導入など、気軽に自転車を使うことのできる環境づくりや、サイクリングが楽しめるイベントなどの開催を通じて、サイクリングが楽しめるまちとしてＰＲしていきます。

具体的な取り組み

- **サイクリングコースの設定・整備**
  - 近隣市町村と連携したサイクリングコースの設定・整備
  - 子ども向けストライダー・ＢＭＸコースの設置
- **サイクリングしやすい環境づくり**
  - サイクリングターミナルの機能充実（レンタサイクル、シェアサイクルの導入等）
  - 町内各所への簡易自転車置き場配置
  - サイクルトレイン（自転車をそのまま持ち込める列車）の運行誘致
- **サイクリングが楽しめるイベントの開催**
  - オリエンテーリングコースを活用したサイクル・オリエンテーション
  - サイクル・ロゲイニング
  - ツール・ド・浜通り
- **サイクリングが楽しめるまちとしてのＰＲ**
  - サイクリング関連団体との連携による広報媒体の活用

プロジェクト 5　“農”を活かした多面的な取り組みの推進

ならはチャレンジプロジェクト

シゴト（生業）としての農業だけではない、“農”を推進し、その良さを幅広い分野で活かしていきます。

農業体験のできる農園や観光農園、木戸川のサケ釣り、アユ釣りなど、“農”を活かした観光コンテンツづくりを目指します。また、農業体験などを通じた食育、地元の特産品を使った商品開発を行うキャリア教育など、“農”を活かした教育も展開します。さらに、福祉分野と“農”との連携、生きがいや健康づくりの“農”の推進に取り組みます。

具体的な取り組み

- **“農”を活かした観光コンテンツの開発・推進**
  - 農業体験農園・観光農園、農家民宿、農家レストラン、農産物オーナー制度など
  - 木戸川のサケ一本釣り、アユ等の渓流釣り
- **“農”を活かした教育の展開**
  - 農業体験などを通じた食育
  - 地元産品を使った商品開発などによるキャリア教育
- **福祉分野と“農”の連携**
  - 福祉施設における“農”関連プログラムの導入
  - 農業法人と障がい者施設等の連携推進
- **生きがい・健康づくりとしての“農”の推進**
  - 健康づくり農作業プログラムの開発・推進
  - 町民農園の整備等による家庭菜園の推進
- **家庭菜園等における農産物の販路等構築（マルシェ、道の駅など）**

プロジェクト 6　ゆず太郎 YouTuber 計画

ならはチャレンジプロジェクト

「ならはチャレンジプロジェクト」の各プロジェクトを連携させて、全体として移住・定住の促進につなげるため、まちのマスコットキャラクター「ゆず太郎」に YouTuber として活躍してもらいます。

YouTubeで配信する動画は、子どもたちがＩＣＴ（情報通信技術）教育の一環で作成するなど、多くの方々に関わっていただきながら、ゆず太郎をYouTuberとして育て、その姿を発信することで、楢葉町の魅力と元気を発信します。

具体的な取り組み

- **さまざまな体験をする「ゆず太郎」の姿をYouTube で配信**
- **ならはチャレンジプロジェクトによるさまざまな活動**
  - ゆず太郎が教える教室
  - スローライフを楽しむゆず太郎
  - パッケージツアーを楽しむゆず太郎
  - サイクリングするゆず太郎
  - 家庭菜園で収穫するゆず太郎　など
- **著名スポーツ選手と一緒にプレイ**
- **農家さんとともにサツマイモ・米の栽培・収穫　など**
- **動画作成も、さまざまな人が参画**
  - 子どものＩＣＴ（情報通信技術）教育の一環でYouTube 動画作成
  - 著名人がゆず太郎になる
  - 農業体験に来た農大生・農業高校生が動画制作

楢葉町

［第３編］

災害

語り継ぐ震災、築く未来へ

記録誌

◎発行日◎
令和３年８月

◎発　行◎
福島県楢葉町

〒979-0696　福島県双葉郡楢葉町大字北田字鐘突堂5-6
TEL 0240-25-2111
FAX 0240-25-5564

◎編　集◎
楢葉町政策企画課